

192
55

故實
叢書
武家名目抄

稱呼部

卷



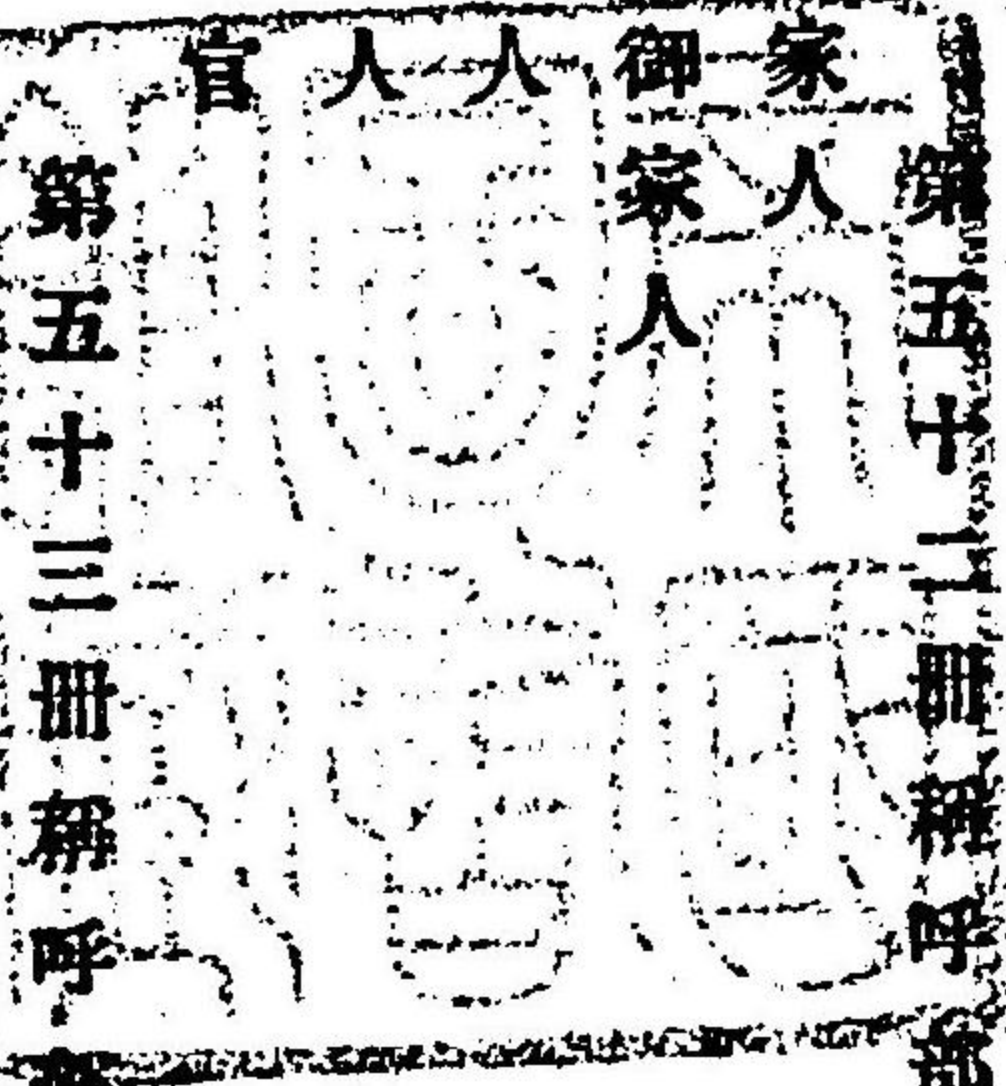
武家名目抄稿十二目次

第五十三册稱呼部十一上

御家人	一二五五
非御家人	一二六〇
家人	一二六一
候人	一二六三
被官	一二六三
家子	一二七一
家臣	一二七五
家僕	一二七五
家士	一二七五
郎等	一二七五
郎從	一二七九
所從	一二八一
從者	一二八二
陪從	一二八二
股肱之者	一二八二
內之者	一二八二

第五十四册稱呼部十一下

家來	一二八三
家中	一二八六
家風	一二八七
家勢	一二八九
手者手調者	一二八九
手人	一二九二
手下	一二九二
手廻	一二九二
御內	一二九三
外樣	一二九五
譜代	一二九九
等五十六册稱呼部十二下	
近習御近邊衆	一三〇三
外樣近習外樣近寄衆	一三〇五
腰本	一三〇六
本座	一三〇六
新座新衆	一三〇六
外座	一三〇七



本參 今元	一三七
新參 今參	一三九
新加參	一三九
今馳	一三九
當參	一三九
初參	一三九
大身	一三九
中身	一三〇
小身	一三〇
上臚 今元	一三一
下臚	一三一
傍輩	一三一
同役	一三一
第五十七册稱呼部十三上	
公方衆	一三三
公方人 今元	一三三
公方者	一三三
當方衆	一三三
直參	一三四
直之者	一三四

又者 陪臣	一三一四
奉公衆 奉公方衆	一三一六
奉公 奉公人	一三一七
供奉人	一三二〇
第五十八册稱呼部十三下	
渡奉公	一三二一
給人	一三二一
給主	一三二四
藏給	一三二四
無給人	一三二五
無足人	一三二五
無足衆	一三二六
扶持人	一三二六
扶持給	一三二七
少給	一三二七
地下人	一三二七
罕人 罕人 罕人 分	一三二八
第五十九册稱呼部十四上	
大將	一三三二
大將分	一三三三

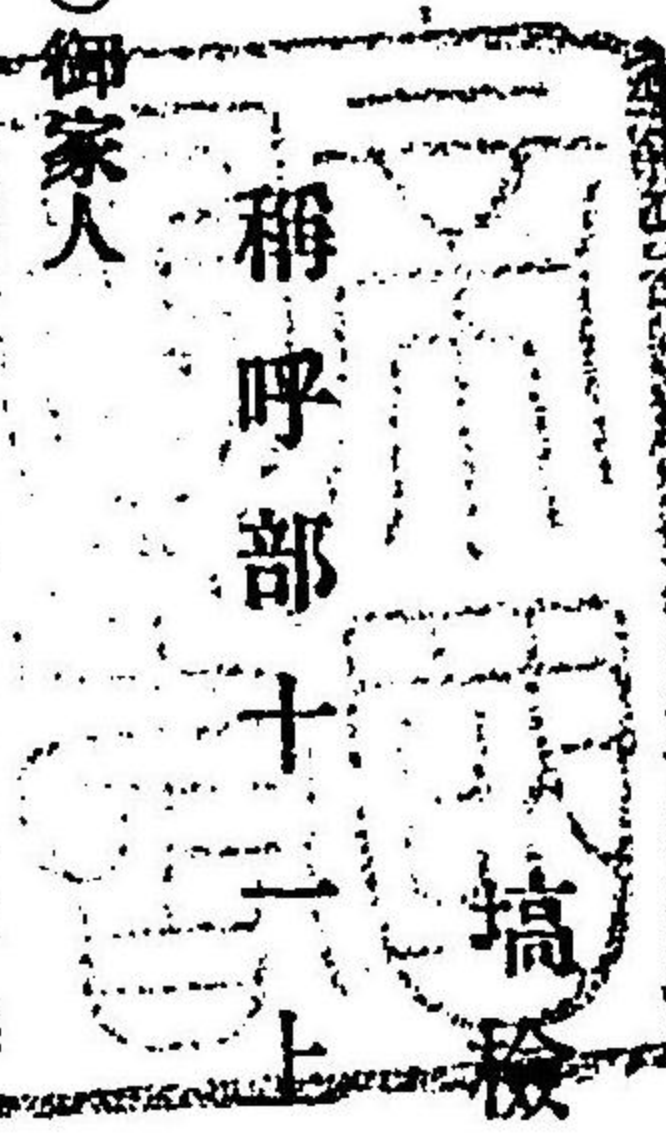
良將	一三三三
名將	一三三三
軍將	一三三三
勇將	一三三四
猛將	一三三四
剛將	一三三四
部將	一三三四
一授大將	一三三四
兵大將 今元	一三三五
若大將 今元	一三三五
先手大將	一三三五
小將	一三三五
施取	一三三五
騎馬之者	一三三五
騎馬衆	一三三五
乘馬	一三三六
馬上	一三三六
寄合衆 會合衆	一三三七
歷々衆	一三三七
備持衆	一三三七

一旗衆	一三三七
成アガリ	一三三八
仕上者	一三三八
第六十册稱呼部十四下	
案内者	一三三八
間之者 今元	一三四二
水俣ノ者	一三四二
白齒者	一三四二
伴者 又加世者 伴侍ト	一三四二
葉者	一三四四
輕者 今元	一三四四
下部	一三四四
走下部	一三四五
下男	一三四五
下手	一三四五
相傳之下人	一三四六
夫丸	一三四八
第六十一册稱呼部十五上	
頭	一三四八
頭分	一三四九

大頭	一三四九
小頭	一三四九
組衆	一三五〇
小組衆	一三五〇
旗組今元	一三五〇
旗頭	一三五〇
旗子	一三五二
采配頭	一三五二
陣頭	一三五二
組頭	一三五二
組付	一三五二
組子	一三五三
組足	一三五三
先組	一三五四
先衆	一三五四
先方衆	一三五四
前方衆	一三五四
黄纒衆	一三五四
寄親	一三五六

第六十二册稱呼部十五下

武家名目抄稿第五十二册



稿檢校保己一編

○御家人
 平治物語云常盤カ腹三人アリ兄ハ今若トテ七也中ハ乙若トテ五末ハ牛若トテ今年生タリ義朝此等カ事心苦シク思ハレシハ金王丸ヲ道ヨリ返シテ合戦ニ打負テ何地トモナク落行トモ心ハ跡ヲ顧テ行先更ニ覺ニス(中略)常盤泣ク泣クサテモ何方ヘトカ聞ツルト問ケレハ譜代ノ御家人達ヲ御憑候テ東ノ方ヘトコソ仰候シ暫モ御行末覺束ナク存候ヘハ暇申テトソ出ニケル

源平盛衰記云兵衛佐權北條ヲ召テ平家追討ノ院宣ヲハ給タレトモ折節無人也イカ、スヘキトソノタマヘハ時政悦ヒ申ケルハ東八ヶ國ニハ黨モ高家モ大名小名君ノ御家人ナラヌ者ヤハ候フソ

吾妻鏡云治承四年六月廿四日乙巳入道源三位敗北之後可被追討國々源氏條康信申狀不可被處浮言之間遮欲廻平氏追討策仍遣御書被招累代御家人等

稱呼部十一上

親方	一三五六
親分	一三五六
寄子	一三五七
烏帽子親	一三五八
烏帽子子	一三六〇
乳母子	一三六一
支配	一三六一
觸頭今元	一三六一
張本人	一三六一
頭取	一三六三
肝煎	一三六三

又云治承四年九月三日壬子景親乍爲源家譜代御家人今度於所々奉射之次第一旦匪守平氏命造意企己似有別儀但令一味彼凶徒之輩者武藏相模住人計也其內猶三浦中村者在御共然者景親謀計有何事哉之由有甚沙汰仍被遣御書於小山四郎朝政下河邊庄司行平豐島權守清元葛西二郎清重等是各相語有志之輩可參向之由也

又云養和元年四月七日壬子御家人等中撰殊達弓箭之者亦無御隔心之輩可候于御寢所之近邊之由被定云々

- 江間四郎 下河邊庄司行平
- 結城七郎朝光 和田次郎義茂
- 梶原源太景季 宇佐美平次實政
- 榎谷四郎重朝 葛西二郎清重
- 三浦十郎義連 千葉太郎胤正
- 八田太郎知重

又云廿日乙丑小山田三郎重成聊背御意之間成怖畏籠居是以武藏國多摩郡内吉富并一宮蓮光寺等注加所領之內去年東國御家人安堵本領之時同賜御下文訖而爲平太弘貞領所之旨捧申狀之間糺明之處無相違仍

千二百五十五

所被付弘貞也

又云治承六年八月十一日己酉及晚御臺所有御產氣武衛渡御諸人群集又依此御事在國御家人等追日多以參上為御祈禱被立奉幣御使於伊豆宮根兩所權現并近國宮社所謂

伊豆山土肥

宮根佐野

相模山平原

三浦十二天佐原

武藏六所宮佐四

常陸鹿島小栗

上總一宮小栗

下總香取社千葉小栗

安房東條平六

同國洲崎社安四

又云元曆二年三月三日丙戌被仰遣近藤七國平并京畿內御家人等之許但於御一族之中軒濫相交之條依下耻世誘給於御書之面雖被載物狂潛有憐愍御志可參向關東之趣內々被諫仰云々

又云文治三年十一月廿五日壬戌有但馬國住人山口太郎家任云者弓馬達者勇敢士也(中路)家任譜代源氏御家人也就中父家修者仕六條廷尉禰室輪忠拜領數箇所平家執天下之時悉以窶籠

又云承元四年六月三日己未昨日於相模國九子河土肥小早河之輩與松田河村一族有喧嘩兩方郎從被疵其後相

等記

承久軍物語云故右大しやうよりとも卿平家をうちほろはしたるけんしやうに後しら川の院日本このそう地とうを給はりたるなりてうてきついと六かねんかあひたるひはおやをうたせ子をうたせあるひはしうたうをせいへの子をうしなひたる御家人ともにくんこうのしなくにしたかひてわかちたひたらんちとうしよくをさせるさいくはもなくしてよしときかはからひとしてあらため申へきやう候はすときまようし奉らさりし云々

東寺文書關東致兩六波羅殿狀案諸國御家人跡為領家進止之所々御家人役事御家人相傳口口口雖為本所進退無指誤於致改易者任今度御教書之旨可被申子細也其上不事行者可被注申關東以前又當知行之輩其答出來者以御家人役勤仕之可被改補之由可被執申給臺所役者任先例不可有怠之由可被催沙汰之旨可令申沙汰之狀口口口如件寬元元年八月三日謹言相模守殿武藏守

又云六波羅御教書云下司代藤實不入內勘解由允河縁兵衛尉同五郎允左衛門太郎等構城墩墩及合戰之上彼署退散令進出下司代口口甚招重科歟不日俟野直太郎相助

互籠城之由依令風聞為相鎮之義盛義村將命行向畢

今日入夜歸參件盡納涼道通之間頗及雜談就論先祖武功之勝劣雖有此闕諍應御使諷諫早成和平與力衆等退散云々勇士者収其身可奉護國家之處近代諍私武威動起鬪亂不忠之至不可不誠之由如相州有共沙汰向後於巧此儀者召所帶永可被放御家人之號旨以今夜中被下御書於雜色可付土肥松田等云々

又云建曆二年三月十六日癸亥前濱邊為屋地分賜御家人等所謂土屋大學助和田新左衛門尉境平次兵衛尉波多野次郎牧小太郎長江四郎千葉次郎等也清圖書允奉行之又云寶治二年八月十日甲申備前國住人服部左衛門六郎可致御所中奉公之由被望申之今日評定之處承久元年以來如醫陰兩道之類被召加御簡等事者自京都令祇候御所之故也雖無父祖之例號御家人今更於被聽奉公之條者為揭焉之輩事歟遠國住人等帶廷尉豫章記云平家追討勳功依異于他右幕下御賜豫州道後七郡守護久米郡以下郡々所々地頭職元久二年預卅餘御家人進退之御下知實朝之時贈一國守護并新居西條莊被仰出也

豫章記云平家追討勳功依異于他右幕下御賜豫州道後七郡守護久米郡以下郡々所々地頭職元久二年預卅餘御家人進退之御下知實朝之時贈一國守護并新居西條莊被仰出也

相催近隣地頭御家人在彼所領破却城墩守者感狀沙汰所司代於垂水村勘解由等以下輩者任法可召進

又云嘉禎目錄事四文職事馬上免事口三箇條目六波羅令尋問之處如御家人在應運署起請文者不及知云々如地頭忠清六月三日不記書狀者有田三郎鳥羽左衛門尉載起請文之詞注進之由雖申之口口口事者為地頭家人之旨定安令申之口口取進之間不定信用

六波羅御下知云感神院領丹波國波々伯部保下司氏澄代良盛與雜掌親圓相論下司職名田島并及傷狼藉等事口口便之趣雖多子細所詮如良盛申者當口口為氏澄開發私領之間下司職則重代相傳也所謂慶祖盛助入建久三年本御家人注文之上寬喜元年六波羅使者字間刑部左衛門尉菅五衛門尉等注進御家人交口之御祖父盛經專入人數畢隨又局戶三口朝口口保濫妨之時盛經可安堵之由所被載關東御下知也

太田康有記云關東御教書六波羅狀并守護催促狀等者或相催御家人役或可勤仕御公事之旨所見也道範阿闍梨南海流浪記云仁治四年正月十三日國府立讀岐ノ守護所長雄二郎左衛門ノ許ニ至ル十四日守護所ノ許ヨリ鶴足津ノ橋藤左衛門高能ト云御家人ノ許被預云

云

貞永式目云諸國守護人奉行事左右大將家御時所被定置者大番催謀叛殺害人付夜討強盜山賊海賊等事也(中略)抑雖爲重代御家人云々

新編式目追加云一凡下輩不可買領買地事文應右以私領令沾却事爲定法之由先度雖被書載自今以後者縱雖爲私領於買渡凡下之輩并借上等者任近例可被收公彼所領也又雖爲待已上非御家人者不及知行云々

又云西國御家人中於所領知行之輩者隨守護所催可勤仕京都大番云々

新式目云弘安七可爲御家人事會祖父之時被成御下文之後子孫雖不知所領爲御家人可令安堵歟新式目追加云關東御家人次雲客已上爲望君讓所領於女子事正應二右於公領者隨其分限可被省宛之由先日被定置自今以後於相具雲客已上之女子者不可讓與所領也

沙汰未練書云御家人トハ往昔以來爲開發領主賜武家御下文人事也開發領主トハ根本私領也又本領ト云梅松論云下御所の御手には高越後守師泰關東京部の供奉

土屋を申ける借は子細有とて長高を頼みに被思召け

國太曆云江州兎徒押寄勢多條觀應元年十二月五日昨日未刻方々凶徒寄懸勢多懸内邊之守護代數百人不及放一矢京方人逃落口口勢多橋并勢多宿屋懸内宿所等當國一宮社頭以下不殘一字悉燒拂候了橋勿論落了彼家々皆追捕畢大江大直以下宿々地頭御家人等家々も猶燒拂追捕取云々とかく無申許候

花營三代記云應安五年七月十一日日吉神興造替料足事被付諸國段錢(中略)所詮召出國之大田文一寺社本所領并地頭御家人等分領悉定公田一段別三十文急速可執進之若有難澁之在所守護使相共遂入部可致謹責矣

相州兵亂記云公方並領不和條去程ニ村上加勢トシテ桃井左衛門督ヲ大將トシテ上州一揆武州一揆那波上總介高山修理亮等已ニ打立ケル所ニ鎌倉管領上杉安房守憲實諫言ヲ以テ被申ケルハ信州ハステニ京都ノ御家人ナリ彼ヲ御退治アルコト京都ヘノ御不義ナリ

初井日記云信長卿丹波家名代使者御對面條兩使ノ者共ヨリ荒木久左衛門尾林越後等カ方ヘ所縁ヲ以テ云ツカハスハ今度丹波家毛利

の壯士等ならひに少二大友長門周防安藝備前備中の御家人等屬し奉る

太平記云龍馬進先大内裏造營可有テ諸國ノ地頭ニ二分一ノ得分ヲ割分テ被召ケレハ兵革ノ弊ノ上ニ此功課ヲ悲メリ又國々ニハ守護威ヲ失ヒ國司權ヲ重クス依之非職凡卑ノ目代等貞應以後ノ新立ノ庄園ヲ沒倒シテ在廳官人檢非違使建兒所等過分ノ勢ヒヲ高セリ加之諸國ノ御家人ノ稱號ハ賴朝卿ノ時ヨリ有テ已ニ年久シキ武名ナルヲ此御代ニ始テ其號ヲ被止ヌレハ大名高家イツシカ凡民ノ類ニ同シ其憤幾千萬トカ知ラン

又云正行參吉野條武藏守手勢七千餘騎ヲ卒メ八幡ニ著ク此手ニ馳加ル人々ニハ細川阿波將監清氏以下姓名略之多田院御家人源氏二十三人外様大名四百三十六人都合其勢六萬餘騎

伯耆卷云二月始頃にや自京都供奉仕ける成田入道を召て被仰下けるは思召立たる、事あり此番衆の中に誰をか可有御頼と勅定ありければ土屋又四郎と申者を召て參る(中略)伯耆國奈和庄地頭に村上又太郎長高と申者は可有御頼候近國には自是外には候はずと申て御前を罷立ぬ大番勤て候ける地頭御家人等の中に御志有者多かりければ彼等に如前有御尋ければ廿四人まで如

家別所ヲ語ラヒ一同ニシテ大將軍合體ノコト候依テ禮使トシテ中務雅樂助等安土岐阜ニヲモムキ候荒木殿ハ將軍家重恩ノ御家人トシテ不義ノ弓矢ヲ引タマフ事勿體ナク候

安土日記云土方次郎兵衛ト申者譜代之御家人也東遷基業云神君より中村式部少輔一氏并御家人酒井河内守重忠を御使として三成カ方へ遣され今天下の騷動一とへに貴殿の一身にあり秀頼公御幼少の御事なれば是非を糺さるへき時節にあらず先貴殿の領地佐和山へ下り隠居せらるへし子息隼人をもり立て貴殿のこくと末々は五奉行の列になし領地に相違なき様に沙汰すへしとおほせられける

慶長年録云慶長十八年六月廿一日御家人松平清六と申者鈴木松兵衛子を令同道品川へ遊山に出増上寺へ寄寺のくりへ出出家衆をとかめ喧嘩に成門をたて出合大勢にて切合申候間清六方小勢にて二人ともに相果申候

懷中記云慶長十九年甲寅年十月三日被召集御家人被綱軍令於諸將一在國輩守教令自其國々可馳向云云

元寬日記云元和元年六月廿六日御目付豐島刑部同加々爪

民部此時は御使番間宮權左衛門御納戸兼石川喜衛門御軍法を省き前田筑前守利常が先手に行手に合申候故御勘氣を蒙る右四人は家康公御家人いづれも先手に加て手に合申候

又云二年七月二日神尾刑部少輔近藤石見守上使として少將方へ遣はさる少將御請云く天命に背き父兄の御不審を蒙ふる上はいかてか上意に背くへき此上は御家人等に仰せ忠輝か頭を刎らるへし聊かうらみに思ひたてまつらす云々

武蔭叢話云板倉伊賀守勝重の物語に紀伊大納言頼宣卿の御母儀お萬殿塙團右衛門事を聞及れ團右衛門は古主に構はれ奉公成らす共世の中若何事も出来なは能侍を一人にてもいとをしき子には進度ものなれば團右衛門は常陸介殿御家人に成さるへきとて御鏡臺金として五百兩つ、毎年御拜領之内を二百兩宛團右衛門に御合力有りたるとな

又云眞田左衛門佐信賀は夏陣には五月六日畷田口へ罷出し伊達正宗とせり合けり(中略)翌七日の合戦には眞田勘解由大塚清安高梨主膳と一所に左衛門佐討死す四十六歳也首をは越前少將忠直の御家人西尾仁左衛門討取眞田か

首共知らずして鼻にせんとしけるを御使番眞田隠岐守信尹通りか、り其首は見知りたる所有其甲はなきかたつぬ云々

○非御家人

東寺文書云若狹國御家人等重言上爲東寺供僧申付無實一改易同國太良保内未武名主職依宛給非御家人順良快深并葉蓮女子御家人役闕如間就訴狀雖被下御教書不及陳狀上は如元欲被申付中原氏子細事副進一通御教書案件名者如先度言上當國言上重代御家人丹生出羽房雲嚴先祖開發之領地而自領家御方被押領之間任關東度々御教書旨就御家人等訴申自六波羅殿執御沙汰之間故三河僧正御房御時被經重之御沙汰任相傳證文之道理被付氏仁畢而去年春無故被改中原氏宛給預所下人并乘蓮女子之條存外之次第也如度々關東御教書者可與立當國舊御家人等跡之由被仰下之處以當役勤仕重代御家人領宛給預所々從快深并非御家人乘蓮女子之條不可然之次第也且引入守護使之中構出無實以無各御家人領宛給非御家人等之條旁以存外也非御家人之上者云快深云乘蓮女子當名爭可令知行哉一次守護代并重代御家人引入守護使之旨申付

無實之上者不日有糺御沙汰欲被行其科二次依蒙

古國事可致用意之由被下關東御飛書之間有共沙汰處以御家人名田宛給非御家人之條無法之次第也

三次舊御家人之跡可與立之由度々被下關東御教書之處利頭倒當名之條違背關東御教書之故歟次當名爲往古御家人領非百姓名之處被宛百姓公事之條無

謂次第也五次被付去年九月十九日御教書并御家人等申狀之處于今不被申陳狀御返事之條違背武家故歟六早任兩度言上之旨被返付于王氏女可令勤仕御家人役之由爲被仰下言上如件建治二年六月日

沙汰未練書云非御家人トハ其身ハ雖爲侍不知行當役勤仕之地下人事也

○家人
奥州後三年記云家ひらか乳母千任といふもの屋くらの上に立て聲をはなちて將軍にいふやうなんちの父頼義貞任宗任をうちえすして名簿をさ、けて故清將軍をかたらひ

たてまつりひとへにそのちからにてたま、貞任らをうちえたり恩をになひ徳をいた、きていつれの世にかむくひたてまつるへきしかるを汝すてに相傳の家人としてかたしけなくも重恩の君をせめたてまつる不忠不義のつみ

さためて天道のせめをかうふらんかといふ

常陸大椽傳記云家子ト云ハ本領ヲ持タル名代ノ人ノ奉公スルヲ家子ト云也一家ノ端ナレトモ本領重代ノ名字懸ル所ニナキ人ハ家子トセス是ヲ家人ト云ナリ

百練抄云正治元年正月廿五日故頼朝卿家人隨右近中將頼家可奉仕諸國守護之由宣下

關東評定傳云安貞元年六月十八日武藏次郎時實爲家人被殺害二年十七

梅松論云義貞の勢は稻村崎を経て前濱の在家を焼拂ふ煙みへければ鎌倉中のせはき手足なと置所なくあはて、ふためきける有様たとえていはんかたそなき高時の家人諏訪長崎の輩身命を捨て、ふせき戦ひける云々

太平記云千種殿文親千種頭中將忠顯朝臣ハ故六條有房公ノ孫ニテ御座シカハ文字ノ道ヲコソ家業トモ嗜マルヘカリシニ弱冠ノ頃ヨリ我道ニモアラヌ笠懸犬追物ヲ好ミ博奕嬉亂ヲ事トセラレケル間父有忠卿離父子義不孝ノ由ニテ被置ケルサレ共此朝臣一時ノ榮花ヲ可開過去ノ

因縁ニヤ有ケン主上隠岐國へ御遷幸ノ時供奉仕テ六波羅ノ討手ニ上リタリシ忠功ニ依リ大國三箇國關所數十箇所被拜領タリシカハ朝恩身ニ餘リ其侈リ目ヲ驚セリ其重

恩ヲ與ヘタル家人共ニ毎日ノ巡酒ヲ振舞セケルニ堂上ニ袖ヲ連ヌル諸大夫侍三百人ニ餘レリ

又云方合體洞院左大將實世公被申ケルハ直義入道カ申處甚以僞レリ相傳譜代ノ家人師直師泰カ爲ニ都ヲ被

追出ニ身ノ措處ナキ間聊借ニ天威ニ己爲レ違ニ宿意奉レ掠ニ天聽ニ者也

又云島山道哲一方ノ大將ニモト憑狩野介モ降參シヌ又其外相傳譜代ノ家人厚恩異レ他郎從共モ日ニソヘ落失テ今ハ

戰フヘシトモ覺ヘサリケレハ云々

東寺文書云弓削島事御執事貞和五十九年中東寺申伊與國弓

削島事右當島者姓口之寺領重色之料所也而小早河彈正忠以下輩雖レ致ニ無理濫妨ニ就ニ度々御奉書ニ寺家當知行無ニ相

違ニ之條去二月四日御奉書同使節渡狀分明也爰彈正忠并小坂鶴夜又九浦左衛門太郎安須賀美作五郎以下輩在國家

人田中次郎兵衛尉島平六并藤九郎口口率ニ數多人勢ニ今月一日伺ニ國中ニ忿劇之陳打ニ入當島ニ追ニ捕百姓住宅ニ致ニ亂

妨狼藉ニ一條濫吹之至言語道斷次第也所詮早停ニ止濫妨ニ欲全ニ寺家之所務ニ矣貞和五年九月日

國太曆云世上不可有殊觀應元年十一月廿二日入夜又風聞世上今夜可有ニ火事ニ師泰家人岩堀上洛以外物忿所々可

か郎等來りまさなき君の御自害かなこなたへ御入候へとて生捕申て出る小山このよしを見るよりもされは人の果報の有時はた、何事も心に任せけるそやなほくたすけ

おくならはすえの代とてもはつらひたり去ながら白晝にかうへをはねん事は天下の聞えも然るへからす夕さりの夜半に内海にしつめよとて相馬重代の家人千原大輔に仰

付る彼千原と申は相馬殿の御内に年頃召使れし者なれとも時にしたかふ習として小山殿につかへ申云々

三好記云島山ノ下ニ神保遊佐アリ武衛下ノ織田朝倉カ如シ是ハ被官ナリ家人ニハアラヌ云々

太閤記云忍之城主成田は常に連歌にすぎ侍りければ毎年秀逸之句を記し付紹巴法橋へ使者を上せ點を取にけり將

軍の右筆にてありける山中山城守も同しすぎにて侍れば兼て成ニ書簡因之侍の事秀吉公内々其あらましを知給ひ

しかは山城守を召して宣ふは忍之城主成田下總守小田原籠居之由なりひそかに遣ニ使札ニ心を變し候やうに斗ひ可

レ申旨仰す山中奉り何とぞ才覺致し見んとて成ニ書簡ニ其狀曰捧ニ一封ニ伸ニ寸志ニ了仍年々預ニ温問ニ事甚以恐悅之至

更以甚深候就レ中關八州氏政家人之城々七八所或致ニ落城ニ或成ニ降人ニ了然其城酒魚之迫ニ眼前ニ候貴翁先祖之

レ有ニ火事ニ將軍與ニ師直ニ已相離師直上洛今明着ニ山崎ニ云但此事虛説歟更無ニ聞事ニ也

花營三代記云應安七年五月九日夜強盜亂ニ入禁裏唐門ニ警固人近江國守護役家人目賀田彈正忠入道玄仙子時若黨令

レ防ニ戰之ニ後愚昧記云永和五年三月六日今日時正結願也彼是稱云佐佐木大膳大夫秀高四條京極住宅居木庄左衛門尉樹葉室乳父行城ニ取之ニ渡ニ藤中納言資康卿將軍之許云々

信田雙紙云明れば人目しけしとて夜の間に送りたてまつり曉かけて千原は我宿路へそ歸りける天明ければ小山より御使立千原御前に畏る汝は信田をはしつめて有けるか

中々相尋までも候はすしつめ申て候それなとしつめけるにはなと其時の檢見をは乞ぬそあうやかて心得たり汝は

相馬重代の家人いかさま心かはりをして落しぬるとおはうる也た、とはんにはよもをちしあれがうもんしてとへ

承ると申てあらけなき武士ともか一度に座敷をはらりとたちむさんやな千原を取てふせ中にあて七十餘度のかう

もんは目もあてられぬ次第也

又云信田殿は浮島か遺言はさる事なれとも夫婦討死する上何に命をたはふへきと自害をせんとしたまふ處へ小山

家業絶不レ絶昌不昌在ニ唯今之寸思ニ秀吉御前の儀宜ニ執申之條可レ被レ安ニ御心ニ候急彼レ變ニ御意ニ尤候委曲使者可

レ得ニ貴意之條不レ違ニ禿毫ニ恐惶謹言六月廿日山中山城守成田下總守殿人々御中

東遷基業云太閤薨したまひ候へとも暫は表向へは洩れさる故神君もかくと知しめさす翌十九日の朝は不例を伺ひ

たまはんために道まで御出有りける所に石田治部少輔三成は如何なる思慮か有りけん家人八十島道與と云者を夫

として秀吉公薨したまへりもはや本丸へ御出仕を止めらるへしと申送られけり神君は此由を聞召て途中より御歸

館あり

松原自休手録云永祿十年家康發ニ向遠州ニ濱松ハ井伊豊前守歿後後家拘レ之從ニ家康ニ以ニ後藤太郎左衛門松下與衛

門ニ於レ開ニ渡城ニ加ニ扶持ニ家人等可レ爲ニ本領安堵ニ云々

○候人

東寺執行日記云貞治二年八月四日昨日赤松彦五郎攝津國守護代候人猪熊四郎來臨勸ニ一獻ニ獻ニ垂水庄ニ事談合了

○被官

吾妻鏡云治承四年八月廿三日熊谷二郎直實以下平家被官之輩率ニ三千余騎精兵ニ同在ニ石橋山邊ニ云々

又云承久三年七月二日西面衆四人被召渡一鼻首後藤檢非
違使從五位上行左衛門少尉藤原朝臣基朝筑後守從五位下
行平朝臣有範山城守從五位下源朝臣廣綱檢非違使從五位
下行左衛門少尉大江朝臣能範等也此輩皆關東被官士也
蒙三右大將家恩賜預三數箇之庄園依三右府將軍舉達一昇三
五品之位階云々

太平記云金剛山寄手去程三平氏ノ一族皆出家シテ召人ニ成
シ後ハ武家被官ノ者共悉所領ヲ被召上宿所ヲ被追出
テ僅ナル身一ヲタニ措カネテ貞俊モ阿波ノ國へ被流テ
有シカハ云々

又云相模守京中ニハ合戰アラハ在家ハ一字モ不殘ト上
下萬人劇駭キケルカ相模守無事故都ヲ落ニケレハ二十
四將軍懸今熊野ヨリ本ノ館へ歸給何シカ相州被官ノ者共
宿所ヲ替身ヲ隠タル有様昨日ノ樂今日ノ夢ト哀也云々
又云將軍御兄高倉殿ハ元來仁者ノ行ヲ借テ世ノ譏ヲ憚ル人
也ケレハイツシカ難天下ノ政ヲ執テ威ヲ可振其機ヲ出
サレネトモ世ノ人重ンシ仰キ奉ル事日來ニ勝レテ其被官
ノ族事ニ觸テ氣色ハ不増云事ナシ云々

又云同此廿餘年執事ノ被官ニ身ヲ寄テ恩顧ニ誇ル人幾千
萬ソ昨日マテ烏帽子ノ折様衣紋ノタメ様ヲマテ此コソ

執事ノ内人ヨトテ世ニ重ンセラレコトヲ求シニ今日ハ
イツシカ引替テ貌ヲ篋シ面ヲ側メテスハヤ御敵方ノ者ヨ
トテ人ニシラレン事ヲ恐懼ス

太平記天正本金剛山寄手工藤新左衛門入道ハ關東隨分ノ被
官タリシカハ一家時ヲ得テ其名天下ニ隱ナカリケリ云
云

庭訓往來云且任國之間在廳官人等所行府邊被官輩勢着
任着府儀式官夫大奏之饗膳尉院飯規式兩様納法郡司判官
代等之沙汰爲才學可示給也

建武式目追加云近年武家被官人甲乙之輩令違背下知御
教書一刺對子守護使並使節等一及合戰狼藉一之由有
其

明徳記云故殿御歸參ノ後御一家ノ間ニ十一箇國ノ守護職
ヲ御拜領ノミナラス諸國ノ御領共幾千萬ト申限モ候ハス
是等ハ皆御所様ノ御恩ニテ候ハササレハ世コソツテ賞
翫申スニ依リ御被官ノ輩動モスレハ在々所々ニテ強々ノ
沙汰ヲ仕リ上様ノ御惡名ヲ立申事コソ夜モスカラ日メモ
スニ口惜ク存候ツ

建内記云永享二年二月廿三日一乘院雜堂杉田大輔法眼信
賀來云々信賀相語云畠山左衛門督入道被官齋藤榎本於南

都轉客宿藤丸先日被煞害了是日來返留藤丸宿之處
伊勢詣旅人可來此宿之由有之初仍示子細之間移
宿他所畢爰彼參詣人過期未來仍依不受令改宿由
齋藤榎本插雙憤一拔太刀來藤丸宿亭主折節他行之間
下女馳出尋子細之處令及傷彼下女了仍轉客大路主
地人押寄彼在所同轉客大路局令誅彼榎本了而畠山及
訴訟之間可彌進彼藤丸亭主黑福寺承運渡彼宿於大路
可燒却之由可被仰總寺之由信賀罷下可申一乘院
家之由以松田對馬守飯尾肥前守於室町殿被召仰
之間去十六日馳下申寺務相觸同十七日滿寺致發向了

季禮日錄云永享十二年五月三十日雲狐寺本尊畫圖奉懸
御目建仁寺御前繪仕崇慈喝食僧棧殿頭應慶喝食棧殿頭
用和喝食伺之崇慈喝食族齋州被官人矢野瑞泉寺請取奉
懸御目云々

又云長祿二年七月四日當寺領丹州本免内管領被官人事
自管領以狀被白依爲被官人御免許云々

嘉吉記云我朝ノ御寶入洛ニヨイテハ赦免子細アルマシト
ノ給命ヲ下サル石見承り大ニ悦テ赤松一族ニ間島ト被官
中村太郎四郎加ハレト申合メケレハ同志ノ者イテキ十餘
人申シ語ラヒ南朝奉公ヲ望ミケル

時房公記云嘉吉元年六月廿四日己丑今夕赤松宿所自放火
之後又經程伊豫守大膳大夫一條以北町以西宿所自放火又
左馬助宿所自放火其外彼一族被官人多以放火逐電云々

康富記云嘉吉二年十一月廿九日丙辰和田國分者當管領之
被官人也當職之時者内者事不可成召文之由賦奉行
飯尾六郎左衛門答云々

又云文安元年七月一日戊寅後聞近江守護佐々木六角四郎
今日出宿所寄宿佐々木大原許云々六月被官令一揆
反四郎之故也云々

又云文安四年五月八日己亥今夜一條東洞院釘貫圍置之處
或男五六人可開之由雖申之不可叶之由内裏門役返
答之處昇越釘貫欲出之間門役者共取籠尋子細之處山名
方土橋被官人云々申遺土橋之間自彼方乞請無爲歸云
云

或守護被官人或權家甲乙人等寄_ニ綺於左右_一押妨之間不_レ及_ニ知行_一所_レ殘纒三千餘匹之得分也

又云寶德二年九月十八日己未管領畠山被官人遊佐河内守以下數輩今日自_ニ八幡_一歸京放生會之料十四日所_ニ下向_一也

赤松再興記云長祿三年十月加賀半國へ赤松衆入部ス富樫次郎被官人岩室大將ニテ寄來テ合戦ス兩方多ク討死ヲ可_レ止由被_ニ仰付_一

三好記云畠山ノ下ニ神保遊佐アリ武衛下ノ織田朝倉カ如シ是ハ被官ナリ家人ニハアラス其外畠山ノ下ニ杉原齋藤平ノ三家又被官ナリ畠山家兩家ニナリテヨリ右被官モ或ハ兄弟或ハ父子兩方ニワカレタリ兩畠山ニ遊佐河内守ト云モノ一人宛二人アリ

蟻川親元記云寬正六年二月三日辛巳御被官江州善光雁一太刀黒進_ニ上_一

又云寬正六年五月七日癸丑御被官江州青木彌四郎與_ニ備州御被官莊嚴坊_一就耕作確執事可_ニ申宥_一之處六角殿被官青木三河守令_ニ合_一力莊嚴可_レ及_ニ弓矢之由申_一之云々不_レ可_レ然之旨伊庭方江遣_ニ愚狀_一畢

又云文明十年正月廿七日庚寅御被官櫻庭對馬入道應一進

上御返事被_レ遣候

齋藤親基記云寬正六年十二月二日若公御胞衣東山伊勢守貞親持_ニ參_一之同日御着衣始御產所御成(中略)一大名被官人御誕生御禮御對面遊佐神保遊四右秋庭内藤多賀豐後守同名出雲入道浦上美作守

又云文正元年三月十八日御參宮(中略)御物_{奉行、政所、左、右、出守、被官人、右、元并政所公人等}蟻川親俊記云天文十一年三月六日丁亥細川殿御被官人眞壁左衛門事當方被官人生害仕候間御成敗然處種々眞壁御説事條御_ニ赦免_一之

應仁記云_{武衛家、關東家、各々ハ}殘リ玉へ入道一人義廉カ館ニ入テ一所_ニ腹ヲ可_レ切_一ト願ラレケレハ被官共父若不_レ聞_ニ子之_一諫_一則易_レ語而從_ニ父君若不_レ用_ニ臣之諫_一則箝_レ口而從_ニ君_一ト云本文アレハイカテカ御意ヲ背クヘキト其用意シテ云

應仁別記云義廉ハ尾張國守護代織田兵庫助ハ舍弟與十郎ニ猛勢ヲ差副テ上洛ス越前遠江勢モ悉ク召上ケル京都者甲斐朝倉由宇二宮ヲ始トシテ被官共悉召ノホセケレハ多勢共申計ナシ屋形ニハ所々櫓ヲ擧擡楯ヲカキテソ相待ケル

多聞院日記云文明十六年十一月廿日山城并當國兩國寺社領諸院諸坊領之事號_ニ畠山右衛門佐下知_一彼被官衆等式致_ニ押妨_一或相_ニ懸新儀非分課役_一致_ニ亂惡_一事ハ追年追日増倍之條非_レ削_ニ神國稱號_一寺社滅亡法會懈怠之至極也仍學侶評定而可_レ及_ニ訴訟_一云々

大内家壁書云夜中路次往來禁制條々(中略)御家人并諸人之被官等奉公に依_レ無_レ隙男女をいはす至_ニ深更_一往來の事あるへし如_レ是之仁においては不可_レ及_ニ糺明_一此方夜廻之仁可_レ覺悟之由所_ニ被_レ仰出_一仍壁書如_レ件文明十九年四月廿日

親長卿記云延德四年三月廿九日赤松被官浦上美作守武衛被官織田大和守等發向今日有_ニ合戰_一云々

拾芥記云明應五年六月十六日出雲地有武田被官與_ニ地下賀茂人_一爭_ニ田界_一之間討_ニ武田中間四五人_一之間可_レ放_ニ火_一彼處云々

又云明應五年八月九日嫡男誕生母_{典、被官、子、居、越、口、守、家、盛、女、也}

又云明應八年十一月廿日越中御所_{被_レ責_ニ上京都_一之由風聞之條迄_ニ叡山_一御上洛之間爲細川下爲而阿房守父子其外細川被官等相迎奉_レ禦_レ之}

二水記云永正十五年正月十日今日御參内可_レ有_ニ之由也仍

掃_ニ地路次_一未終刻有_ニ御參内_一細川右京大夫被官人辻々令_ニ警固_一云々參會衆如_ニ例年_一於_ニ置石_一立_ニ御劔御與_一一色彌五郎役也云々

室町殿物語云織田信長尾州より義兵をあけて近國を切ひろけ江州安土といふ所に咸陽宮をあさむく斗の城郭を拵て諸國の大名小名を引つけて朝暮に出仕を請園邊渴仰せられ給ふさるによつて此ころは公方を公方ともしたまはすをのか被官の會釋にそなしたまふ

室町殿日記云_{松永、正、京都、之、任、置、改、る、條}去程に三好筑前守は久秀をよひて御身は京都にありて洛中を相まもるへし殊に洛外の卿人等公方家の被官共をあらため後日のわつらひなきやうに萬事可_ニ相斗_一よしを申ける

慈照院殿年中行事云正月四日將軍家出_ニ御于御對面所_一(中略)三職御相伴衆國持衆准國主外様衆一人充奉_レ賀_レ之於_レ是殿上人出_ニ于先座_一公家ト披露之後日野三條御禮次大外様衆惣番衆上様御被官一兩人奉行衆御目見

又云十二月廿九日將軍家出_ニ御于御對面所_一御供衆申次御禮如_レ常(中略)而申次亦惣番役ト披_ニ露_一之退砌一人充出_レ席拜_ニ台顔_一次上様御被官_{勢田、大、判、事、安藝、大、膳、亮}御禮過而申次如_レ每言_ニ上_一之則入_ニ御于常御所_一

稱呼部 十一上

伊賀貞順記云他家へ爲使者罷越候てわか主の事を屋内
など、いふ事あやまりなり管領の被官人は依所可申也
云々其もおし出し申事不可有之同殿文字を付候事は
もおもはしからず候也

宗長手記云彼上人行の東路之記にありされと命なりけり
さ夜の中山小夜の長山とや上人も詠せられけるとおもひ
あはせ侍り此東路之記は糴屋中務松綱今川被官所持と聞て
此度小川より借用して一見し侍りしなり

政所賦銘引付云伊勢七郎右衛門尉貞口清泉□□□□知行
人備後國志摩利庄代官備中國口原也下人守護被官平井安
藝守城有過上去年極月於路次押取荷物之間度
度被成召之畢不日被召上彼者可被御下知候云
云

年中恒例記云十月一亥日次第事(中路)大名の被官衆へ御
嚴重出様事マイノニハ無之角ノ葉ヲ敷テ御嚴重ヲ十
五モ二十モヒトツニ入テ其上ヲ白弓合ニテツ、ミ惣中へ
一ツ、ミ出也云々

諸大名衆御成被申入記云亭主の同名并被官衆亭主の後
の方に一間々中斗も引退て同可畏被官衆は同名衆の側
後にならひ居へきなり如此の被官人は随分の年寄の輩

なれば賢臣二君に不仕貞女兩夫にまみえずといふ本説
にもれたり云々

蒲生氏郷記云如案翌日本造降參ス命ヲ助ルノミナラス
傳馬人足以下被申付念頭ニメヲクラル是ヲ聞テ其後氏
郷ツモリノ如ク此外ノ小城共降參シテ或ハ明渡或ハ被官
ニナル口關等ハ被官ニナリタリ

多賀家訓云具足馬ナトモヒクハン中間下人下部ナトハコ
クムモ皆其主人ノフンケンニ算用シテ相當ホト持ツナリ
云々

甲陽軍鑑云被官人喧嘩并盜賊等之科不可懸主人之事
者勿論也雖然欲糺實否之處件主無科之由頻陳申相
抱之半令逐電者主人之所帶三箇一可沒收無所帶
者可處流罪者也

又云志村金助被官を折檻いたし口こたへ仕りたるとして刀
をぬきて今の中間をきらんと仕候へとも被官も大脇指を
ぬきふりなからむこくにかけいつる跡より金助追かくれ
とも中間殊外達者なるものにてにけのひぬ

又云甲州法度之次第國中之地頭人不申子細恣稱罪科
之蹟私令沒收之條甚自由之到也若犯科人爲晴信被
官者不可有地頭之綺

共可成其内一人は亭主の太刀を持って少進みて有へし御
出の砌各顔持上て奉見様に不可仕いかにも謹て可
爲辭居也

澤巽阿彌覺書云貞孝之御調進節分御舟繪所は一兩年前上京
小川扇屋にて被書之訖又其後狩野法眼弟子に峠右近と
申仁御被官人御扶持人候其時にか、せられ候云々

關岡家始末云伊賀國ニ於テ氏則ニ相從フ輩ハ荒木一黨山
田家太田ノ一黨粟等也南都ノ諸士モ偏氏則ニ歸服シテ國
司ノ與力被官トナル者多カリシトナリ

關八州古戦録云平井城中ニハ主將兵部少輔憲政既ニ越
後ニ出奔ノ留守タリ云ヘ共義ヲ知り恩ヲ重ニスル譜代ノ
被官等爰彼ニ支ヘテ一旦ハ防キ戦ヒケル云々

大友與廢記云親清乍去親清さまはめしつかはる、さふ
らひをねんころになされつねはぬしと被官のへたてなき
やうに御座候

大友義統教訓之書云一條殿御夫婦さかれ清田方へ御妻合
之事つたなくも賤しき事やされとも公儀の御契約ならば
不及力然共被官として主の娘をねとる事古今珍敷事や
勿論の捨たる女房前の男に取合事珍しからずされとも是
は清田方彼御料人へ依令密通一線深き一條殿は御渡海

又云同十日にふかしへ取つめ長時とあつかひ有之小笠
原長時降參のゆへ誓紙を取かはし城を渡し長時牢人也小
笠原長時いつ方にて他所において少の所領につき武田
の家に堪忍と信玄公被仰出候へとも長時申さる、は元
來武田小笠原兄弟の事武田は兄なれとも甲州に居る小笠
原は弟なれとも都につめ公方様御下にちかく罷在候間武
田より手うへなりつると申來る長時か代になり武田之被
官になる事中々申に不及候として上方へ牢人也

甲陽軍鑑末書云行軍之次第足輕大將我被官ヲ連道具ヲ持
セテ先ニ乘推其次ニ足輕推也道廣時ハ二行也右當番右非
番推大鼓當番ノ方ニテ打也五百千ノ小備ニテモ備毎ニ大
鼓有ルヘシ云々

新田由良家傳記云公方萬松院義晴公より國經公御討死に
て泰繁公へ被進候御内書寫去年十二月三日於武州須
賀合戦之時父信濃入道討死自身被疵被官人數輩或手負
或損命之由注進到來被感思召候云々

大館常興記云天文十一年卯月十一日越智以同名御禮申
上候御對面之事様體可爲如何候哉旨被尋下候由佐
方より内々承之仍人の被官人などにてなく候はめ諸奉
公方にて可有御座候若しまた被官分にしては庭上た

るへく御事之由申入之也

武林往昔日記云火事の時は風上に居てよしとなり縦一足
おそくとも被官組共に引つれ散さるやうに引まよふ事肝
要なり

信長記云佐久間信盛父右衛門尉與力被官等ニ至ルマテ斟酌
有レ之事ハ其身分別ニ自慢シウツクシケナルフリヲシ少
ノ科アレハ事ヲ左右ニ寄セ大ニ申立身上ヲ取ケシ家財マ
テ改易シ令ニ没收ニ依テナリ云々

粗井日記云丹波野武藤惣右衛門彌平兵衛カ子ニ口口トハ
越前敦賀金崎ノ城主朝倉中書カ旗ノ下被官ナリ

又云今御先祖ノ本望ヲ無ニシテ怨敵ノ信長へ和睦ト申事
ハ心得カタク候(中略)何ホト念頃ニ申トモ和談ニ候ハ、
取立ノ被官者ト同事タルヘク候

増補家忠日記云永祿六年閏十二月七日日本多豊後守廣孝東
條ノ城ヲ攻テ軍功有是ニ依テ大神君采地ヲ廣孝ニ加賜セ
ラル(中略)今度敵方ニ成者借儀爲ニ何義ニ候共忠節又者無
事候共被官人至迄一切納所ナク可レ被レ取事右條々於ニ末
代ニ不可レ有ニ相違ニ者也

小島景憲家譜云天正十二年於尾州長久手ニ追首には候へ
とも二ツ仕殊に侍を討申候若黨鎧持被官兩人も首二ツ取

申候

一柳譜云此節市助様へ於播州二千五百石之領知ヲ兩度
ニ筑前様ヨリ被レ遣候由但初千石後千五百石之御加増ト
及レ承候同年天正八年五月濃州ニ被レ成ニ御座ニ候四郎右衛門様
ヲ市助様ヨリ安若ト申候但後竹島仁兵衛ト申候御小人御
使トシテ播州へ御呼被レ成姫路ヨリ一里上方ノ方村切ニ
知行高九百石ノ所四郎右衛門様へ被レ遣是ヨリ市助様御
被官ニテ御座候監物様御童子名善門其後御元服被レ成四
郎右衛門様ト申其後御クハント被レ成候監物様ニテ御坐
候事

松陰私語云五十子張陳之始當所三籠之城主當方の代官
國繁自山内被差副衆當國守護長尾孫六方被官成田以下
昌賢同景信被官矢野吉里爲レ始之義武州上州諸一揆之
外山内家風中大略致警固今當方有ニ何事ニ歎相替先々殊
の外入背事歎歎存所なり其上長尾左衛門尉景信大途兵庫
以下國繁と無ニ相談ニ近年迄此分也諸家存知之前なり

武家名目抄稿第五十三册

塙檢校保己二編

稱呼部 十一中

○家子

平治物語云大將軍ニハ惡右衛門督信賴子息新侍從信親
(中略)郎等ニハ鎌田兵衛政清後藤兵衛眞基佐々木源三秀
義熱田大宮司太郎ハ義朝ニハ六男ナレハ我身ハ上ラネト
モ家子郎等差上ス

平家物語云西光被新大納言ハ山門騒動によつて私の宿意
をはしはらくおさへられけりそも内議支度はさま／＼な
りしかとも義勢計にて此謀叛叶ふへしともみえさりけれ
はさしも頼れたりつる多田藏人行綱此事無益なりと思ふ
心やつきにけん獲の料にとて送られたりける布共をは直
垂帷に裁縫せ家子郎等共にさせつ、目うち睨てゐたりけ
るかつら／＼平家の繁昌するありさまを見るに當時たや
すう傾けかたし若此事洩ぬる程ならば行綱先うしなはれ
んす他人の口よりもれぬ先に返り忠して命生ふと思心そ
つきにける

又云征夷將軍のいぬんせんの御つかひやすさはいへの子
二人らうとう十人くしたりけりみうらのすけもいへのこ
二人らうとう十人くしたりけり二人のいへの子はわたの
三郎むねさねひきの藤四郎よしかすといふものなりらう
とう十人をは大みやう十人して一人つ、にはかにしたて
られたり

源平盛衰記云山門神輿既ニ門前近クイラセ給ケレハ頼
政イソキ下馬ス甲ヲヌキ弓ヲ平メ左右ノ膝ヲ地ニ突キ頭
ヲ傾テ拜シ奉ル大將軍カクシケル上ハ家子モ郎等モ各下
馬シテ拜ミケリ

又云相模合大介ハ敵寄ルナラハ暇アルマシ先ツ静ナル時
能々兵糧ツカフヘシトテ酒肴坩飯昇キ居テ是ヲ勸ムサテ
下知シケル事ハ弓シタ、カニ射者ハ家子モ侍モ舍人草薙
ニ至ルマテ沙汰シ置キ弓ハ一人シテ二挺三張矢ハ四腰五
腰モ用意セヨ云々

又云東向中將ハ本ノ道節ヲ送リテ正面ノ東ノ間本ノ座
ニ西向ニオハシケレハ彼ノ僧ハ西ノ妻ヲ廻リテ正面ノ西
ノ東間向ニシ候ケル眞平ハ縁ニアリ家子郎等ハ益ノ中大
庭ニ並居タリ

吾妻鏡云元暦元年九月十四日庚子河越太郎重頼息女上洛

爲相嫁源廷尉也重頼家子二人郎從三十餘輩從之首途云々

又云建久元年十一月七日丁巳二品御入洛申剋先陣入洛二條末西行河原西行令到三波羅給其行列先貢金唐櫃一合次先陣畠山次郎重忠若黒赤麻甲家子十人郎等十人相具之

又云寶治二年後十二月廿八日辛未日阿稱不能費紙筆而獻覽一通文書是則右大將御時注爲宗之家子侍交名被載御判之御書也右京丞後時子時爲家子專一也

承久軍物語云故右大將よりとも卿平家をうちほろぼしたるけんしやうに後しらかはの院日本國のそう地とうを給はりたるなり朝てきついたう六箇年のあひた或はおやをうたせ子をうたせ或は主をうたせいへの子をうしなひたる御家人ともに軍功のしなくにしたかひわかちたひたらん地頭しよくをさせるさいくはもなくしてよしときのはからひとしてあらため申すへきやう候はすとて許容し奉らさりし云々

梅松論云何事か有へきとて酉刺計に自害する間したかふ輩數百人同命を落す南方時益七日夜四宮河原にて流矢にあたりて死去しけるを家子頭を取て當所に持來りける

なの役たるへし

加賀守貞滿筆記云當方御家の子衆へは可得御意候條人々御中御報貴館云々

矢開之記云常式の時は素袍上下を着あるへきなり餅喰役人はるほしかけをすへし如し此餅喰役人も座敷に安座して有時餅の喜持てする役人同餅持て出すへし是も江ほしかけをすへしか様の時は我家の子又は久敷内者に申付へし

常陸大椽傳記云家子ト云ハ本領ヲ持タル名代ノ人ノ奉公スルヲ家子ト云也一家ノ端ナレトモ本領重代ノ名字懸ル所ニナキ人ハ家子トセス是ヲ家人ト云ナリ

鎌倉大草紙云小山下野守七里灘に馳むかひ防戦ひけるか小やま小勢にて家の子郎等八十餘人討死して其身も手負引退く云々

今川大雙紙云盞持て參る事主人と同輩の方ならば兩方の真中に置て弓手へ歸るへし客人賞翫の方にてあらは客人のそはに置てかへる也初獻の盞をは誰にても客人の位によつて主人の一家一族家子持て出へし

齊藤親基記云寛正七年二月廿五日家子同姓衆御太刀以別紙注文進上也

云々

大塔軍記云小笠原長秀撰定吉日良辰打入善光寺長秀其日出立路次行粧魏々蕩々綺羅耀々天形勢拂當(中略)其次家子若黨三十餘人持金銀作太刀二行云々

太平記云山名伊豆守落美作城條菊池カ家ノ子城越前守ハ謀アル者也ケレハ云々

又云天正本三角入道關直冬條義詮美濃ヨリ上洛アリテ周濟房ヲハ頓テ佐々木六角判官氏頼ニ預ラレンシニ六條河原ニテ佐々木家ノ子木村源三請取テ忽ニ誅セラルトカヤ

伯耆之卷云六條少將殿宜ひけるは殘る所の一族共面々如何なる弓を射かと仰ければさん候一族共の中には大略三人張を仕候と申然る處に長高家の子若黨等追々に馳來て無程百五十騎計に成にけり

室町殿日記云備後房道心之條肥後の國には安蘇彌五郎太宰少貳千壽丸秋月種實をさきとしてことごとく同心せりさてまた防長の其中には内藤隆世三崎盛物弘中三河守を宗として雲霞の如くつきしたかふかゝるところに陶か家の子に深野彈正康澄宮川左衛門房勝陶か前にかしこまつて申けるは云々

産所之記云めいけんのやくと申事御入候是は家の子おと

江濃記云齋藤殿ノ故道三ヲ討シムクイニヤ政道モ次第二

亂テ以來ハ人ノ國トナルヘシイサヤ信長ヲ引入奉リ道三遺言ノ通りニ美濃ヲトラセ奉ラント一同ニ評定シケレハ日根野備中守此由ヲ聞テ弟ノ彌二右衛門ヲ近付ケ西方衆三人信長ヲ引入龍興ヲ討奉ラントノ企テ有リサアランニ於テハ此國滅亡疑ヒナシ三代ノ主君ヲ打奉リテハ無念ナリ江北淺井備前守ヲ此國へ引入テ先ツ遂ニ一戰ニ其上ニ永井隼人佐ト相談シテ龍興ヲ此國ノ傍ニ隱居サセ備前守ヲ稻葉山ニスエ置キ其威ヲ以テ我等兄弟先懸シ尾州へ亂レ入ルヘシト評定シ家ノ子日根野助右衛門ヲ以テ淺井玄蕃所へ遣シケル

江北記云當方御家わがりの事六角殿大原殿其外一色殿道譽御兄弟也有子細御家子に被成候也

新撰信長記云日根野備中守淺井ヲ美濃國へ引入條日根野此由聞出シ弟彌次右衛門ヲ近付西方三人ノ者トモ信長ヲ引入龍興ヲ討奉ラントノ企有サアランニオイテハ此國ノメツホウ疑ナシ三代相恩ノ主君ヲ將ニ打セ奉ランモ無念ナリイサヤ淺井備前守ヲ此國へ引入(中略)我等兄弟先懸シ尾張國へ亂入ルナラ

ハ信長ヲ打執ン事何ノ子細ノ候ヘシト思フ如何スヘキトイハ彌次右衛門尉承宜キエミニテ候ヘハ早々使ヲ被

遺可爲最ト申サアラハ誰ヲ可遺ト有シカハ兎角御家
子日根野助右衛門尉可然トテ具ニ言合淺井玄蕃允所へ
書札ヲ添テソ遣シケル

關八州古戦録云澁川一益武反町ハ元上州ノ和田兵衛大夫カ
家子タリシカ故有テ浪客トナリ信州ノ高坂彈正忠昌信ニ
仕へ近年氏邦ノ手ノ者ト成レリ武藤ハ武田晴信ノ家ニテ
毎度ノ走回リ場數有テ信玄勝頼二代ノ威狀數通ヲ所持ス
甲州没落以後北條家へ來リ本知二十貫文ノ由分明ニ付テ
其通ヲ宛行ヒ氏邦拘置レタリ今日兩度ノ戰ニ七度マテ鎗
ヲ合セ三度分捕シタリシ故氏直ヨリ威背ヲ授テ引出物與
ヘラレヌ

義殘後覺云左アラハトテ廻文ヲナス所ニ屬從ノ者都合二
萬七千富田ノ若山ヘソ着陣ス去レハ事露顯スルニ依テ陶
カ家ノ子ニ深野ノ彈正房隆宮川左衛門尉房勝尾張守ニ向
ツテ涙ヲ流シテ申様此御謀叛ハ偏ニ隆房ノ胸中ヘハ天魔
カ入ルト存ス云々

又云扱中將殿大ハ住持ニ最後ノ十念ウケ給テ自害シ給フ
一忍軒モ御自害ナサレケル其時權六ハ阿波守ニ向ヒ申様
某口口此ノ君ノ家ノ子ニ平岡權六道高ト申者ニテ候云々
毛利家記云秀吉公被仰シハ北條今ニ至テ上洛セス我ヲ

後ノ火ニ途ヲ失ヒ手足モナユル心チシテ防難ク思ヒケレ
ハ本堂差テ引退ク

奥羽永慶軍記云須賀川川井茅根ニ向テ敵手シケク追詰タ
リ倡ヤ我々討死シテ味方ヲ落延サント云ハ茅根最ト答ヘ
二騎共ニ取テ返シ大音上テ是ハ佐竹ノ家ノ子ニ河井甲斐
守忠脩茅根土佐守通正ト云者ナリ我ト思ハン者ハ手並ヲ
見ヨト云マ、ニ手ノ者三十騎櫓ヲナラヘテ敵ノ大勢ニ分
テ入

豐鑑云上杉景勝は越後の勢を具して河中島をへて竿吹の
峠を越松枝の城に押よす爰をば北條か家の子大道寺とい
へる者城を守りて居たり

○家臣

豆相記云景虎退於相州欲入上厩橋城矣北條家臣中
條出羽守自武江戶城出銳卒追及景虎于武府中而多
擊殺於越中自北條國又歸于北條云々

初井日記云合戰今將軍へ合體ノ印シハカリニ一矢ヲ致
スノ處ニ不慮ニ若者トモ楚忽ノ強ハタラキニ及ヒ又ハ某
カ軍立御歸リ路ヲハ開キテ候ト云ヘトモ(中略)又御自害
ナト、アランニハ御心易ク備ヲ引ノケ申ヘキニ候忠義ノ
御家臣衆ヲ古郷ヘツカハサレタク候ハ、御心易ク送ルヘ

サミスルトオホエタリ和朝ニ於テ我ニタテツク者有ヘケ
ンヤ彼ヲ亡シテ後代ノコラシメニセント宣ヒテ既ニ都ヲ
打立セ玉フ北條此由ヲ聞テ家子老中ヲ集テ云ク關白率ニ
大勢下ルト云トモ怖ル、ニタラス云々

荒山合戦記云利家白旗ヲ打振々々進ヤ々々敵ニ息繼スナ
ト自眞先ニ進タレハ家ノ子郎從主ヲカハヒ馬ノ前ニ馳塞
馳塞死ヲ爭テ攻シカハ流石ノ惡僧溢者共モ後ノ火ニ途ヲ
失ヒ云々

又云前田利家ハ伊賀ノ儉組トテ五十餘人扶持シ置シカ彼
輩ヲ招テ今敵軍スル體ヲ見ルニ物ノ用ニモ可立程ノ者
ハ打出テ合戦スルト覺ヘタレハ坊々院々ニ墓々シキ人ハ
有マシキノ汝等忍入テ院々坊々ニ火ヲ放テ焼出少々老法
師小法師原中ニ敵對スル者ヲハ斬テモ捨ヨ(中略)畏候ト
テ院々坊々ヘ忍入テ窺ヒミルニ案ノ如ク手ニ可立人ハナ
シ小法師原ノ少々殘タルヲ追散シ十餘ヶ所ニ火ヲ掛タリ
去程ニ黒煙リ覆テ天折節魔風頻ニ扇テ院々ヨリ諸堂ニ吹
掛タレハ威陽三月ノ火ヲ一日ニ合セタル歎ト覺ヘテ夥シ
寄手ハ強氣ニ乘喚叫テ責掛利家白旗ヲ打振々々進ヤ々々
敵ニ息繼スナト自眞前ニ進タレハ家ノ子郎從主ヲカハヒ
馬ノ前ニ馳塞々々死ヲ爭テ攻シカハ流石ノ惡僧溢者共モ

キニテ候

○家僕

江濃記云利藤ノ子利綱シハラク家督ヲツケリ此人ノ時齋
藤家斷絶ス然ニ齋藤家ノ家僕ハ永井藤左衛門同豊後守等
也豊後守ハ山城國西ノ岡ヨリ窄人シテ齋藤家ニ來リ藤左
衛門カ與カト成テ度々合戦ニ勞功ヲツミ永井豊後守ト號
シテ彼ノ家ノ家僕ト成ル齋藤ノ家督斷絶ノ時彼ノ家領ヲ
兩人シテ知行ス

○家士

豆相記云景虎亦攻甘繩城城主綱成未下有木在城故
長子左衛門大夫氏繁居之自取於鉄鉞而戰雖越甲多
爲一人猶豫而郭外送數日矣景虎士卒日服北條一家士
時罷而當家危急廢亡之秋非今而又何日哉

○郎等

將門記云介良兼尙衛忿怒之毒未停殺害之意求便伺
隙終欲討將門于時將門之駈使丈部子春丸依有因
緣屢融於常陸國石田庄邊之田屋即召取子春丸問案
內申云甚以可也今須賜此方之田夫一人將罷漸々令
見彼方之氣色云々彼介愛與有餘惠賜東絹一疋語云
若汝依實令謀害將門者汝省荷夫之苦役必爲乘馬之

郎頭一何況積三米穀一以増勇分三之衣服一以擬賞者

後三年軍記云柵をせむる事日敷におよふといへともいまたおとし得ず將軍の兵とも心をはけまさんとて日ごとに甲乙の座をなむ定ける日にとりて甲にみゆるものともを一座にする臆病に見ゆる者を一座にするけり(中略)瀧口季方なん一度も臆の座につかさりけりかたへもこれをほめ感せずといふ事なし季方は義光か郎等なり將軍の郎等ともの中に名を得たる兵共の中に今度ことに臆病なりとさこゆる者すへて五人有けり

義光物語云義光公も氏家尾張守延澤能登守其外家の子郎等召集軍評定有

保元物語云山田小三郎爲朝の矢に中る條これゆきちからおよはすしてたた一きすこくとそひかへたる身のふんけんなかりければのりかへらうとうまてはおもひもよらすはかくしき歩走の一人をたにもくせさりけりわつかに馬の口につきたるとねりのをのこ一人そありける

平治物語云大將軍ニハ 悪右衛門督信頼子息新侍從信親(中略)郎等ニハ 鎌田兵衛政清後藤兵衛眞基佐々木源三秀義熱田大宮司太郎ハ 義朝ニハ 小舅ナレハ 我身ハ 上ラテトモ家子郎等差上ス

にいせと駿河か京鎌倉にてのしにさま今又す、き殿か御くそくを一りやう給て千町萬町の御おんにかへしとよろこひつる事のゆ、しさよかほとまてよきらうとうをもち給ふ我君のおくわほうのほとうたてさはせめて大國四五ヶ國御知行なきこそくちをしけれ

承久軍物語云去程に御一もんをはしめとしてその名きこふるさふらひたちを二位との、御まへにめしてこんとの御大しのいけんをとほる(中略)いかに侍ともたしかにきけ日本國の侍はむかしは三とせの大はんとていとをしゆこする事一この大しと思ひいへのこらうたうまてはれらかに出たちてのほるといへとも三とせのさいきやうにちからつきくに、くたる時はかちはたしにてかへりしを故う大しやう殿これをあはれませ給ひ三とせを六月につ、めふんにしたかひ人のたつせるようにしはいし給へはよろこぶ事かきりなしか、る御なさけふかき御心さしをもわすれまいらせこんと京かたの御かた仕らんかまたくはんとうに御ほうこう仕らんかた、いまたしかに申きれとのたまひしかは云々

又云ち、よしむらさてはちからおよはすとてやすむらをかたはらにまねきよせわかきものなればかまへていくさ

平家物語云清盛いまた安藝守たりし時伊勢國阿野津より舟にて熊野へ參られけるに大なる艦の舟へをとり入たりけるを先達申けるは是はめてたき御事かなまゐるへしと申ければ入道相國さしも十戒をたもつて精進潔齋の道なれとも昔周武王の舟にこそ白魚は躍入たなれとて調味して我身くひ家子郎等ともにもくはせらる

源平盛衰記云山門御神輿既ニ門前近クイラセ給ヒケレハ頼政イソキ下馬ス甲ヲスキ弓ヲ平メ左右ノ膝ヲ地ニ突キ頭ヲ傾テ拜シ奉ル大將軍カクシケル上ハ家子モ郎等モ各下馬シテ拜ミケル

又云五節夜忠盛朝臣ノ郎等ニ進三郎大夫平季房カ子ニ左兵衛尉平家貞ト云者アリ本ハ忠盛ノ父正盛ノ一門タリシカ正盛ノ時始テ郎等職ト成リタリシ木工馬允平貞光カ孫也

又云小坪合本田ノ次郎中ニヘタ、リテ櫓ヲ押ヘ云ケルハ命ヲ捨ルモ由ニヨル宿世親子ノ敵ニ非ス只平家ニキコエシ計リ一向フニコソ侍レ就レ中三浦ハ上下皆一門也秀出ルヲ大將トシ成後ヲ郎等乗替ニ仕フ

たかたち草紙云我君の御内の人のやうにそわうたる事有ましそれをいかにと申に入島か勢次信た、のふかうちし

にあやまちすな河にのそんてはとこそふるまへてきにあふてはかくこそた、かへと心しつかにけうくんしてむねとのらうとう佐野の與一めのとの小河四郎小河五郎あそ

の太郎同三郎山さき三郎那波の藤八以下五十きすくりてやすむらにつけてと、めおき我身も五十きのせいを引くし大わたりへとてうちとほる

太田美作守康有記云建治三年十月十四日遠江十郎左衛門尉與三杉本上八郎左衛門尉郎等浮澤左衛門尉云々於三建長寺前乗合之間十郎左衛門尉下人殺害浮澤左衛門尉仍十郎左衛門尉相具下手人三山内門前之處被召預于武藏守殿云

伯耆卷云借長高館に折節爲在合家子郎等を召寄て被申けるは隠岐の帝長高を御頼ありて既に大坂の湊へ御船を被着たる由勅使を被下不思議に此時に生會進て悉もか、る勅定に預事生前の面目何事か是に過し

太平記云長新左衛門尉阿新末幼稚ナレトモケナケナル所存有ケレハ父ノ遺骨ヲハ只一人召仕ケル中間ニ持セテ先我ヨリサキニ高野山ニ參テ與ノ院トカヤニ收メヨトテ都へ歸シ上セ我身ハ勞ル事有ル由ニテ尙本間カ館ニソ留リケル是ハ本間カ情ナク父ヲ今生ニテ我ニ見セサリツル體

憤ヲ散セント思フ故ナリ角テ四五日經ケル程ニ阿新晝ハ
 病由ニテ終日ニ臥シ夜ハ忍ヤカニヌケ出テ本間カ寢處ナ
 ント細々ニ伺テ隙アラハ彼入道父子カ間ニ一人サシ殺シ
 テ腹切ランスル物ヲト思定テソネラヒケル或夜風雨烈シ
 ク吹テ番スル郎等共モ皆遠侍ニ臥タリケレハ今コソ待處
 ノ幸ヨト思テ本間カ寢所ノ方ヲ忍テ伺ニ本間カ運ヤツヨ
 カリケン今夜ハ常ノ寢所ヲ替テ何クニ有トモ見エス
 又云唐崎後陣ニ引ケル海東カ若黨八騎波多野カ郎等十
 三騎真野入道父子二人平井九郎主從二騎谷底ニシテ討レ
 ニケリ
 又云鎌倉合戦 義ヲ重シ命ヲ輕シテ安否ヲ一時ニ定メ剛愎ヲ
 累代ニ可レ殘合戦ナレハ子被討共不レ扶親ハ乘越テ前ナ
 ル敵ニ懸リ主被射落共不引起郎等ハ其馬ニ乘テ懸出
 或ハ引組テ勝負ヲスルモアリ或ハ打替テ共ニ死スルモア
 リケリ其猛卒ノ機ヲ見ニ萬人死シテ一人殘リ百陣破テ一
 陣ニ成共イツ可レ終軍トハ見エサリケリ
 中國治亂記云尾張守全姜モ不レ叶シテ自害シタリシヲ首
 ヲハ小袖ニツ、ミ岩ノ間ニ押入其後郎等トモ自害シケル
 ヲサカシ出シ供ノ侍七人ト以上首ハ八ツ有リシヲ生捕ノ
 者ニ見セケレハクチハノ小袖ニツ、ミシハ全姜ノ首ト申

シ泪ヲ流シケレハ則クキヤウニスヘ實檢ノ後七日市ノ洞
 雲寺ニテ葬禮アリ
 應永記云大内ハ民部丞ヲ不レ討トテ向フ敵ヲ切拂ヒ刺殺
 シ民部ヲ後ニ欲レ隔民部ハ大將ヲ不レ討トテ向フ兵ヲ打叛
 ケ互ニ吾先ニ討死セント戰ケリ主ハ郎等ヲ不レ討トシ郎
 等ハ主ヲ不レ討トテ馳合々々散々ニソ戰ケル
 又云敵手痛ク禦戰フ間北畠少將ヲ始トシテ矢庭ニ十餘人
 討死ス郎備走倚リ少將ノ既ニ討死ノ由ヲ父源大納言ニ告
 ケレハ云々
 土佐日記云廿六日猶かみのたちにてあるにありし、し
 りて郎等までものかつたり
 鎌倉大草紙云果して國々の調も終て同十月二日戌の刻は
 かり新御堂殿并持仲御所忍て殿中より御いて西御門寶壽
 院へ御出有て御旗を揚らる、犬懸の郎等屋部岡谷の兩人
 手の者を引率其夜塔辻へ下り所々堀切鹿垣を結渡し走矢
 倉をあげ持楯をつき家々の幕をうち一揆の旗をうちたて
 たり
 又云小山下野守七里灘にて馳むかひ防戰けるか小やま小
 勢にて家の子郎等八十餘人討死して其身も手負ひ引退く
 云々

松田長秀記云永享十二年七月廿五日大將御拜賀供奉行列
 次第(中略)次一騎打被著 島山尾張守持國佐々木治部少
 輔持光富樫介持春土岐美濃守持益左衛門佐義淳子時 執權
 郎等拾騎大幡直垂 自餘一騎打騎馬無レ之
 新撰信長記云渡邊勘兵衛其時ハ十六歳ニテ真先懸タリシ
 カ引取時何トカシタリケン鍵ヲフミ落サレ鍵ヲ捨テハフ
 カク也トテトリニ歸所ヘ敵切テカ、レハ落チタルヤリヲ
 オットリナク敵ヲツキタホス勘兵衛カ郎等赤居久作
 ト云者走懸テ首ヲ取
 安土日記云林新二郎并家子郎等枕ヲ并討死也林與力ニ加
 藤次郎左衛門ト申者尾張國久々取合ノ内爰ハト申時ニハ
 能矢ヲ仕候テ覺ノ射手也
 謙信家記云鎌忠山根ノ城ヘ案内セサルト輝虎手討ニセ
 ラレ鎌忠カ郎等二千計討殺シ前橋ノ城ニ北條丹後ト云侍
 ヲ指置
 氏郷記云秀紀ハ本ヨリ一家ノ惣領ナレハ家子郎等共ノ思
 ヒ入モ深キ故ニヤ定秀ノ味方シケル者共モ多ク心替リシ
 ケレハ遂ニ定秀日野ヲ被レ追出云々
 會津四家合考云河原田治部少輔合戦 盛次每度中途ヘ出向テ手痛ク防
 キ戰ケレハ盛秀軍ニ無レ利シテ引退ケルカ程ナク寒氣烈

クシテ雪降積リ人馬便ヲ失ヒケレハ盛秀續テ寄セ得サレ
 トモ且ハ政宗ヲ敵トスレハ斯テ始終叶ヘウモ不レ覺サア
 レハ身上ノ有増ヲ伏見エ註進申太閤ノ恩願ニモ預テハヤ
 ト思ヒ縁呢ナレハ横田刑部ニモ此事斯ト相談シテ郎等ニ
 主膳口道玄佐ト云者ヲ廻國順禮ノ様ニ出立セテ伏見エ上
 セ石田治部少輔三成ニ便テ事ノ申ヲ註進シタリケレハ云
 云
 愚耳舊聽記云北畠左近忠 其時北畠譜代の郎等千町田茂兵衛
 と申者の有けるか幸此度供したり此者いさめて云けるは
 思召御尤至極にて候得共先案しても御覽せよ大浦の大軍
 勝軍していさみす、める其中へわつか三十人計にて何程
 の事か仕出すへき
 又云知通破敵 讀岐は兄弟子共を左右に立譜代の郎等五十餘
 人前後左右におし立爲信公の御旗本へ眞一文字に打て
 懸
 奥羽永慶軍記云佐竹武藏盛事 佐竹義昭ヨリ今義重ニ至ル迄
 其威振ニ遠近ニシカハ奥州ノ内マテ幕下數多ニソナリケル
 (中略)常陸國中不レ順ヲハ攻廉ケ順ヲハ自皆郎等ニソ
 催サル
 ○郎從

保元物語云正清百き計にておしよせて下野守朝の郎等に相模國の住人鎌田次郎正清と名乗ければ扱は一家のらうしうござんなれ大將軍の矢おもてを引しりそけとのたまへは云々

吾妻鏡云元暦元年四月八日丙子本三位中將自伊豆國來着鎌倉仍武衛點郭内屋一字被招入之狩野介一族郎從等每夜十人令結番守護之

吾妻鏡云文治五年八月九日丙申入夜明日越阿津賀志山可遂合戰之由被定之爰三浦平六義村葛西二郎清重工藤小次郎行光下四人以上七騎潛馳過山次郎之陣越此山欲進前登(中略)七騎終夜越峯嶺遂馳著木戸口各名謁之處泰衡郎從部下伴藤八已下強兵攻戰云々

又云文治五年九月七日甲子宇佐美平次實政生虜泰衡郎從由利八郎相具參上陣岡(中略)景時頗赤面參御前申云此男惡口之外無別言語之間無所欲糺明者仰云依現無禮囚人答之歟尤道理也早重忠可召問之者仍重忠手自取敷皮持來于由利之前令座之正禮而誘云携弓馬者爲怨敵被囚者漢家本朝通知也云々

又云承久三年六月十二日乙丑武州逢行時感悅之餘閣孟先請座上次與彼孟於行時令太郎時氏引乘馬

陸奥話記云有人說將軍曰永衡爲前司登任朝臣郎從下向當國厚被養順勢領一郡而娉賴時女以後貳大守合戰之時與于賴時不屬舊主不忠不義者也

室町殿日記云義長所所々の城主郎從與方にいたつて度々粉骨を刻戰功をつむといへともそれかしに至ていつれへも恥としたる被行勸賞事なきに付て士卒いさむ事なし云々

普廣院殿御元服記云永享二年七月廿五日大將御拜賀供奉行列出仕人々伺候次第并踞侍所帶甲甲子時赤松左京大夫弟伊豫守義雅勤其役郎從三十騎召具之○松田長秀記同文之ヲ略ス

布衣記云馬の時值僕者事衛府時は童一人郎從二人調度懸一人舍人二人中間六人其儀は隨時かゝるの若黨中間跡に上下着召具

播州佐用軍記云十二月十五日上月城攻條政範亦酒肴持せて出ラレツ、荒面白ヤ珍ヤ酒宴ノ興ニ打モノラレヌ遊女ノ人ニ問レヌ亦思アリ同シ太山ノ冬木立嵐ヲ獨ヤ聞ヘキ吾モ諸共酌トテ一盃受テ(中略)眞島ヨリ政範乞請ラレテ一受其レヲ銚子へ移サレテ外様ノ郎從親キ陪臣マテニ賜リ云々

荒山合戰記云利家白旗ヲ打振々々進ヤ々々敵ニ息繼スナト自眞先ニ進タレハ家ノ子郎從主ヲカハヒ馬ノ前ニ馳塞

利至于所具之郎從及小舍人童召幕際與餉等云々芳情之儀觀者彌成勇云々

貞永式目云殿人各事於侍者可被沒收所領無所領者可被處流罪至于郎從以下者可令召禁其身又云於道路辻捕女事於御家人者百箇日之間可被止出仕至郎從以下者任右大將家御時之例可割除片方之鬚髮也

太平記云信忍自普恩寺前相模入道信忍モ假粧坂へ被向タリシカ夜晝五日ノ合戰ニ郎從悉ク討死シテ終ニ二十餘騎ノ殘ケル

又云金剛山寄手承久ヨリ以來平氏世ヲ執テ九代曆數已ニ百六十餘年ニ及ヌレハ一類天下ニハヒコリテ威ヲ振ヒ勢ヒヲ專ニセル所々ノ探題國々ノ守護其名ヲ擧テ天下ニ有者已ニ八百人ニ餘リヌ況其家々ノ郎從タル者幾萬億ト云數ヲ不知

又云松岡城小清水ノ軍ニ打負テ引退兵二萬餘騎四方四町ニ足ヌ松岡ノ城へ我モトコミ入ケル程ニ咨ノ子ヲ打タルカ如ニテ少モハタラクヘキ様モ無リケリ角テハ叶マシ宗徒ノ人々ヨリ外ハ内ヘ不可入トテ人ノ郎從若黨タル者ハ皆ソトヘ追出シテ四方ノ關下シタレハ云々

馳塞死ヲ爭テ攻シカハ云々

松原自休手錄云軍退散ノ刻津田長門守驅合之入鎗然處ニ織田河内守折合テ突伏首ヲ討戸田カ郎從鶴見金左衛門雙枕途忠死云々

○所從

吾妻鏡云建久二年九月廿一日丁卯爲歴覽海濱出稻村崎邊給有小笠原勝負(中略)上下催與秉燭之程令歸給之間雜色澤重與盛時所從有喧嘩各被疵云々

又云建久六年五月十五日己亥今夕於六條大宮邊三浦介義澄郎等與足利五郎所從等發鬪亂依之和田左衛門尉義盛佐原左衛門尉義連以下馳集于義澄旅宿又小山左衛門尉朝政同五郎宗政同七郎朝光以下大胡佐賀之輩集足利宿所將軍家被遣景時於兩方被仰和平之儀間入夜令靜謐云々

又云建曆元年六月廿一日辛丑三味莊雜掌殺害之男露顯被召禁之故野三刑部丞成綱所從也主人他界之後橫行所所云々

太平記云三浦大多和合戰異見條カ、ル處ニ六波羅沒落シテ近江ノ番馬ニテ悉ク自害ノヨシ告來ケレハ只今大敵ト戰中ニ此事ヲキイテ大火ヲ打消テアキレ果タル事限ナシ其所從眷屬共

稱呼部 十一 中

千二百八十一

是ヲ聞テ泣歎キ憂悲ムコト喻ヲトルニ物ナシ

○從者

奥州後三年記云直衛子なきによりて海道小太郎成衡といふものを子とせり年いまたわかくて妻なかりければ直衛成衡か妻をもとむ當國のうちの人はみな從者となれり

○陪從

吾妻鏡云建久六年十一月十日辛卯鶴岡御神樂也將軍家有御參陪從江左衛門尉景節唱秘曲等子時風雨俄起殆有神威之瑞云々

○股肱ノ者

東遷基業云信長公開給ひて面々か申所も其理なきにはあらす然とも三州堺の諸城に吾股肱の者ともを籠置て無手無手と討果させ敵大勢なればとてこれに恐れて出合すは信長か弓矢取て末代までの耻辱なり所詮討死したるものともと枕を並家名を重せんこそ本意なれ其上寄手の軍勢此間大高本寺の城に兵糧を運ひ納れ其勢を不休鳴海丸根鷲津等の戦をなし旗本の者共は其餘の城を攻に遣し僅に残る者とも大將を始士卒までも味方侮り油断をなして有るへき所へ無二無三に切入義元か首を手に取るか我首をとらるゝか二ツの間に身の安否を極めたり面々は自分

の意に任すへしとして清洲の城を打出給ふ

○内之者

花營三代記云應永卅年十二月廿五月初雪薄雪無管領道端成同御方成初成大名折紙千足進上アリ初會所成又折紙有増阿彌參御服袖一被食寄被下也自御方御スフウ被下管領已下大名小袖ヌカル兩御所御供人皆ヌク管領内者ヌクナリ御方御供

建内記云嘉吉元年三月八日六師庄代官職補任狀以明日日付今日晝與小倉小三郎飯尾以淨華院石見房傳達之

又云十三日丙戌今日於禁中東有松離事室町殿被仰近習并小番衆等被盡風流被召進候中略於大名者自身只着單物内々參候子息并内者等悉沙汰云々

家中竹馬記云小すわうの時も白き笠袋を大名などは必持せらるへき様に心得は謂れぬ事也大名の内者も式裝の時正字可は白き笠袋なり裝束に隨儀也云々

殿助僧正往年記云天文十八年三月朔日自江州爲公方御警固人衆九頭罷上於御所御近邊取陣之處北郡衆土戸正字可人衆與上野内衆喧嘩及大篇終日合戰公方衆悉馳集云々

武家名目抄稿第五十四册

稿檢校保己一編

稱呼部 十一 下

○家來

吾妻鏡云治承四年十月十九日戊戌爰高橋判官盛綱爲應裝束招請之次談話世上雜事得其便愁不被許下向事盛綱聞之向持佛堂之方合手殆慚愧云當家之迹因此時者歎於源氏人々者家禮猶可被怖畏矧亦如抑留下國事頗似服社家人則稱可送短札獻狀於彼知盛卿云加々美下向事早可被仰左右歎云々

太平記云道等供奉人本間孫四郎ハ元ヨリ將軍家來ノ者ナリシカ去ル正月十六日ノ合戰ヨリ新田左中將義貞ニ屬シテ兵庫ノ合戰ノトキハ遠矢ヲ射テ弓勢ノ程ヲアラハシ雲母

阪ノ軍ノ時ハ扇ヲ射テ手並ノ程ヲ見セタリ又云金時城彼城ノ有様三方ハ海ニ依テ岸高ク巖滑也中略何ナル巧ヲ出シテ攻ル共切岸ノ邊マテモ可近付様ハ無リケレ共小勢ニテ而モ新田ノ名將一族ヲ盡シテ被

籠タリ寄手大勢ニテ而モ將軍ノ家禮威ヲ振テ向ハレタ

レハ兩家ノ爭ハ只此城ノ勝負ニ有ヘント各機ヲ張心ヲ專ニシテ攻戰ノ事片時モタユマス云々

後愚昧記云應安六年十二月一日自今日武家行ハ講聽十口無證議武家々禮公卿殿上人着座云々

新撰長祿寬正記云德本實子有事ヲ悅政長ヲ疎シ義就ニ家ヲ繼カシメント色々政長ニ惡様ノコト多ケレトモ政長無雙ノ仁者ニテ孝行ヲ盡シ家來長者トモニ惡情ヲハケマシ殊ニハ管領細川勝元是ヲヒイキシケレハ皆人政長ヲ用ヒタリ

又云討死ノ人々ハ大將河内守國助弟左京亮下十七長尾孫太郎若黨ニハ中村與五郎高柳野崎與五郎遊佐カ家來ニハ岡部野太郎鶴左衛門次郎廣瀬高屋原父子中村孫七郎布施藤次郎總テ四十二人

義秋公方記云尾張國武衛下ノ家來ニ織田上總守平信長ト云者アリ云々

大内義隆記云サレトモ公家ニトリ給ヒ位階タカクアカリツ、冠ヲ着シ裝束色々ナリシ有サマニテ舞猿樂ヤ犬追物計ニテ弓馬ノ道ニウトクシテヲロソカニ有事トモヲ家來

ノ老中若輩ニ至ルマテ此事歎キツ、無益ノ公家ノ出立ヤ當家ノ武士ハスタリナントツフヤク事限ナシ

又云國ニイサムル臣アレハ其國ヤスク家ニイサムル子アレハ其家必ス正トイヘル本文アリ國ノ亂家ノカクフク事ハ家來ノ者ノシワサナレハナケカシフコソ覺エケル
 島山記云駿河國主今川義忠ハ姉輝ナレハ頼ミテ駿河ヘ下リケル時ニ義忠討死シテ其跡目氏親七才ナレハ彼一門家來雅意ニマカセ争ニ威勢ニテ合戦ニ及フ事アリ

文祿清談云嵐山樓 萬松院殿 大樹義 孟阪ノ頃天龍寺臨川寺法輪寺御願見被遊夫ヨリ嵐山ニ攀昇ラセ給テ彼方此方御歴覽アリ其折節供奉之人細川某カ家禮大群ノ供僕ニ揉レ忽氣息絶シテケリサレトモ公方供奉ノ折柄ナレハ相知レル人モ是ハイカニト計リ云テ立留リ扶助スヘキ者モ無し

矢島十二頭記云此七人さまざま評定しけるは御主を討るのみならず親兄弟故なく討殺れかよふに浪々の體口惜ケ様の儀一味同心仕て能事惡事も不存候得共御主敵なれば一矢射申も無理には有之間敷相談究り與四郎を留置て五郎殿家來筋のものともへ廻文を廻し候

又云天正十四年二月中旬仁賀保領冬師に馬場四郎兵衛親子三人矢島領谷地澤山の内大村杉の板盜取候ゆる早速谷地澤之次郎兵衛押懸ケ次男を討殺候仁賀保兵庫頭殿家來炮をうたせあたりをはなつて見えけるを木村隼人か甥に木村十三郎といふもの新七をめかけ十文字の鎗をふりまはしふりまはしけるを虎之助二間半の鎗を鐵炮の中へ打入はらひ入新七かかたさきつかれける

又云虎之助歩行衆へ申されけるはあの氣逸物の半助をうちと、むへしとて二尺九寸のかたなをぬき真直に敵の中へわりこみ半助馬上にて下知したりしを前輪のとをりよりうしろへつきとをしければ眞さかさまに落にけり則首をとり腰につけたる袋に入れんとするを半助か家來の侍すけあはせ虎之助をうたんとせしを虎之助同道の歩行者かけ合きりあひければすけんとせし者共も敗北す

又云主計頭に仰つけらる、は陸奥守か家來の侍とも其方小西召抱へき旨上意也
 又云玉名郡の内小森といふところに伯耆左兵衛か家來のものに伊津野將監といふもの一門家僕百三十餘人らうせきをふるまふよし郡奉行富田主膳所より申旨により誰をつかはすへきやと清正思案せられしかいや、自身下知をなしふみつふし國中の者ともに目をさませんと鐵炮五百挺侍貳百騎召つれ小森の要害にとり詰火をかけ鐵炮をはなしかけ、れば内よりつめて出た、かひけるかこと

分に候へは矢島殿へ仁賀保殿被仰遣候には熊谷山落仕候ま、曲事に被仰付候旨御申被遣候處矢島殿より返事には木盗人に御座候ゆる討留候よし被仰遣候所四月中旬まで數度の御使者相立候得共雙方申つもの五月廿日仁賀保殿もふなの木もふちまで出逢候て御戰被成候所赤宇津殿後詰被成候由にて矢島殿御引陣被成候

深谷記云皆々岡部の大林に草をふせ被申所に木道を通り不申脇道を雜兵四十人餘にて通りし處を中村權右衛門言葉をあはせ馬より突落候を家來市左衛門則押首を取申候云々
 奥羽永慶軍記云仁賀保宮内 少輔生書條矢島五郎ツラツラ謀計ヲ運ニ仁賀保カ家來土門兵部小川十左衛門孫勝左衛門ニ過分ノ賄ヲシテ仁賀保我手ニ入ハ三分一ヲ押領セント證文ヲ渡シ云々

荒木畧記云荒木一家は丹波の牢人にて小身に御座候故當分池田近所故民部大輔勝政へ付候て居申由申候然る處に勝政作法あしく武勇も勝れ不申右に申候桂合戦之時も家來手柄とも仕候に打捨丹波路を一人落被申候云々
 清正記云虎之助達者第一の若者なれば諸勢せめ入し跡よりのりこみし處に佐治家來近江新七といふ者の下知し鐵

ここと鐵炮にてうちたをし將監か首を神受茂助といふ者討取
 三好記云杉原ハ落行テ後ニハ三好方ヘ牢人シテ三好ノ家來ト成トカヤ
 甲陽軍鑑云家來之者冠落之時縱雖造作入候一途可加ニ下知ニ事
 信玄家法云家來之者共非無覺悟就于不便無據者一往者可加合力ニ事
 箕輪軍記云爰に法如といへる諸國修行の僧一人來り内藤圖書之介へ對面を願(中略)圖書之介暫く感し入然は此旨跡にて甲府へ申上ん業盛の死骸願のことく貴僧に渡さん如何様にもせられよと家來に申付死骸を法如に下されける

末森記云持病ノ胸虫指起テ出陣難成子時家來岡島名兵衛諫テ云胸虫ノ藥ハ糞ニ不レ如ト九郎左衛門氣色ヲ損名兵衛一口飲之風味ヨシトイヒテ進之其時九郎左衛門飲之得快氣ニタリ
 松隣夜話云前橋城中ニ於テ各役所ヲ割リ別ケ陣札ヲ令打給城主入道謙忠ハ西ノ丸穴門ノ内一段低キ地ニ陣ヲ打謙信翌日謙忠ヲ召ス其時謙信書物ヲ披キ承候ヘトテ自

ラ讀聞セ給家來ノ侍戸部ト云者ヲ甲府へ遣シ歸着以後妻
子眷屬迄是ヲ害ス其意謙信カ聞シコトヲ相憚ル隱謀ノ企
無疑事云々

又云小荷駄兩陣ノ内長尾小四郎ハ不有恙同名傳左衛門
ハ敗軍ニ及ヒ候ヲ以テ小荷駄ハ不殘存レケリ謙信大ニ
怒リ給ヒ翌日早旦ニ首ヲ切關山ニ掛サセ家來トモ二十四
人歷々ノ者トモ一所ニテ一人モ不殘討捨ニサセ給フ
又云三樂七組ノ者老衆ニ問ハレケルハ承ルニ御家來ノ衆
諸方度々ノ御覺是多ト云ヘトモ一番館初印シ等先鋒ニ有
手柄ハ皆四十以前廿卅ノ若侍云々

○家中

蜷川親俊記云天文八年閏六月廿二日戊子誠其後は不申
通候本意之處芳問所希候殊自費殿預尊札候辰松通
以別紙委細令啓達候宜候様申沙汰可爲肝要候御
家中之儀未相調之由候歎目出度屬御本慮之段退而可
承候急御懇之尊慮祝着無極候由能々申入度候恐惶謹
言

新撰信長記云去程ニ尾州岩倉ニ在城シ給ヒシ織田伊勢守
殿死去ノ後子息ノ代ニ成萬我マ、ニ不行儀ニテ家老ノ諫
メヲモ用ヒス武勇ノ儀ハ中々沙汰モナク唯朝夕酒宴亂舞

愚耳舊聽記云爲信公於野時
村御計火之條爲信様三御家老を御前にめし思
ふ子細ある間惣家中の人數着到を近日懸御目よと仰け
る三人畏候として不日着到差上る爲信公御覽して惣人數千
餘人は思しよりは不足也と仰ける

甲陽軍鑑云甲州法度之次第對家中之郎從一慈悲肝要之
事

甲陽軍鑑末書云御旗本足輕八百八十四人總御家中足輕五
千四百八十九人足輕二口合六千三百七十三人總人數合五
萬二千二十三人也

慶長見聞記云會津ノ羽柴藤三郎會津ヲ召上ラレテ十九萬
石ニテ宇都宮ニ國替被仰付子細ハ去ル甲午ノ歲飛騨守
卒去藤三郎ハ鶴千代トテ幼少ノ間大家中殊境目ニテ御坐
候間家老蒲生四郎兵衛ニ國中ノ義并ニ家中ノ仕置可仕
ノ由太閤様御朱印ヲ被下候間諸事四郎兵衛申付云々

義殘後覺云毛利中納言輝元ノ家中ニ入江大藏之丞トテ凡
日本一ノ大力有或時太閤聚樂へ御成被成ケレハ諸大名
伺公シ給フ其時太閤仰出サレケルハ如何ニ毛利中納言其
方ノ家中ニ入江大藏之丞トテ大力ノ有由ヲ聞及ヒタレハ
予カ抱置伊與ノ德猪之丞ト相撲ヲトラセテ見物セハヤト
被仰出ケレハ云々

迄ニテ被暮故家中ノ者トモ飽ハテトヤセン角ヤアラン
ト申沙汰

毛利家記云元就卿一々ト被聞召奇特ノ見立ニテ候我モ
内々大内家爲體今ノ分ニテハ難治ト思シニ左様ニ家中
不和ナラハ無程防長ハ亂レナント仰ラレシ

伊達日記云相馬ハ我等親代ニハ弓矢ニ候ヘトモ無事ニ罷
成懇切ニ候處ニ田村ノ清顯ト申者我等勇ニ候相果彼地主
無御坐候田村近所ニ石川彈正ト申者拙者家中ニテ候相
馬義胤ヲ頼逆意仕候退治仕ル所ニ義胤彈正抱ノ地へ被
罷越助抱申サレ候故退治不罷成大森ト申處へ引込候
云々

文祿四年御成記云家中諸大夫國衆奉行衆何も御縁通りの
御禮也云々

北條五代記云秀吉公關
東發向條秀吉公は西の高山に陣城をかまへ小
田原の城を見おろしはた本には九州島津同き大友中國に
毛利おなしき吉川小早川を始めとしてうしろは峰をのほ
り谷をくたりに陣取左陣にさしつ、き長岡越中守津の侍
從浮田宰相近江中納言并に家中衆中村式部少輔堀尾帶刀
一柳伊豆守山内對馬守次に大柿少將松ヶ崎侍從尾張内府
おなしき家中衆澤井左衛門尉天野周防守云々

又云中野長刀
仕合條備後ノ仁ニ今枝有無之丞親重ト云士アリ生年
二十七歳武者修行ニ出テ勢州ニ至リヌユカリヲ尋テ申入
ル、程ニ國司許容シ給ヒケル去程ニ諸家中打寄テ半弓ノ
雜談ヲ聞テ各弟子トソ成ニケル

清正記云陸奥守事以一書被仰出ことく去十四日腹を
切させられ候雖然家中の者の義は不苦候間其方小西其
其に見斗知行方念を入遣之爲兩人可抱置候云々

又云陸奥守家中の者の義は無其罪事候間爲限本有
之加藤主計頭字七有之小西攝津守可致合宥候云々
新田由良家傳記云御家中御法度書之事一衣服は公儀むき
はのしめあやあついた家中城中の番出仕の時は不漸は可
爲緝細事

松林夜話云玉繩ニ歸レハ平井ニテ須賀野大膳等近臣推寄
リ日々夜々ニ難有評定異儀區々ニシテ埒不明斯リケ
レハ彌家中ノサタチ様々ノ巷説有テ府中近邊ノ町人百姓
等以ノ外ニ騷動ス近習ノ外ハ悉ク恨ヲ含メル家中ナレハ
此節ノ御用ニ可相立ト云者一人モナカリシ
又云三樂ヲ始メ御家中七組ノ面々其外諸士次第ニ居流レ
配膳ヲ給ハリ所々ニ古今ノ軍物語曉天ニ及云々

○家風

太平記云公家一統相州ノ一族關東家風ノ輩カ所領ヲハ無シ
 指事政道條一郡曲妓女ノ輩賦納伎藝ノ者共乃至衛府諸司官女官
 僧マテ一跡ヲ合テ内奏ヨリ申給ハリケレハ云々
 別所長治記云山城守被申ケルハ今度秀吉當國へ下向シ
 テ近國他國ニ振威ヲ別所ノ家臣ニ向ヒ無シ遠慮ニ我意ヲ
 振舞ノミナラス剩我下人ノコトクニ挨拶シ國人ニ首ヲ上
 サセヌヤウニスルコト心底ヲ察スルニ信長ノ謀計ト存ス
 ル其子細ハ近年東國ノ沙汰ニ聞ニ關東ニ有ニ四大將ノ北條
 氏康武田信玄織田信長上杉輝虎也其内信長ノ武勇カタキ
 ハ表裏第一也表裏ニ善惡ノ一アリ勇將ノ討敵ヲ謀略ハ各
 別ノ事也信長ハ偽ヲ專ラ成給フニヨリ家風下々マテ輕薄
 多シ云々

鹿島治亂記云抑鹿島左衛門大輔義幹者忝モ桓武帝之末葉
 平氏也舍兄前五郎法名仁山討死而名代退轉之間幼稚而相
 續因茲家中面々恣ニ押領所領士貢以下一任ニ我意ニ所務
 來納法當時之十ヶ一也然故家風面々富貴ニ過來所漸々義
 幹成長而好勇無學依之臣畏不親人爲人ハ無如學
 云々

北條五代記云大森寄栖庵か上杉民部大夫顯定へ遣す狀に
 いはくつら〜御進退を見るに偏に天魔の所行時節到來

先一揆ニ云々

松隣夜話云三樂日頃則政公へ參馴タル日進僧ヲ以テ使ト
 シテ被申ケルハ故道灌橫死ノ後幕下ニ候シ多年相睦ノ
 處ニ近頃御家風大キニ違ヒ國家ヲ可ニ治給ニ善政絶テ不
 レ有之候

○手勢

平家物語云瀬尾最倉光三郎畏承はつて手勢三十騎はかり
 瀬尾太郎を相具して備中國へ馳下る

吾妻鏡云文治五年七月廿八日丙戌著新渡戸驛給已奥州
 近々之間爲知食軍勢仰御家人等一面々被注手勢ニ仍
 各進ニ其着到

難太平記云式部大輔入道殿事中先代合戰の時海道
 の大將として自京都下向遠江國さやの中山にて先代の
 大將名越と云者を討取き相模國湯本にて海道のとき要害
 を構て支ける間北の山に打上りて式部入道殿の手勢斗に
 て落されて敵の大勢の中に馳入られしかは追破られき
 應仁記云勝元大ニ悦ヒ勢ノ多少ヲ知ランカ爲ニ先着到ヲ
 付ルニ勝元ノ手勢攝州丹州土佐讚岐其外諸國被官等馬廻

乘六萬餘騎同讚岐守成之阿波三河兩國ヲ將テ八千餘騎云

のみきりか抑關東の様體今に至て見廻候山内の御事は公
 方様御在世の時分より上杉の統領然間諸家彼旗本を守り
 尊敬比類なし御勢二十萬騎と云々扇谷の御事はわつか百
 騎斗なり然所に縱令御家風太田道灌不思議の器用をもつ
 て名を天下にあげはまれを八州にふるひ諸家心をよせ萬
 民頭をうなたれ獲をなす事しかしなから天道の至り又は
 其身の果報か何様兩條に過へからす末代濁世たりといへ
 共日月地に落さる事三歳の幼稚もかくと仕事に候かかく
 のことく申事誠に推參至極に候といへとも愚老累代に及
 ひ當方御家風同前に候間心底別義を存せず隔心なく申の
 へ候云々

甲陽軍鑑末書云信玄公被仰三ヶ條事佛法ハ我宗計ニ限
 ラス諸宗ヲ用ラルヘキトテ時宗一向宗ニ至迄御崇敬也國
 ニ剛キ弱キハ是ナシ剛弱ハ家風也家風ハ其時ノ大將正儀
 亦ハ邪儀邪法アレハ其下ノ諸人ハ必大將ノ穿鑿不穿鑿ノ
 分別次第ニ大小上下共ニ成也

松原自休手録云朝倉ハ淺井加味方上へ信長ハ陷切處
 於此可討留一謀ハ雖尤元來柔和ナル家風ナレハ不急
 之若州江州之起一揆往來ノ差塞道路欲擒之家康
 秀吉手早キ勇士ナレハ朝倉不襲來以前ニ打立追拂先

又云義就聞モ不致御下知ノ旨尤庶幾スル處也獨身ニシ
 テ勝負決セン事累年ノ本望ナリ手勢計ニテ明日政長宿所
 春日萬里ノ小路へ押寄可決勝負剛脆ノ程御見物候へ
 トソ被申ケル

太閤記云堀尾二百人預りし弓鐵炮に下知して曰なるへき
 はと馬上につ、き山崎の上なる天王山へ急へしと汗馬を
 はやめ山半腹にして馬より下我勢を見ればやう々々手勢
 十五六騎弓鐵炮の者二十人はかりそつ、ひたる

荒山合戰記云遊佐温井三宅ノ輩石動山ノ衆徒ト心ヲ合セ
 本國還住ノ謀ヲナシ先石動山ニ城墩ヲ構兵糧ヲ取入人數
 ヲ催ス由聞エシカハ能登ノ守護職前田又左衛門尉菅原利
 家此事ヲ傳聞テ大ニ驚キ吾手勢計ニテハ大敵防キ難カル
 ヘシトテ越前守護職柴田修理亮勝家并其甥佐久間玄蕃允
 盛政カ方へ加勢ヲ請ン爲書翰ヲコソハ送りケレ

築輪軍記云井田落城條爰に那波無利之助と申者手勢二百
 五十餘人にて秋間山を飛越烏川を打渡登坂常陸之助長信
 カ岩手を賣云々

○手者

吾妻鏡云承久三年六月十八日辛未今日遣使者於關東是
 今度合戰之間討官兵又被疵爲官兵被討取一者彼是

有數(中路)六月十四日宇治橋合戰河懸時御方人々死日
記(中路)新太郎櫻井次郎浦太郎平次太郎寺尾四郎兵衛高井三
郎島名刑部三郎屋島六郎神保與一道智三郎太郎麻彌屋四
郎同次郎武藏守殿御手平六少輔房五郎殿石河平五佐伯左
近將監片穂刑部四郎飯田左近將監足洗藤内中三入道後平
四郎

承久軍物語云六月十二日海道の大將さかみのかみ時房せ
たのはしちかくをしよせ野路にちんをとりましたまふはやり
をの兵とも河はたにをしよせみれば橋いた二けん引おと
しかいたてかきて山田次郎を大將として山法し少々ちん
をとりましたさかみのかみの手のはしみ見の太郎さ、
め佐々の次郎はや川以下はしつめにをしよせてた、かひ
けるかかたきにてしけくいしらまされて引しりそく
梅松論云淡川の軍破れしかは御陣は御下向の兵庫の奥の
御堂にてそ有し高尾張守の手の者討取し間正成か頸持參
せられける云々

太平記云大塔宮熊野宮是ヲ御覽シテ玉顔殊ニ儼ニ打笑マセ給
テ御手ノ者共ニ向テ矢種ノ有ニスル程ハ防矢ヲ射ヨ心靜
ニ自害シテ名ヲ萬代ニ可レ貽云々
又云楠出張天宇都宮一人武命ヲ拾テ大敵ニ向ハン事命ヲ

す打うなつかせたまひて隠岐か手の者ともと思召たれば
とて御泪せき敢させ不レ給云々

鎌倉大草紙云かくて國々の調儀終て應永十七年十月二日
戌の刻はかり新御堂殿並持仲御所忍て殿中より御いて西
御門寶壽院へ御出有て御旗を揚らる、犬懸の郎等屋部岡
谷の兩人手の者を引卒其夜塔辻へ下り所々堀切鹿垣を結
渡し走矢倉をあけ持楯をつき家々の幕を打一揆の旗をう
ちたてたり

應仁別記云醍醐山科醍醐山科ハ三寶院御持有ケレハ御合力
トシテ赤松衆武田衆相拘タリ爰ニ目付ニ骨皮左衛門道源
トテ多賀豊後守所司代之時走舞タルカ手ノ者共京中山城
脇ニ多カリケリ申子細有ケレハ勝元吳服ノ織物金作ノ
太刀ナト給ヒケレハ山科ヨリ稻荷へ打越テ社務羽倉出羽
守申合イナリ山ノ上ノ社ニ陣ヲ取云々

石川文書云曾廣院殿去七日於宇多庄合戦之時親類土佐守
以下手の者其數討死條神妙候仍白川の事は堅可レ有御沙
汰候彌可レ致ニ忠節ニ候也謹言五月廿六日石川中務丞殿滿
家花押

越後一宮彌彦社藏上杉輝虎願文云輝虎守筋目ニ不レ致ニ非
分事一信州江成行事第一小笠原村上高梨須田井上島津

可レ惜ニ非サリケレハ七月十九日ノ午尅ニ都ヲ出テ天王
寺ヘソ下リケル東寺邊マテハ主從僅ニ十四五騎カ程トミ
ヘシカ洛中ニアラユル所ノ手ノ者共馳加リケル間四塚作
道ニテハ五百餘騎ニソ成ニケル

又云親光討大友カ若黨三百餘騎結城カ手ノ者十七騎ヲ中
ニ取籠テ餘サス是ヲ討ントス

又云千種殿備後三郎大ニ怒テカ、ル臆病ノ人ヲ大將ト憑
ケルコソ越度ナレサリナカラモ直ニ事ノ様ヲ見サランハ
後難モ有ヌヘシ早御通候へ高徳ハ何様峰ノ堂へ上テ宮ノ
御跡ヲ見奉テ追付可レ申ト云テ手ノ者兵ヲハ籠ニ留テ只
一人落行勢ノ中ヲ押分ケ押分ケ峰ノ堂ヘソ上リケル

又云長崎次郎高重長崎次郎高重ハ始武藏野ノ合戦ヨリ今日
ニ至ルマテ夜晝八十餘ケ度ノ戦ニ毎度先ヲ懸圍ヲ破テ自
相當ル事其數ヲ不レ知然ハ手者若黨共次第ニ打亡サレテ
今ハ僅ニ百五十騎ニ成ニケリ五月廿二日ニ源氏早谷々へ
亂入テ當家ノ諸大將太略皆討レタマイスト聞エケレハ
云々

伯耆之卷云長高武き心にも涙を流しければ残者共皆胃の
袖をそぬらしける君も是らは體を御覧有之自龍顔
御涙を流させ給ける良在之長高御迎に參たる由を奏

其外信國之珍士宰道又は輝虎分國西上州武田晴信成レ妨
て於河島中島も手飼の者數多爲ニ討死ニ口此所存を以武田
晴信退治之縁是又非道有之之間敷事云々

關八州古戦録云武田勝頼武田左馬介信豊ヲ大將トシ小幡
上總介重貞(中路)初鹿野野傳右衛門ヲ相副へ都合三千餘兵
ニテ廣木ノ城へ差向ラル此城未タ造作ノ功全カラス普請
半ノ儀ナレハ在合士卒僅七八百人ナラテハナカリケルカ
弓鐵炮殿シク放シ懸テ防キシマ、典厩ノ手者死傷多ク思
ノ外乗捕兼タリ

豐鑑云佐久間玄蕃同三左衛門久右衛門はいかい徳山など
具して遙の嶺を傳てよこの海のきはを廻り中川瀬兵衛高
山右近が陣取を落さんと責戦ふ叶はしと思ひけん高山
右近は手の者引連秀吉の陳所木本へ落行ぬ

永祿記云廿八日信長到東福寺出陣たり柴田蜂屋森三左
衛門阪井右近此四人に先陣被ニ申付則桂川を踰て石成主
税助楯籠る城塙勝龍寺表を打廻し候處石成少々人數を出
す先陣四人手者一戦に及首五十餘討ニ捕之一

清正記云茂介主計に申されけるはかやうの時節本道をま
ん丸に備をなし退出せんと談合し靜にのきし處に一揆と
もしきりに鐵炮うちかけたひけれと堀尾手の者は中に

及はす自身も加藤も手錠うち入うち入つきはらひければその勢ひにおそれをなし互に相引にして一揆ともしたふ心もなく退散し云々

愚耳舊聽記云尾崎三日内 木村越後は手の者若黨三拾人斗引つれふれ先にかけて出北の御門より責入ける

○手人

大判事中原章茂記云應永廿三年九月御手人看督長二人參申入候可被下御訪候兩人分千疋候既無餘日候間今日被下可致其用意之由申候兼又走下部二人は昨日被下半分之由申候若二人御略候哉委細被仰下可加下知候哉委細之旨今日不參申候且捧愚狀候内々可下令披露給恐々謹言九月三日井上殿章茂猶々囚守可隨御左右可加下知候了

東寺執行日記云文安五年八月八日赤松ノ故太夫入道弟左馬允頸内者ニ絹笠左京亮廣世ノ六郎右衛門尉手人頸自河内國タイマ寺入洛打手ハ細川讃州内々ハ打之

○手下

初井日記云四國備前 今度ノ次第ハ織田殿カ天下ノ將軍ニ究り候ユエ丹波家ノ取扱ニテ毛利殿モ織田殿ノ手下ニ成セラレン故西ノ海ノ果マテ成ク織田殿カ治メラレテ日

ゆへ政宗衆も追止りける堤より七八丁も除候所へ政宗手廻り三百騎斗歩行者なく乗切て急に追來り候云々

東遷基業云今日木津に着御ありて名主か家に御幡を立られ暫御陣を取給ひ(中略)それより奈良へ至り給ひ中坊左近か宅に御止宿あり此時に御手廻りの下部の中に紛れ者一人有之傳馬を出す時に人數をあらためけるに見知らざる者として擄取て穿鑿ありしか密事なるにや其後御沙汰なかりし云々

本國カ太平ノ世トナルニテ候

○手廻

平塞録云細川立允殿相備ノ組頭三淵内匠ハ昨夜本陣へ相詰今日鍋島手ヨリ出丸へ仕ヨリヲ仕ル由ヲ聞竹束裏へ出テ様子ヲ伺ケル處へ早鍋島殿ヨリ出丸ヲ乗取様子故早速甲冑ヲ着テ打出ケル竹束稠ク弟シテ城戸ヲ不ノ開内ニ總人數後ヨリ推重リシユへ内匠ニ後テハ無念也ト竹束ノ手ヲ越テ立上リ家來近藤六之丞横田奎十郎へ申付竹束ヲ左右へ推開セ飛出ル手廻リ纒ニ十二人付シタカイケル

義殘後覺云壹岐守ハ粥ヲヌ、リテ有シカ膳半ニ鯨波ノ聲ノ聞エケレハアヤシヤ誰成ラント云ハ番ノ者トモ敵カ付テ候ト申素ヨリ晝ノ軍ニ草臥ケレハ前後モ知ラス伏タリ其上手廻ノ者トモ、面々カ私宅ニ歸テ城中ニハ上下廿人計ナラテハナカリケリ

武蔭叢話云天正十一年十月に柴田因幡守退治に景勝尾出馬の時景勝旗本まで因幡守乗掛大事に及び候所上杉入庵は旗本前備にて罷在候景勝紺地日の丸の旗を取三十間程先へ押出し入庵手廻りの侍共下馬致させ自身を取膝の上のせて芝居に折敷て備を立候に付柴田引返し引取候又云岡左内は旗を堤に押立て敗軍をまとい屹と返し合候

武家名目抄稿第五十五册

塙檢校保己一編

稱呼部 十一上

○御内

太平記云備前 頃テ京都へ早馬ヲ立テ天王寺ノ敵ヲハ即時ニ追落シ候ヌト申タリケレハ兩六波羅ヲ始トシテ御内外様ノ諸軍勢ニ至ルマテ宇都宮カ今度ノ振舞拔群ナリト譽ヌ人モナカリケリ

又云六波羅 爰ニ官軍ノ中ヨリ櫛句ノ鏝ニ薄紫ノ母衣懸ケタル武者只一騎敵ノ前ニ馬ヲ懸ケ居テ高聲ニ名乗ケルハ是ハ足利殿ノ御内ニ設樂五郎左衛門尉ト申者也六波羅殿ノ御内ニ我ト思ハン人アラハ懸合テ手柄ノ程ヲモ御覽セヨト云儘ニ云々

又云千劍破 城ノ大手ニ三本房笠ノ紋書キタル旗ト同キ文ノ幕トヲ引テ是コソ皆名越殿ヨリ給テ候ヒツル御旗ニテ候へハ御文付テ候間他人ノ爲ニハ無用ニ候御中ノ人々はへ御入候テ被召候へカシト云テ同音ニトツト笑ヒケレハ云々

又云相模入道肉ニ飽キ錦ヲ着タル奇犬鎌倉中ニ充滿シテ四五千匹ニ及ヘリ月二十二度犬合ノ日トテ被定シカハ一族大名御内外様ノ人々或ハ堂上ニ座ヲ列テ或ハ庭前ニ腰ヲ屈メ見物ス

應永記云去程ニ民部丞涙ヲ流シ申ケルハ御内ノ者共五六千人モ候ランニ某一人只今御前ニテ討死ラン事ヨ主從ノ契リハ勝レ我者ナキコソ生前死後ノ面目ニテ候ヘト申ケレハ憑敷思シニ少モ不違一所ニテ冥途マテ伴ハント契リノ程コソ嬉シケレトテ互ニ手ヲ取組ンテ敵ノ中へ切入テ向フ敵三人討取り民部ソコニテ討死ス

東寺執行日記云文安五年八月八日赤松ノ故太夫入道弟左馬允御内者ニ絹笠左京亮廣世ノ六郎右衛門尉手人頭自河内國ノタイマ寺迄落打手ハ細川讚州内ニハ打レ之

應仁私記云今度就ニ一亂可入字凡注侍也天下屬靜謐先以目出度候雖レ然山名金吾宗全入道依ニ惡逆謀叛反逆凶徒ニ廻計略引ニ率軍勢既企欲覆天下ノ露顯條御内仁左右人兒垣屋太田垣最初一往加様之趣目太不可然之由再三雖ニ教訓申ニ更無ニ御承引云々

季瓊日録云延徳二年二月十三日自鹿苑侍具問云上様見贈ニ御經ニ大上様ト禮ト可書乎大御所御内者之故云爾愚

御内衆居組候ニ捕申事モ不成就候表ノ庭迄御門送ニ御出候云々

深谷記云なまの山御陣に中村彌五郎十六歳之時初陣に立甲州衆より出合組打仕彌五郎内之者に酒井助八郎直見甚五郎と申て二人御座候か助八郎敵の兩腕を打落し首取り申候

末森記云鷲津九藏ト云者懸出一番鎧ヲ入レケルヲ庄兵衛見捨テ助ケサリケリ山崎内ノ者共申ケルハ九藏殿討死ト見エテ候ト云ヒケレハアレヲ討死サセテコソ我一番ニナレト云テ九藏ツキタホサレタルヲ見テ返合セ鎧ヲ合ヌ

宗五大雙紙云武家へ參會之事細川殿島山殿山名殿一色殿赤松殿大内殿右馬頭殿土岐殿武田殿金仙寺大名の内衆には上原豊前波々伯部多賀豊後陶間田杉浦上など所にて見及候ひつる各參會所へ公家衆飛鳥井殿藤中納言殿御出候事候ひし時三方にて御膳を調參候へは殊外御斟酌にて各のことく足付にて御參候ひつる又あつかひもなくこなたより云々

又云諸大名へ御成の時は萬疋被遣候其時舞臺の兩に五千疋宛つまれ候五百疋つ、兩の手に引さくるようにこしらへて大名の内衆器用もなく隨分の仁十人持て被出候

云上様可然乎依有上様御入大御所御内ヲハ二條殿ト白スト承乃能々可レ見尋云々

細川亭御成記云大永四年三月六日午刻御成從小門在之御塗與御立烏帽子御直垂御服は御織物薄かこく足様も御直垂小門外に北向に御長有御内衆年寄衆各罷出畏御屋形様は前より足様御座有之平中門の外畏有御すわう御成御供は大館兵庫助殿御劔九郎殿駿河守殿島山次郎殿勢州伊勢備中守殿伊勢左京亮千阿彌御妻戸より御成有て於御寮殿ニ盃參御盃御給有御太刀金御進上聽而御直垂を御ぬき有て御すわう式三獻參云々

殿助僧正往年記云大永五年四月廿一日右京兆高國俄落髮内衆仰天馳走無別子細之故則相靜内衆七人落髮云々

又云大永五年十月二十三日細川六郎今夜死去内衆三十餘人遁世落髮前田自害但依ニ取支不レ死云々

又云天文八年六月右京兆内藉亂三好孫三郎與同名甚五郎一依ニ確執也右京兆高雄迄被引退之間内衆悉退散及數箇月合戰洛中大騒動六角至坂本上洛相調之十月頃屬無事了

伊達日記云義繼輝宗公御陣所へ御出候(中略)御雜談モナク御立候御門送ニ御立候内ニテ御禮被成候其左右ニハ

足付に拵へ候ても參り候左様の時も人の内衆座頭田樂猿樂以下その外遊物同前かはりめなく候

産所記云百日の内は御祝言の事御内者家へ出入の者に毎日御いはひあるへし

相州兵亂記云上杉安房守數萬ノ軍勢ヲ引率同四日上州ヲ打立同月十九日ニ分陪川原ニ着玉へハ御旗本ノ人々御内外様ノ侍奉行頭人ニ至ルマテ公方ヲ捨置申憲實ノ勢へッ馳加ハル今ハ宗徒ノ御一門譜代舊功ノ御勢ヨリ外ニ殘リ留ル人モナシ

信長記云義昭公ヒソカニ南都ヲ御出有テ江州甲賀郡和田和泉カ館へ入給フ其ヨリ同國矢島郷へ被移ニ御座ニ永祿八年八月ヨリ同十年ノ八月マテ御滯座ナサレシカハ散在シタル御内外様ノ人々モ方々ヨリ馳參忠功ノ志ヲ勵マシテ天下ノ怨敵ヲ追討シ先亡ノ遺名ヲ雪キ後榮ノ期ヲソ計ケル

多聞院日記云天正十四年正月三日宰相殿從大坂今日申尅御歸明日は御内衆御禮云々

○外様

太平記云相模入道肉ニ飽キ錦ヲ着タル奇犬鎌倉中ニ充滿シテ四五千疋ニ及ヘリ月二十二度犬合ノ日トテ被定シカ

ハ一族大名御内外様ノ人々或ハ堂上ニ座ヲ列ネ或ハ庭前ニ膝ヲ屈メ見物ス

又云持明院殿行幸六波羅條陶山河野ニ向テ云ヒケルハ何トモナキ取集メ勢ニ交テ軍ヲセハ愁ニ足纏ニ成テ懸引キ自在ナルマシイサヤ六波羅殿ヨリ被差副ニタル勢ヲハ八條川原ニ引ヘサセテ時ノ聲ヲアケサセ我等ハ手勢ヲ引勝テ蓮華王院ノ東ヨリ敵ノ中ヘ懸入り卿手十文字ニ掛破リ弓手妻手ニ相付テ追物射ニ射テクレ候ハント云ヒケレハ河野尤可然ト同シテ外様ノ勢二千餘騎ヲハ鹽小路ノ道場ノ前ヘ差遣シ河野カ勢三百餘騎陶山カ勢百五十餘騎ハ引分テ蓮華王院ノ東ヘン廻リケル

又云義貞馬因強條大將新田左中將義貞朝臣ハ赤地ノ錦ノ直垂ニ脇立ハカリシテ遠侍ノ座上ニ座シ給ヘハ脇屋右衛門佐ハ紺地ノ錦ノ直垂ニ小具足計ニテ左ノ一ノ座ニ着給フ此外山名大館里見鳥山一ノ井細屋中條大井田桃井以下ノ一族三十餘人思々ノ鎧甲ニ色々ノ太刀刀奇麗ヲ盡シテ東西ニ行ニ座ヲ列ス外様ノ人々ニハ宇都宮美濃將監ヲ始トシ彌津風間敷地上木山岸瓜生河島大田金子伊自良江戶紀清南黨以下着到ノ軍勢等三萬餘人旗竿引ソハメノ膝ヲ屈シ手ヲ束テ堂上庭前ニ充滿タレハ由良舟田ニ大暮ヲカケケ

サセテ大將遙ニ目禮シテ一勢々々座敷ヲ起ツ云々

花營三代記云應永二十九年壬寅十二月二十九日御社參還御自管領又五番被進七條マテ參上御靈并清和院ヨリ八幡直御參詣御參詣始也自御方大御所様江御太刀有御進上管領已下諸大名外様近習面々特ニ御方伺公證御太刀進上八幡御籠中進上御點心折紙人數事皆十貫文管領以下十七人云々

建内記云正長元年五月六日丁巳早旦着東帶參等持院如昨日結願也中略次以東帶之體參室町殿申入無爲珍重之由南都北嶺僧衆同參賀了於御會所外様先有御對面予於東面構見參

永享以來御番帳云五ヶ番之着到事永正九壬申冬頃一番之中條從三河有上洛爲外様衆可有出仕旨被申上候間一番衆言上之趣者往古者雖爲外様衆慈照院殿様御代中條依有自訴子細一番衆被入出頭無其隱者也

文安年中御番帳云外様大名衆山名因幡守護細川右馬頭入道下略康富記云文安六年四月十九日己巳室町殿御元服之參賀也先諸大名近習外様進上御太刀懸御目云々

又云康正元年八月二十七日庚午公方御臺様御治定御祝着儀同有之入夜御祝儀但人々外様衆別不被申御禮歟御臺ト申ハ日野大納言勝光妹也

慈照院殿年中行事云正月朔日出御于御對面所三職一人充御太刀持參御禮膝行御盃頂戴之中略次御相判衆國持衆准國主外様衆御供衆一人充出席御禮御盃御服拜領之

長祿二年以來申次記云正月四日公家申次さいの際へ參て公家と申入て今日式日參賀衆數多在之大外様衆惣番衆上様御被官少々奉行衆醫師藝阿善通事公家定行其次觀世にてあるへき由大館與州承候へ共大外様惣番衆上様御被官奉行衆藝阿公家醫師清竹田類定行善通事觀世たるへき由我等は申候

長祿以來御對面日記云正月四日吉良東條殿有宣通阿等も御練貫拜領之衆也東條殿ハ二重其外一重也東條殿父子出仕之時ハ子息ハ一重也次大外様并奉行衆御太刀拜領之次ニ後之出仕無之時分御對面之次第不及其沙汰

季瓊日錄云寬正元年五月五日諷經以後御燒香大名并外様悉被參侍也南禪長老一華和尚以拈香故御相伴

嵯川親元私記云寬正六年十二月二十日癸巳御所様御座之間に若君様へ管領以下面々御參賀管領太刀國馬寄中略

公家外様御供衆番頭人御前奉行

又云寬正六年十二月二十一日甲午攝家已下公家御參賀自大門入御中門へ入申之武庫於御車寄御申次少々貴殿へ御禮太刀金昨日不參之外様奉公方々參賀云々

常徳院殿御乘馬始記云管領御馬太刀進上そのま、御前に伺候其外國の衆進物同公家御供衆外様奉公方奉行山法師少々醫師陰陽家の者御太刀進上外様奉公方奉行衆すわう小袴の衆もましまるなり

齊藤親基記云文正元年十二月二十日午刻自右京兆門前在家出火爲御倉梶井相國寺鎮守之條警固馳集御所中外様衆被差遣之爲上使布野州并親基罷向依加成敗無爲

應仁記云室町奉行幸之條去程ニ右京大夫勝元ハ同八月十八日香川安富秋場等ヲ花ノ御所ノ四足ニ喚ンテ云旁ハ未タ被聞

スヤ殿中伺候ノ奉公衆ノ中ニ敵方一味ノ族有テ密々ニ案内ヲ通シ籌策ヲ廻ラストタシカニ聞ク然ラハ此趣ヲ上聞ニ達シテ彼阿黨ヲ殿中ヲ追出スヘシサナクハ大事出來セント云家長共大ニ仰天シテ評定モ事ニヨル是程ノ火急ノ事片時モ不被猶豫急度可被追出トテ則相催ス軍勢半時ノ間究竟ノ武者六千人馳寄則御所ノ四方ヲ打圍テ諸人出入ヲ撰ヒカウキニ及フ殿中ニ出入公家上臈女房衆外

様ノトモカラモ何事ソト臆ヲ消ス云々

文明十一年記云正月十七日御的始有之(中略)外様衆には赤松又次郎赤松越後彌五郎兩人祇候大名并此兩人うらうちなり

沙汰未練書云外様將軍家奉公地頭御家人等事也

親長卿記云明應二年四月二十六日今日開武家近習外様奉行頭人等大略昨今落河内陣出京云々

蟻川親俊記云永正十三年六月十一日禁裏御門役島山殿當月中來月之儀外様衆エ可被仰出候歟如何之由伺被申候御意得候旨在此

加賀守貞滿筆記云評定衆事外様と同前惣別評定衆と申は攝津二階堂波多野町野等也何も外様衆之分也

簡禮記云仁木方上杉方其外之外様衆へノ事仁木上杉ノ事ハ其廉有之故ニ大方充所書タルヘシ

永祿六年諸役人付云外様詰衆以下攝津掃部頭晴門波多野彦五郎下

大内家壁書云殿中見物御禁制之事縱爲出仕祇候之人於外様衆者不可見與云々

甲陽軍鑑云又彼六郎兵衛か一男は此彌兵衛也是を親のことくに外様近習に罷成申へしと信玄公仰出さる、彌兵

深クオクトモ見エヌ淺茅生ノ末葉ノ露ト消玉フ然ハ殿中五更ニ灯消テ長夜ニ迷ヘル心地シテ御内外様ノ大名小名皆集テ愁涙袖ヲ浸シテ悲ミアヘリ

文祿清談云關東ノ管領左馬頭氏滿ハ常ニ酒ヲ好テ宴セラレ雨天ニナレハ近習外様トナク召集テ氣輕ロケニ辭ヲカケラルホトニ空曇レハスハヤ殿ノ御遊始リヌラント上古ノ輩イサミアヘリ

大友興廢記云筑後國高良山を被攻條それかしはうすき鑑速のうちに神前か親類芳野五郎兵衛と申もの、子にて御座候た、いまこれまでまわり候しさいはそれかしの、かすにあらねとも多年鑑速近習にめしつかはれぬむころの義とも御座候ひつれともこのころは我並の小扈從をいやましのてうあいにて出陣の用意にいたるまでつけこうにおほせつけられそれかしは外様にまかりなりみるしきていなりに云々

又云柴田謀叛始中終條柴田の小性頭はそれかしなりしかるに此頃宗麟公御てうあいの禮能は我ためには庶子なりさはありなから御さしよくに入り怒にふるまふわれは外様ものに成る事くちをしき次第なり

奥羽永慶軍記云淺利父子滅亡條此淺利ハ其性邪ニシテ情モ知ラヌ

衛申すは某當年十七歳御旗本に罷有り何の手柄もなくして親祖父の名をもよこし申の間御先手に罷在似あはしき

流矢をも拾ひて高名をも重宜加ありて自然命ながらへ候は、其時は近習に罷成候とも先今度は先衆に罷成度と飯富兵部少輔をもつて目安をあくるに付き山縣三郎兵衛が同心に被成則其年九月十日に河中島合戦の時右の辻彌兵衛よき者をうつて手疵二ヶ所かうふる翌年松山陣の時山縣三郎兵衛一手にてみのわへはたらく時日の内に三度のせりあひに三度ながら辻彌兵衛首尾を合する云々

又云勸介申は則政公の御分別ちか頭人つかひたまふ様あしく御座候と先日も大かた申上しことく皆逆にて御座候其子細は譜代か外様に成り新參か與衆に成りて本參衆にきつかひあり新參に心をゆるし云々

信長記云角テ義昭公ヒソカニ南都ヲ御出有テ江州矢島郷へ御座ヲ移サレ永祿八年八月ヨリ同十年ノ八月マテ御滯座ナサレシカハ散在シタル御内外様ノ人々モ方々ヨリ馳集リ忠功ノ志ヲ勵シテ天下ノ怨敵ヲ追討シ先亡ノ遺名ヲ雪キ後榮ノ期ヲ計ケル

賀越園諍記云屋形朝倉ノ一子阿君殿頻ニ病惱アル間種々良藥ヲ與フルトイヘトモ療養ノ驗モ夏ノ日ノ光ノ影モ暮

クセ者ナレトモ譜代ノ郎等強テ諫言ナシケル故サノミ我儘モナカリケル處ニ今新參ヲ擧用テ古參ノ兵ヲ外様ニシケレハ野心ヲ含ム者多カリケリ

○譜代

續日本紀云寶龜四年八月庚午諸國郡司燒官物者主帳已上皆解見任其從政入京及獲放火之賊功效可稱者量事處分又譜第之徒情挾觀觀事涉放燒者一切勿得銓擬云々

職原抄云太政官、辨七人、左右大辨二人、官中事大辨所執行一也仍爲重職名家譜第並殊依清撰任之私考云譜者家系也即者第宅也平家物語云將領注幼キ人々聲々ニ父ハ何ニマシマス頭殿ハト問給フ良々有テ常磐泣カサテモ何方ヘトカ聞ツルト問ケレハ譜代ノ御家人達ヲ御憑候テ東ノ方ヘトコソ仰候シ

吾妻鏡云文治五年八月十二日己亥秀清者去治承四年石橋合戦之時兄義秀令與景親謀叛之後牢籠之處母相計而暫隱其號置休所之傍而今度御進發之日稱譜第之勇士ニ企慰勸吹舉之間候御共忽顯兵略即佳運者也

太平記云尾張小河佐々木大夫判官入道スハヤ敵コソ陣ヲ去テ色メキタレ打立ヤ者共トテ兵ヲ集メケル譜代恩願ノ若

黨三百餘騎ノ外ハ相順勢モ無リケリ

又云三浦大和合戰見條大將左近大夫入道モ關戸邊ニテ已ニ討レヌ

ヘク見エケルヲ横溝八郎踏止テ近付敵二十三騎時ノ間ニ

射落シ主從三騎討死ス安保入道々堪父子三人相隨フ兵百

餘人同枕ニ討死ス其外譜代奉公ノ郎從一言芳恩ノ軍勢共

三百餘人引返シ討死シケル

又云越中守護自書條今マテ身ニ代リ命ニ代ラント義ヲ存シ忠ヲ致

シツル郎從モ時ノ間ニ落失セテ今ハ殘留リタル者トテハ

三族ニ不_レ近一家輩重恩ヲ蒙リシ譜代ノ侍僅ニ七十九人

也云々

又云仁木京兆參南方條錦小路慧源禪門ハ相傳譜代ノ家人師直師泰等

カ害ヲ通シタメニ御方ニ參リシカトモ當方ノ力ヲ借テ會

稽ノ耻ヲ雪キタリシ後一日モ更ニ天恩ヲ重シトセス云

云

義貞記云世ヲ治ムル謀ハ唯禮ト詞ヲ先トス以_レ無益之言

人ノ恨ヲ負事無下ニ無智ナル心ナルヘシ次ニ恩賞事必譜

代ノ人ニヨルヘカラス縦ヒ後參ナリトモ當時ノ器用ニ隨

テ可_レ計苑ニ云々

明德記云サレハ方々ノ賁口ニテ討死セシ御方ノ兵ニハ

(中略)名ヲ知ラル、程ノ兵八百七十九人命ハ薄氷ノ日ニ

相州兵亂記云上杉安房守數万ノ軍勢ヲ引率同四日上州ヲ

打立チ同月十九日ニ分陪川原ニ着タマヘハ御旗本ノ人々

御内外様ノ侍奉行人頭ニ至ルマテ公方ヲ拾置申憲實ノ勢

ヘソ馳加ハル今ハ宗徒ノ御一門普代舊功ノ御勢ヨリ外ニ

殘リ留ル人モナシ

關八州古戰錄云關河一益武菴原彌平次元駿州今川家ノ譜代

ニテ大剛ノ者ナリシカ氏眞没落ノ後晴信ニ屬シ勸氣ヲ受

ケ改易セラレテ鉢形ヘ來リ居レリ

小島景憲家譜云然處に當時治國弓矢稀にて然も御家譜代

衆斗にも無_レ之大人數故味方も紛亂にて猛心の人ハ手前

持候て亂る大方の人はすへ知らずして亂る、弱人は身を

かはひ心ならずも持たる鎧を捨て跡へ行く云々

長會我部元親百箇條云一譜代者定事男女共主從十ヶ年召

遣其中無理者可_レ爲_レ譜代一同子者有儘可_レ爲_レ譜代一男子者

父方ヘ付女子者母方ヘ可_レ付縱雖_レ令_レ折檻一相放與云證據

無_レ之者他主不可_レ取若背_レ此旨一主取於仕者一往相屈以_レ

憲法一取戻又可_レ召遣一歎可_レ行_レ死罪一歎其段勿論本主次第

也若令_レ遂電一行方不_レ知者雖_レ爲_レ何箇年一付届之上を以

可_レ取歸一事付隣郷に在_レ之を知りなから十箇年過迄不_レ相

理者重而不可_レ及_レ沙汰一事並知行に相付譜代之事一度

消テ尸ハ野徑ノ草トナルサレハ世衰季ニ及テ義ヲ知リ理

ヲ辨ル人ナシト云ヘトモ道未弓矢ニ殘テ年來芳志ノ恩ヲ

謝シ譜代ノ舊好ノ約ニ依テ退ク者ハ少ク進ムモノハ多ク

シテ加様ニ討死シケルコソアリカタカリシコト、モナリ

云々

結城戰場物語云今の持氏は人の善惡えらひなく幸人のき

に入りてさへ申なばふかふ不知もしりたまはすいにしへ

の尊氏はたとへ普代一門といふとも人の善惡忠不忠をえ

らひたまひつ、上には普代との給へとも不忠不孝のもの

とは傾知にこゝろありにけり

應仁略記云かくて夜間の事なれば老僧達勝林院御堂まで

同道門出を見送りしかとも墨染の袖乾かぬ今の名殘なれ

は麓に流る、河音も我涙をやさそふらむ鳥井の下まで同

道してなくく其より取てかへし皆々坊々にそ入られけ

るかくて民部譜代の老僧六七人は迄は召具しつ思ふ子細

有之にて皆暇をとらせける

新撰信長記云越前之侍トモ方々ニカクレ居タルカ寄合テ

サテモ三人ノ者トモカ朝倉代々ノ普代ノ身トシテ主君ヲ

打奉ル剩其末々マテサカシ出サントノ謀マコトニクキ仕

形ナリ

其地頭逐_レ他國_レ雖_レ令_レ歸參一本知於_レ無_レ知行_レ者譜代不

可_レ相立事

勝軍地藏軍記云細川氏綱三好方南河内ノ喜連抗全ヘ陣ヲ寄

スカ、リケル處島山高政ハ紀伊國ニテ普代衆一味蜂起シ

テ河内ノ高屋ヘ還リ入ルヘキ由評定シテ中ニモ玉木與九

郎湯川直光調儀シテ三好殿ヘ内通有リ云々

甲陽軍鑑云信玄公御代御譜代家老衆一馬場美濃守一内藤修

理正一山縣三郎兵衛一高坂彈正以下十二人略_レ之

箕輪軍記云箕輪城中松敵は大勢城中ヘ込入りければさし

も勇士の籠城も今は叶はしとて思ひく_レに落行きけりさ

すか義を知り名を惜む譜代の郎等斗残りける

又云抑此城をみのわと申事榛名山の尾崎堀切築たる城の

南表は箕に似たるとてみのわと名付たり名城なれば堅固

にして飛鳥もかけりかたし況や籠城の面々上杉譜代の舊

臣にて名を惜む一騎當千の侍也

松隣夜話云謙信は諸軍に一日後れ譜代衆并に越衆合せて

一萬六千前後十三備鐘鼓を靜に打擧げ一步をみたさす云

又云伊賀守申は雲州は長尾御譜代の御事某は先方にて十

六年以來の者なれば夫を以て式對を仕る筈に候や云々

松原自休手録云安祥普代トハ信光親忠信忠清康迄奮功人也山中普代岡島普代トハ清康十四五ノ時ヨリ十九ノ時マテノ侍也

又云安部伊勢へ歸リ廣忠十五年春駿州へ下向ス其秋從駿州ニ出軍勢三州譜代少々相加テ被移三州茂呂城武蔭叢話云尾藤左衛門佐知宣は秀吉公御譜代讚州一ヶ國領せしに根白口にて島津義弘を打取さる罪科にて御改易天下御構ひゆる小田原北條氏政へ奉公す云々

又云駿府にて川窪與左衛門宿所へ御旗本御譜代衆甲州先方より合物語の砌川中島合戦の時上杉輝虎唯一騎にて信玄旗本へ乗込信玄を切付候(中略)信玄は川岸に馬を立申され候所へ輝虎崩黄縷子にて包みたる肩衣籠手をさし白頭巾にて頭を包み三尺ばかりの刀を抜き持ち虎の面のことなる鹿毛馬に乗り信玄はいつこにと尋ねて乗廻り候甲州少人頭原大隅申候は信玄は何事にて是に居らるへきやうろたへものなりとて三度鎧にて突き候へとも事せわしく突きはつす云々

増補家忠日記云大永六年清康君之嫡子廣忠君誕生童名竹千代君又千松君當家ノ御家人三譜代ト云ハ安祥山中岡崎此三所ニ於テ奉仕スル士ヲ云フ親忠君ヨリ清康君ニ至テ

申上之由云々

東遷基業云神君駿府に在して正月首服を加へたまふ御年十五也義元加冠して關口刑部少輔親永理髪をつとむ徳川二郎三郎元信公と稱し奉る義元婚を議して親永か女を以て元信公の夫人となしたまへは婚禮成て後參州の家士駿府に至りてこれを賀し奉りける二月廿日に松平右京亮義春神君に代りて西三河譜代の士を率て同州日近の城を攻られけるに城主奥平久兵衛貞延防戦ふ時義春矢に中りて討死せられければ云々

水野勝成記云權現様をまたれ候御譜代の者としては中書兵部兩人斗にて候

元寛日記云寛永十九年五月朔日御譜代大名ニ始テ交代ノ義被仰出云々

寛永御上洛記云八月四日一次權大納言殿伊勢上人召シ御用被仰付次御譜代衆其外小大名御暇被下候

四代安祥ニ御在城ノ間奉仕ノ士ヲ安祥譜代ノ士ト云其後清康君山中ノ城ヲ攻取岡崎ノ城へ移給フソノ時奉仕ノ士ヲ山中及ヒ岡崎譜代ト號ス

天正記云諸國白殿こ、に木村ひたちのかみといふものたいかうのふたいの御家人なり

當代記云天正十八年四月下旬落去城主小田原普代ノ臣下大道寺令御行儀相望自筑州為案内者鉢形へ押寄云々

又云天正十八年七月中旬氏直背父命寄手陣中へ走入被相望間被助身命此模様專岩付十郎以覺悟也是氏男氏政同弟陸奥守於城中腹ヲ切委命ニ自秀吉公松田ヲ早速ニ被斬罪是ハ為譜代臣下主人へ令謀叛利不遂本意ノ間無云甲斐トノ貴命歟左馬介者氏直高野山へ令伴居氏直病死ノ後北國ノ主前田肥前守被相拘云々

文祿清談云武藏坊辨實住院公方義澄公御入洛之後古人ノ筆跡御一覽有度ト將命ヲ下サセラレケル因之高官重職ノ家寶一々高覽ニ備玉フ加之諸大名御譜代ノ家臣普ク古反古共搜シ出シテ見セ奉ラルトナン

板倉ト齋慶長記云福島被申上候者駿河より清須までの城々御譜代衆被御遣御うけとらせ被成御上候へと被

武家名目抄第五十六册

塙檢校保己一編

稱呼部 十二下

近習 御近邊衆

太平記云秀隆兄弟又同年ノ九月二十八日攝津國ニ不慮ノ事出來テ京勢若干討レニケリ事ノ起ヲ尋ヌレハ當國ノ守護職ヲハ故赤松信濃守範資無二ノ忠戰ニ依テ將軍ヨリ給リタリシヲ範資死去後嫡子大夫判官光範相續シテ是ヲ拜領ス而ルヲ去年宰相中將義詮朝臣五畿七道ノ勢ヲ卒シテ南方ヲ被責時光範カ軍用ノ沙汰毎年不足ナリト將軍近習ノ輩トモツフヤケルヲ云々

明德記云御所様ヲ始メ進セテ諸大名近習ノ人ニマテモ何事ニテカ有ランスラン落居ハ御吉事ナリトモ難儀ノ合戦出來リナハ誰身ノ大事ト成何ナル不思儀カ有ランスラント罪ヲ慎ミ身ヲ顧テ恠ミ思ハヌ人ハナカリケリ

又云今日ノ大地震ハ金翅鳥動ニシテ慎ミ以外也(中略)御所様ヲ始進セテ諸大名近習ノ人々マテモ何事ニテカ有ランスラン落居ハ御吉事ナリトモ難儀ノ合戦出來リナハ誰

身ノ大事ト成何ナル不思儀カ有ランスラント罪ヲ慎ミ身ヲ願テ恠ミ思ハヌ人ハナカリケリ

建内記云永享十一年二月十五日癸巳早旦參賀室町殿關東事已屬無爲鎌倉左兵衛督持氏卿切腹之由註進之故也此事去十日事也(中略)仍武衛切腹近習少々同切腹云々

時房公記云嘉吉元年六月廿四日己丑今夕有前代未開珍事赤松彦次郎教康依諸敵御退治嘉禮成申度御近日人有人此經營之故也未刻室町殿渡御彼宿所諸大名爲相伴在御座猿樂三番盃酌五獻之時分開御座後障子着甲冑武者數十人亂入之奉弑之其時管領已下着座之諸大名即起座退出不及報答纔大内介京極加賀入道

拔刀防戰其外近習置細川下野守山名中務大輔源貴散々振舞中務大輔當座止命下野守被_レ打落腕被_レ扶_レ彼子退出_レ走衆遠山並下野守被_レ疵歸家死去

季瓊日錄云寬正元年八月二十八日今晨有左大臣之參賀也公家並武家門跡大名外様近習悉參賀也

又云寬正五年五月六日來八日御談義了蔭涼軒御成御齋之事伺_レ之御領掌也大名並非近習被_レ參侍也

文正記云澁川治部太輔義廉去頃可_レ相續家督之旨堅辭白處已後不可_レ有改易之由被_レ仰出天下無其隱今又

御改替失_レ面目次第也就之召_レ上分國之勢構_レ於要街渡_レ櫓勇銳士卒願者共方々走渡矢狹間排開矢把解活晝夜

且暮轟懸藏合戰之行欲決雌雄加之式揆同意與力最負輩者山名細川土岐一色自餘面々近習外様不_レ屑假風草隨_レ時者也雖_レ有如_レ無

應仁記云_{熊谷}淨土寺殿此ホトニ御契約アル上ハ何ノ相違カアルヘキトテ法衣ヲ解テ抛テ還俗アリテ加冠アツテ左馬頭義視ト奉_レ申御外戚ノ三條殿ヘ移ラセ玉ヒ今出川殿ト申奉ツル近習外様ノ面々日夜朝暮ニ出仕ノ裝刷セ兩御所ノ御番ヲ勤仕シケル

大内家壁書云梳飯同御節並所々御出之事一問田ヘ御おそほのこと御祝並進物已下如_レ例御肴一獻參りて御臺參るへし御臺は本膳に御さひ六つ二の膳に御さい三ツ三の膳に御さい三ツ御汁は本膳に一ツ精進二の前に二しるたるへし何れのところへ御出のときも御相伴衆までは此準據たるへし近習衆は本膳に御さい三汁二たるへし云々

親長卿記云長享三年三月三十日今日大樹自_{江州}歸御也去々年御供公家輩少々先陣暫近習一二三番衆次御小袖評定衆供奉次御臺_{去月廿日御所勢更替之時令}付_{江州}給今日歸給也

中國治亂記云晴久_尼若キ大將ニテ初テノ合戰ニ敵ノ國ヘンテ宴セラレ雨天ニナレハ近習外様トナク召集テ氣輕ロケニ辞ヲカケラルホトニ空盛レハスハヤ殿ノ御遊ヒ始リヌラント上古ノ聲ミナイサミアヘリ

ハタラキ玉ヒヲクレヲ取り玉ハ、後マテ軍シニクキモノナリ思食トマリ可_レ給トイサメケレハ若輩ノ近習トモ大ニ笑ヒ下野守カ臆病ナル意見カナトテ不_レ用シテイヨイヨ出張ノ用意不日ニシテ天文九年九月四日吉田ノ郡山へ晴久七萬餘人ニテ發向ス

大友興廢記云十九日御籠中より御屋形並老中衆御近邊衆御振舞あり

里見九代記云其外人々近習衆大將も諸とも不_レ殘只討死せんと心掛

織田信長譜云天正九年正月元日信長在_{安土}見_{諸士}參賀之行粧_{時大名等皆在國唯近習輩耳}

柴田退治記云秀吉者爲_レ休息諸士_移江州阪本城_{暫相}停今度柳瀬表秀吉所_{切崩}之一番鎧者悉近習之輩也

西園發向記云播州過半被_レ下_{近習}兩郡龍野被_レ召置_福島左衛門大夫正則東郡三木城移_{中川}藤兵衛尉秀政_{明石}郡被_レ遣_{高山}右近_{攝州}下_賜近習衆

天正記云_{秀吉は}柴田軍_配備_{ひて}よし見合近習の若侍_{二三百騎}柴田かはたもとへ_一もんしにきりか、りむかふ兵一千餘騎きりあひ突あふ

文祿清談云_{藤元}權之助_{關東}ノ管領左馬頭氏滿ハ常ニ酒ヲ好

東遷基業云守將菅沼定盈松平忠正城外へ使者を出し願はくは我等兩人切腹すへし城中の士卒女童迄の命を助けたまわるへしと云送りければ信玄許容して兩將を山縣か陣へむかへける兩將來つて腹を切らんとするところをかねてより兵を伏せて忽ち生捕にして近習の士を以て今度の籠城の體武勇たのもしき心はへなり切腹いたさん事ををしみて如_レ斯は計ひたり云々

○外様近習 外様近習衆

甲陽軍鑑云信玄公外様近習として百騎在郷に居申候小身の旗本衆を二つに分け原隼人に五十騎駒井右京に五十騎指添へられ可様の傍にある境目の城こへ番手に指越御用なれば又御旗本へよひ火燒の間御番をつとめ候とも多くの侍千騎籠たるより此五十騎は弓矢の作法よくて北條衆三萬四萬の多勢を何とも不_レ存候

又云御旗本の惣近寄衆二百五騎此次外様近寄百騎は原隼人に五十騎は駒井右京に五十騎預けたまふなり

又云信州上田原合戦ありて後外様近習た、ら五左衛門と

申すもの卅七八まで我は何もせずして人の褒貶を申しす
とて信玄御立腹まし〜日向大和内藤修理兩人をもつて
七度使を立てられ七度目に書付を指下したまふ云々

○腰本

奥羽永慶軍記云島津船兵衛 新書院サテモ去年ノ冬山形ノ腰本年十七
ナリシカ花輪ト云フ女房鳥海ニ密通ノ文玉井ト云局拾持
テ披露ニ及ヒ義光イカリタマヒテ鳥海花輪中立等ヲ死罪
ニ行ント仰ケルヲ云々

清正記云次に三人油部少輔右衛門 内證にて申候上様いまた筑
前守殿にて主計殿虎之介と申御腰本にて召使われ候とき

のことくに何事も仰られ候も口答仕られまし今は天下の
あるし太閤までに御昇進ましまし候いにしへのことくに
存られす何やうの儀を仰らるゝとも謹て承畏りてしかる
へきのよし申委細御意得奉るとの云々

○本座

甲陽軍鑑云山本勘助大夫并 信州遠見合戦元就國をもつては先方衆をか、
へらるゝに先方侍の千貫二千貫とる人も譜代衆の五十貫

取侍をしつしてそは座へあけをはへある譜代衆には旁忠
功の儀にて國を伐したかへ各々とり給はぬ知行を新參の
我等共に澤山に下さるゝは本座衆御腹立にてあるへしと

ケルハ此者從ニ去年頃鹽冶ニ契約シタリケルカ新座ノ者
也ケル程ニ心モヤ置ケル又宿モヤ遠カリケル落ケルヲ
モ終ニ知セサリケレハ云々

大友興廢記云入田親眞 諱五郎殿大友義鑑公の嫡男義鎮はいまた五
郎御そうしと申たてまつるときなカ刀を御このみ御行儀
あらん人のそしりをわきまへたまはず御氣に少しなりと
も入たる人には忠なきに御寵愛なされひさしき老中も外
様のやうになりかへつて新座の者にへつらひみたりにま
いないをこそとめけれ

甲陽軍鑑云高坂彈正存生の時定置る諸奉公人科穿鑿なさ
れ御ゆるしるとき過錢其分領に應じて出すことあり御中
間御小人或新衆なんと給分になる

○外座

聚樂物語云治部少輔田中 田中聞て是は存の外にて候一大事
と承り候へはそれかしか身の上を何者かさんけん申しつ
らんとこそ存し候へ仰のことく此頃はそれかしなとは外
座間者のように罷なり候へはさやうの大事をはいかてし
らせたまふへきなれとも上意にくしとをほしめすは御
理りなりさりながら存する旨は罷出て、も申抜くへし云
云

推量申て候御道理千萬と申てしつする又覺もなくしかも
不雅意なき人なりとも譜代衆ならは新參衆あかめてさて
其批判もあのやうな人も元就公と申よき大將を頼む故人
に執しらるゝ是非我等とも、忠功をいたし以來治りたる
國の先方衆にあかめらるゝへきと覺悟いたすにより元就の
威光次第にまさると承及候へは新參の譜代衆をあなつる
は傍輩をあなつるにあらす大將をかりしめ奉つる道理に
候へは御目付を付けられ本參衆をかりしむる侍をはいな
さるゝかさては改易かと勘介申上げる

秀頼記云慶長十九年十二月十九日常高院若狹守か陣に來
る阿茶上野介其所に參り相談す城中より申様本城斗殘し
置き二の九三の丸の堀を埋め平城となし有樂修理人質を
出し候へし母北の方出玉ふことあるへからすしかる上は
兩御所より新參本座の諸侍は異儀不可有の誓紙たまは
り候へしといふ此扱にて此儀に濟みたり云々

○新座 新衆
太平記云天文本 河原國小三郎是ハ菰谷殿ノ御内ニ新座ノ者ニテ候カ
被落ケルヲ知候ハテ供仕候ハス何クニ捨テ命モ同シ
コトコ、ニテ面々ノ手ニ懸リテ冥途マテ此様ヲ語リ申ス
ヘシト云モ終ラス太刀ヲ拔テ掛リケレハ(中略)後ニ聞ヘ

○新參 今參
太平記云代本 河原國小三郎數多ノ矢折カケ馳來
御方小勢ナルニヨツテ戰難儀ナルヨシヲ申シケレハ義季
之ヲ聞キタマヒテ今度鎌倉ヲ出ツルヨリ死ヲ一途ニ思ヒ
定メシカハ今更驚クヘキニアラス自ラ死ヲ安クセント思
フナリ汝ハイマタ新參ノモノニテ見知者モアルマシ急キ
此陣ヲ逃出テ鎌倉ヘ馳セ參リ合戦ノ體ヲモ自害ノ様ヲモ
委細ニ左馬頭ニ申シ其マ、汝カ進退ヲハ心ニ任スヘシト
宣ヒケル河原國長レテ御意トモ覺候ハヌモノカナ弓矢ノ
道ニハ普代新參ト云フ事ハ候ハヌ物ヲサテハ能未練ナル
モノト思召シ候ケルヤ云々

應仁略記云恒例臨時折々の御成殊に翌年春三月兩帝押並
へて御なり同十六日は大夫入道東の享御氣色思程の時宜
なり(中略)深更に至て還御翌日御禮并御臺様御成時に幸
壽院殿御今參り大御乳人以下御雜掌とて三日三夜の御會
一事違例なく調り畢んぬ云々
三好別記云森志摩守は舟にてむかひに出たれとも長春は
生害なり敵は大勢なりせひなくをひはらを切へきとて船
をよせたりけるを一宮衆威して譜代衆皆かはるに新參に
てかやうのみきりむかひに來ること一かとの藝なりとて

さまく教訓したすけて別宮へ返す云々
 伊達日記云會津山ノ内ニイナイホウ横田川口屋ナトリ此
 所ハ山中故御手ニ不_レ入然ルトコロ八月末ニ原田左馬助
 爲_二御代官_一會津新參衆長井ノ御人數ヲ以屋ナトリノ城責
 落ナテ切リニ仕候間津川へ除キ候者モ御座候又御佗言申
 出城申候處モ候間落居申候津川ハ大切所ニテ御働キモ即
 時ニ不_レ成左馬助得_二其意候_一ハ春中ノ事ニ可_レ被_レ成由
 御意候ト云々

又云若狹へ御入馬候而十七年ノ御越年ニ候間御譜代衆新
 參衆何レモ參ラレ候

太閤記云^{秀吉公案}秀吉新參のことなれば御前近くつかへ奉
 ることは及びなきにより近習の人々に近付き其用なと承
 り一兩年は左様の體にてくらしける云々

奥羽永慶軍記云^{大山義兵二}出羽國田川郡大山ノ城主ハ武藤
 出羽守藤原ノ義氏先祖越前ノ住暨物太郎頼方カ代々當國
 ヲ賜ハリ大泉ノ庄ニ入部シテ七代ノ孫播磨守師氏マテハ
 大梵字ニ住居ス師氏舍弟松尾小次郎ハ鎌倉ノ公方ニ仕へ
 奉リ松尾左京亮ト號ス同八代ノ孫氏平ニ至テ大山ノ城ニ
 住ス同十六代四郎時氏二十五歳ノ時五月從_二加茂津_一船ニ
 ノリ上洛シテ見_二將軍義晴公_一晴ノ字ヲ賜ハリ號_二晴時_一

與ノ輩及有樂修理達テ雖_レ諫秀頼會テ無_レ心服從_二籠城ノ
 初_一非_レ可_レ開途唯任_二亡父遺誡_一於_二當城_一可_レ爲_二生害_一也
 新參之輩可_レ言_二心底_一云々

○新加衆

吾妻鏡云寶治元年七月一日壬子御所中番帳被_レ改_二之若洲
 一族并餘黨數輩已依_レ有_二其闕_一也爲_二陸奥掃部助實時奉
 行_二清_一撰新加衆_二及_二請書_一云々

康富記云享德三年八月廿二日辛丑入_レ夜又世間恐々(中
 略)今夜予參宿殿下自_二今日_一小番被_レ定予爲_二新加人數_一之
 由被_レ仰出_二一條中將予兩人相番也

○今馳

會津四家合考云^{氏輝由來井}外池孫左衛門ト云者ハ不_レ離氏
 郷ニ付廻リ矢表ニ立テ防戰フ(中略)相殘タル大勢跡ヨリ
 追々馳合テ彌大勢ニ成ル敵ハ數刻ノ軍ニ息疲タル上ヲ今
 馳ノ大勢ニ駭惱マサレテ散々ニ敗_レ右往左往ニ北行處ヲ
 透サス追討ニシテ云々

○當參

吾妻鏡云治承四年九月廿九日戊寅所_レ奉_レ從_二軍兵當參已
 一萬七千餘騎也

○初參

任_二從五位_一左京大夫ト云其子今ノ出羽守義氏ニ發祖頼方
 二十七代也此義氏大惡無道ノ人ニテ世上ニ庄内惡屋形ト
 云レケル然ルニ義氏付從_レ者ヲモ誤リナキニ日毎ニ是ヲ
 切故ニ新參ノ武士モ足_レ不_レ留

又云^{淺利}此淺利ハ其性邪ニシテ情モ知ラヌ辯者ナレト
 モ譜代ノ郎等強テ諫言ナシケルユヘサノミ我儘モナカリ
 ケル處ニ今新參ヲ擧用テ古參ノ兵ヲ外様ニシケレハ野心
 ヲフクムモノ多カリケリ

新田由良家傳記云^{藤生善久}御譜代の者を先御取立被_レ成
 次に新參衆を御取立可_レ被_レ成候たとひ御譜代の者にて御
 座候とも其身の覺悟惡敷候は、御役を御赦免被_レ成御尤
 奉_レ存候又たとへ新參に候とも心よく萬端器用仁をは被_レ

懸_二御目_一御取立て可_レ被_レ成事肝要に奉_レ存候

松隣夜話云神奈川十所澤瀬田第十ト云處ニテ十餘ヶ處ノ
 合戰ニ則政公一度モ御馬不_レ出軍旅ノ法惡キユヘ上杉衆
 毎度敗軍シ大剛覺ヘノ兵士トモ無謀ノ戰ニ皆討死ヲ致シ
 走り逃タルモノトモハ新參仕出テノ嬖人例ノ好者也
 松原自休手録云十六日召_二牧清兵衛稻富宮内中井大和_一
 撰_二鐵炮功者_一處々櫓ヲ可_レ打破_一依_レ之備前島從_二菅沼織部
 カ攻口_一以_二大筒百挺_一被_レ打_二之城内ノ女童周章ス加_レ之七

應仁別記云政長ハ龍田明神ノ御前ニ祈念シテチトモ騷カ
 スシテオハシケル愛ニ寄手ノ遊佐カ内ニ馬場ト云初參ノ
 者勢數アリケレハニヤ先陣ヲ申付ケリ一仁ニ中村ト云者
 義就御座アレハ國ノ守護代ノ下代ナレハニヤ若江ニ殘置
 ケリ云々

○大身

普廣院殿御元服記云永享二年七月廿五日大將御拜賀(中
 略)近習若大身達歩行少々被_レ召_二具之_一

室町殿日記云^{義隆全盛の條}義隆さもあらは當所に都をうつさん
 とて一條より九條までの條をはり四ヶ國の大身小身の屋
 形いらかをならへて造りならへ京堺博田の商人軒をあら
 そひて立つ、けり

甲陽軍鑑云侍百人の内に一二人物しりのあるか是又大き
 によきことなり子細は國持大身は物しりの書家を扶持し
 たまふか二三三百騎の侍大將一手を三そなへ許にわけてま
 わす衆を持侍餘慶なくして物しりの書家をつる、事稀な
 れは家中の侍に物知のあるは縦は鞍二口の馬のことくさ
 るによつて百人のうち二三三人のものしりたる侍大きに
 よきと申儀は此理を以ての事

清正記云武勇こゝろかけてからもの、若者とはなんちた

るへしいよ、武功をつくすへし六月十三日加藤虎之助殿秀吉公御判かくのこと御自筆にあそはされ御脇差一腰くたされそれよりは秀吉公一入御ねんころになされ一度大身に仰付らるへきとの仰なり

武蔭叢話云今までは勢州松坂十五萬石を領せられけるに俄大身に成されける(中略)秀吉公増田右衛門尉長盛を召し高札十枚仰付られ辻々に立たる其言曰此度蒲生飛騨守木村伊勢守大身に被仰付候付士々事欠申候日本國中諸士主人に不足有族又立身に望有人々勿論構有牢人者不殘兩所へ掛入手柄次第知行可取候云々

松隣夜話云上杉家猶十ヶ國ニ及ヘル大身ユへ負レトモ勢ヒモ不透北條ハ未タ小勢ニテ近國ニ助クル味方モ不有竟ニハ又如何アラント諸人別ケ兼ケル

○中身

甲陽軍鑑云惣別能大將は武邊の儀は不及申文有て慈悲ふかし行儀よくしてつねにやはらかなれともいかりたまふ時は殿中の事かきてをきぬ一國の内にて泣子もなかさぬほと威光つよし就中中國持たる大將を始奉つり大身中小身ともに侍の名高き衆は行義能物なり

○小身

未引離ニ候間一働被成小身ノ衆ハ被相返ニ檢原ニ御在馬被成候

甲陽軍鑑末書云小身ノ奉公人ハイ頭或ハ手柄ノ場ヲヨキ方へ申口ノ違者ヲ猫武士ト云也氏政如斯ナレハ北條家ノ大小ノ士チカラヲ落シ申ス也

清正記云虎之助を召れ仰付られけるはなんち小身なればよき馬をもつまし馬どりともにとらせよと黒の御馬を拜領す

難波戦記云大御所御返事 秀頼公老臣ヲ召集此儀如何有ヘシト御尋有シニ老兵等申上ケルハ(中略)當分御下知ニ相從御家人ハ或ハ小身或ハ新參

武蔭叢話云大崎支蕃頭長行は元は與一郎として小身者也數ヶ度の軍功にて木村常陸介先手の大將にて鬼玄蕃と呼ばれる

松隣夜話云山内ヲハ則政扇谷ヲハ朝義ト由扇谷殿ハ從レ本小身ナル上太田一亂ニテ家中殘ヘ大身ノ侍數輩取退キ當時ハ山田殿ヲ以テ管領ト仰キ國々ノ執政此家ヨリ出又云天正三年五月武田勝頼參州爪ト云處ニ打出(中略)無理ナル防戦ヲ遂信玄以來ノ侍大身大形不殘被討殺散散ニ仕負敗軍ノヨシ其間ヘ市知シ

三好別記云長慶逝去の後信長の御かたらひにて家老とも逆心候て若江之城にて切腹左京大候よし承候是にて三好一家斷絶申候十川居被申候へとも小身に於て太閤へ奉公のよしに候云々

伊達日記云肥前申サレ候ハ御訴訟ハ左ニ候ヘトモ如御存知長井ニハ大名一人モ無之候境今モ少身衆計コメヲカレ御出馬被成候

又云政宗公ハ檢原へ御出馬被成檢原ハ御手ニ入候(中略)後陣ノ衆ハ檢原未引離ニ候間一働被成小身ノ衆ハ被相返ニ檢原ニ御在馬被成候

又云彈正ハ城ハ持不申少抱ノ能屋敷ニ居申候テ手替仕候火ノ手ヲアケ申候間會津ヘ方々ヨリ馳集候ヘトモ何方モ手替候歟ト氣ヲ付取ミタシ候所ヘ平田太郎右衛門會津へ欠入替衆ハ彈正壹人ニテ原田左馬助無人數ニテ一頭參

候由申ニ付會津衆一戰ヲ仕懸候間左馬助敗軍仕リ與力家中數輩討死彈正妻子共々召連漸引除候三月ニ政宗公ハ檢原へ御出馬被成檢原ハ御手ニ入候御隱密之御手切衆故長井之人數計被召連候惣人數ハ未參候間二日ニ御陣觸被成惣人數參大鹽ノ城へ八日ニ御働候大難處ニテ御備ヲ可被立地形モ無之山路一筋ニテ後陣ノ衆ハ檢原

又云越後ノ八龍四虎トテ十二人ノ荒勝負ヲ得方ニスル者直江市兵衛彌津二右衛門片桐三介瀬場四介勝尾五郎丸田

井六郎志賀肥前石里藤藏丸雲十兵衛若桃彌吉志村新介音龍寺金龍寺ナト是等ハ小身者謙信馬廻リニ在テ鬼ヲ酢ニヒタサテ喰ントスル奴原トモニテ候ト語リケレ

○下臈

熊坂雙紙云其時烏帽子折かもつての外にはらをたてされはあのやうなる下臈に物をこのますればわか身のくい口軀をしらす事もかたしけなや左折をめさうつる人は一年尾張の國ぬまのうつみにてうせ給ひし左馬頭義朝(中略)わたの原か様なる三界流らうの吉次か供するくはしやか左折をさうすることと思ひもよらぬ所望かな云々

年中恒例記云正月七日一御對面次第は外郎は公家の前なり進上の御藥申次備ニ上覽外郎懸ニ御目ニ云々

氏郷記云信雄ト一益示合セ鐘ヲ相圖トシテ或朝國司ノ御所へ押寄(中略)具教卿ハ味方一人モナシ有合タル下臈ハ皆落行シカ共究竟ノ強弓ナレハ只一人門外ニ進出差ツメ引ツメ射散々ニ射給ヘハ矢庭ニ鎧武者多ク射倒テ殿中ニツト入

○傍輩

太平記云山門西坂ノ大將高豐前守是ヲ聞テ諸軍勢ニ法ヲ出シケルハ中略獨高名セントテ拔懸スヘカラス又傍輩ノ忠ヲ猜テ危キ處ヲ見放ツヘカラス互ニカヲ合セ共ニ志ヲ一ニシテ斬共射共不用乘越ヘ進ムヘシ

宗吾大變紙云又かちにて御供のとき御みちにて傍輩衆物語をし手をとりくみなとすへからす云々
板坂卜齋慶長記云家康公なこやへ御立候文祿元年二月二日江戸城出御所安藝國廣島へ御着町屋に御座候二階へ御あかり町中人の通るを御覽しけるとき景勝家來横田大學と申もの傍輩二人とつれだち町を遁るそれなるは大學かと自身被レ成ニ御尋候

寛正七年飯尾之種宅御成記云一傍輩中進上御太刀御馬注文御太刀一腰次助御馬一疋町野左近將監殿御太刀一腰次助御馬一疋布施下野守貞基一同若衆御太刀進上分御太刀人數助眞布施新左右門尉景光矢野六郎左衛門尉下略齊藤親基記云寛正七年二月二十五日傍輩中若衆或銘物或糸巻以ニ惣注文ニ進上

○同役
吾妻鏡云建久三年十一月廿五日甲午早旦熊谷次郎直實與久下權守直光於御前遂一決中略直光者直實姨

母夫也就其好直實先年爲直光代官令勤仕京都大番之時武藏國傍輩等勤同役在洛此間各以人之代官對直實現無禮

武家名目抄稿第五十七册

塙檢校保己一編

稱呼部 十三上

○公方衆

殿助僧正往年記云天文五年三月三日於五條公方衆喧嘩一色打死大館左衛門佐及三耻辱

東寺執行日記云元龜四年三月廿二日公方衆上野中務ト申人之草刈ヲ頭ヲ打キリ散々ナヤマセ申處ニ則東寺衆相當口シカヤシ候へと被レ申候間先當寺衆何方ヘモ用心ヲ仕不出ナリ

賀越園諍記云御成次義秋將軍朝倉屋形へ御成中略御馬進ラル時御簾上リ公方衆義景イツレモ射場ニ伺公有リ又云御能役者其頃京都ヨリ毒藥多ク下リケルカ公方様衆ノ内輪へ下リタル由世上ニトリサタ有

蜂須賀家文書云去年高見原一戰敵之制近頃可然候シ古入日至半途時繫レ之候間任ニ其儀けるか面々如存知公方衆大概取陣當手は左衛門入道手計備役所寄來殊依體形近所日暮與軍儀兩條共無餘儀候

安土日記云三好左京大夫殿非儀ヲ思召立松永彈正息右衛門佐父子ト被レ仰合山殿既被レ及鉢楯候安見新七郎居城交野へ差向松永彈正取出ヲ申付候信長ヨリ後卷御人數佐久間右衛門柴田修理亮中略公方衆モ相爲後詰御人數被レ出取出ヲ取卷シニ垣結マハシ取籠被レ置候

○公方人

鎌倉年中行事云公方人ト云ハ御中居殿原也公方者ト云ハ御力者御雜色

東寺執行日記云享德三年九月廿四日乘珍法橋並寺内右衛門次郎屋公方人檢封シテ後右衛門次郎召取候間細川讃州御内ニ友成乘珍ヲ扶持シテ三三百人計馬駈ヲシテ衛門次郎取返シ檢封押シテ開レ之

光源院殿御元服記云天文十五丙午歲十二月廿二日彈正少弼定頼旅館江御成有之中略侍雜司四人其外公方人有折紙被レ遣レ之

○公方者

鎌倉年中行事云奉公中對公方者禮儀之事路次等ニテ行合テ不可有下馬宿所へ來ラン時之對面ハエンニ可置近年座喚ラル、コト太不可然

○當方衆

蜷川親俊記云天文七年十月十八日戊子茨木當方衆一獻之夜入大酒一肩衣脫在之

○直參

○直之者

二水記云永正十七年二月二日戊刻許武家夜打押入之由風聞仍又騷動公私萬人仰天物恣也少時雜說之由治定畢各令安堵一者也武家直近之衆各馳參云々

太閤記云利家は府中の城居なりに安堵之由奥村かたより申越候急き府中へ忍はせ給ひ宜しからんと達てとめし時いやとよ父帯刀勝家へ背き信長公直參となり安土に在しか喧嘩之座に連り果し事汝等知所也云々

甲陽軍鑑云三河御發向留主之事駿河に武田上野介駿河先方小身直參衆乾天野宮内右衛門と一所に穴山殿を大將にして信州定番の千貫百騎六貫壹疋つ、の侍大將衆十頭半分あとい人を残し候へは是千五百氏政より差こさる、大藤くみの人數五百合三千餘乾に指をかる、云々付直之者内外とも相交候事堅停止之事

甲陽軍鑑末書云三川御發向留主ノ事駿府ニ武田上野介駿河先方小身直參衆ヲ置ル、也

又云小山田大學昌貞手前拾騎信州直參三十五騎上野直參

弱二而三好氏雖爲陪臣專國政云々

會津四家合考云河原田治部少輔合戰條芳賀阿波ト云者他ニ不讓言出ケルハ面々ノ思案ハ兎モ角モ候へ御相談ノ上ハ不憚申上ルニテ候如何ニモ世移リ時衰テ陪臣ノ身ト御成候へハトテ正クモ勝原ノ御縁リ結城ノ手ニテ御座セハ自餘ノ端武者ノ所存ト事替リ候へシサコソ御覺御座候ン先年仙道安積ニテ政宗へ無二ノ味方ニタニ御參リソフウハ、山八郷ノウチハ永代ニ進セント様々ニ申來候時タニモ御同心アラテ今義廣此様ニ御成候へハトテ手ノ裏ヲ返ス様ナル御舉動某ニヲイテ左アルヘシトハエコソ申間敷候

關八州古戰錄云千葉結城多賀谷終末條常州下妻ノ多賀谷修理大夫重經モ小田原へ來テ秀吉公ニ對顔ヲ遂ク殿下渠カ勇敢ノ聞ヘ高キヲ稱美シ玉ヒ手ツカラ左文字ノ短刀ヲ授ラレ祖先結城ノ陪臣タレハ向後晴朝結城左衛門督ノ合屬タルヘキ旨宣ヒ直サル云々

奥羽永慶軍記云佐竹伊達兩軍陣ノ條正宗此由ヲキ、給ヒテ今日敵方大利ヲ得サレハ尤サコソアランシカモ味方ハ小勢ニシテ過半討レタリノコル人數モ多クハ手負ハヌ者モナシ去ナカラ小敵ヲ欺カス大敵ヲ恐レサルトハ古今ノ掟ナリ明日ハ敵軍大勢也味方彌減シタリ命カキリ軍シテ叶ハサルト

衆十五騎遠州天縣淺場三河ノ城所衆十騎都而七十騎窄人衆ノ二ノ手也

見聞雜錄云就中攝津一國ハ和田伊賀守伊丹兵庫頭池田筑後守右三人へ被下之公方家直參衆之隨一也

又云信玄公には府中に御馬を被立御人數聊不_レ散八陣守禦之備にて御本陣を中にして各守る馬場内藤各不_レ殘召て被_レ仰出_レけるは(中略)敵國始て治るには法多しては可不_レ服吾は三件に可_レ究早々國中に制札を可_レ立として奥祐筆字白を召して案章を御好給定一城納之年貢は不_レ及_レ申直參被官之知行たりとも前々之五分一を減し夏秋冬に可_レ令_レ上納事

義光物語云慶長十七年正月十五日に被_レ仰出_レしは來る四月天堂原に於て馬揃可_レ有_レ之候間直參は不_レ及_レ申云々

奥羽永慶軍記云鳥屋ヶ崎ノ城主北入道松齋コソ文ハシラス武ハ奥羽ニ隠レナケレサレハ太閤秀吉公へモ内府家康公へモ直參獨禮ヲ勤メ云々

增補家忠日記云抑伊集院ハ忠恒カ家臣タリトハ云ヘトモ太閤秀吉ヨリ以來直參ノ諸士ト列シテ云々

○又者 陪臣

織田信長譜云京都柳營式微細川執兵權及_レ于細川微

キハ雜兵ニマキレ敵ノ大將ト組テ指チカヘン皆々ソノカクコセヨトテ中々ヲトロキ給フ氣色モナク終夜酒宴ヲソシ給ヒケル大將カクノ如クナレハ諸臣ハ彌身命ヲカヘリミス誠ニ命ハ義ノタメ身ハ恩ノタメ捨安シ明日ハ必ス討死シテ子孫ノ面ヲ清メ名ヲ後代ニ留ント與力陪臣足輕ラニモフレ勇メテ誠ニ思ヒ切テ夜ノアクルヲソ待ニケリ

又云柳田落城條治兵衛尉此由ヲ聞テ御邊我ニ好身深キ故心不_レ替明日ノ難儀ヲ告知セ給フ事於_レ未來難_レ忘_レコソ候へ乍去我不肖ノ陪臣ニテ義光公ノ大軍ヲ引請討死セン事實ニ武士ノ本意何事カ是ニシカント存候云々

又云蛙登越前守傳條最上家ノ掟寫一分國之士城持者不_レ及_レ謂旗本陪臣等文武之兩道專一可_レ嗜事一分國之諸士并陪臣諸奉公人忠孝之道專一可_レ相守一附足輕中間小者迄諸役人可爲_レ下知_レ地下百姓地頭代官可_レ申渡_レ之事

松原自休手錄云信玄ト家康ト和睦シテ家康懸川ノ有_レ制法_レ入_レ置石川日向_レ五百餘騎ニテ金屋近邊ヲ巡見ス山縣三郎兵衛ニ二千餘騎ニテ遠州信玄支配ノ城々往來シテ行_レ逢家康卿和睦ノ上ハ山懸厚_レ禮陪臣ナレハ家康卑_レ禮恨_レ之乎喧嘩ニシテ切_レ入供奉ノ勢

增補家忠日記云慶長十二年三月五日從三位左近衛權中將

忠吉逝去薩摩守初名下野其陪臣石川主馬助稻垣將監中川清九郎殉死ス

○奉公衆 奉行方衆

籠中舊記云つねの御所御籠御かうしの事に上ろふたちみすをあけおろし候かたまの御やりとはあした夕さり御やりとはかりたて御あけ候みすはまかれ候まゝにておかれ候御かうしのかきかねはあしたとく御はつし候てよる御かうし參らせ候へは御かけ候御かうしいり候人はほうこう衆そのころはきやうこくのいは山とうみんふしうなとにて候

應仁別記云京都ヨリ此邊迄被參人モ有リ敵ノ間近カリケレハ能大名ノ一人モ自身不參也(中略)同日御京入聖護院御同道自諸家御迎奉公衆悉參伊賀仁木御供也齊藤親基記云文正元年三月十七日御參宮(中略)走衆六人手替六人乘馬打御供衆後(名略)於斗會之輩被仰付奉公方衆各被下御訪

蜷川親元記云文明十年正月四日卯奉公方國外様其外面々如先例御對面

親長卿記云文明十七年五月十七日自奉公方寄奉行許之由風聞雜取備隨以外事也

ヲ押寄攻來ノ由方々ヨリ注進櫛ノハヲ引カ如シ山口ノ諸奉公衆仰天カキリナシ

伊達日記云田村衆相馬へ被申合候衆モ尤伊達へ御奉公ノ衆モ石川彈正逆心仕候間政宗公御出馬可被成由被存候へトモ一切其沙汰無之候云々

○奉公 奉公人

吾妻鏡云建久二年五月三日庚戌被付奏書於高三位奉公善信草之(中略)頼朝尙以忠貞奉公繼家業守朝家云々

又云正治元年十一月十日戊戌兵庫頭廣元朝臣雖請取連署狀心中獨周章於景時讒佞者雖不能左右右大將軍御時親致昵近奉公者也

又云建仁元年十一月三日己卯中務入道經進參御所申下近日可歸洛之由能員爲申次參東小御所相具子息高重左金吾對面給所被收公之所領内先可返給一所之由被仰下經進以其次條々述懷移刻或申往事難忘或述奉公異他獨拭淚退出左衛門尉義盛已下親視聽往事之老人等聞之多落涙云々

又云承元三年六月十三日乙亥土屋三郎宗遠捧狀是右大將軍御時以來竭勤厚也家茂者謀叛人景時孫子也且奉

又云延德三年四月廿日詣飛鳥井中納言入道亭此日有三時鞠會武家輩武田彦次郎小笠原備前入道(中略)其末敷賀茂輩座次武家輩入屏中門着座奉公衆與細川被官人相互不問參入若座殿助僧正往年記云大永七年二月十三日於西七條大合戰武田衆細川方衆數百人打死公方御沒落道永武田衆諸奉公衆以下悉取退其勢二萬餘自今路坂本被落云々

又云天文十三年七月九日大洪水京中人馬數多流失在家町町釘拔門戶悉流失四條五條橋祇園大鳥居流失禁中西方築地流損於四足等御門者從武家奉公衆馳參無別儀云云

蜷川親後記云天文七年十月廿六日丙申奉公衆於貴殿應雁朝食在之

大館常與記云天文十一年卯月十一日越智以同名御禮申上候御對面之事様體可爲如何候哉旨被尋下候由佐方より内々承之仍人の被官人などにてなく候は如諸奉公方にて可有御座候もし又被官分にしては庭上たるへく御事の由申入之也

中國治亂記云天文廿年八月廿七日山口ノ館ニテ御能アリ成ノ刻計御能過客人衆歸宿ノ時分陶尾張守謀反ヲ起シ已ニ德地ヨリ押寄江良丹後守宮川甲斐守防府口ヨリ二手ニ公與不忠難被對揚云々

又云建曆二年三月廿日丁卯惟義頼時廣綱等依在京奉公之勞各拜領一村地頭職云々

又云寬元三年正月廿一日丁巳今日大納言家可注進父祖代々奉公次第之旨被仰含廣御出居衆云々

同脫漏云嘉祿二年五月廿三日丁丑小林五郎高山五郎等領所請所事類依望申可被許容之旨武州今日被仰遣本所云々件兩人重役奉公之間不諧爲被救也

義貞記云一奉公用意事先ハ賢ニ持テ振舞ヲハ世ニ隨ヘシ心ハ曲節不善ニシテ振舞亦無禮ナルハ當道ノ器用ニ非ス云々

太平記云佐介貞サテモ關東ノ様何トカ成ヌラント尋聞ニ相模入道殿ヲ始トシテ一族以下一人モ不殘皆被討玉テ妻子從類モ共ニ行方ヲ不知成ヌト聞ヘケレハ今ハ誰ヲ憑ミ何ヲ可待世トモ不覺見ニ付聞ニ隨テイト、心ヲ摧キ魂ヲ消ケル處ニ關東奉公ノ者共ハ一旦命ヲ扶カラン爲ニ降人ニ雖出途ニハ如何ニモ野心有ヌヘケレハ云々

嘉吉記云石見太郎左衛門尉夜查思案シテ申ス様誠ヤ日本ノ御寶神璽寶劍内侍所南方ニ御座アリトカヤコレヲ取マイラセテ都へ還シ入レナハ如何ニト申シケル内府心ニ近

頃可然事也ト思ヒ給テ内々室町殿へ被申ケレハ可レ請ニ
勅命トテ傳奏ヲ以テ伺ヒ玉ヘハ我朝ノ御寶入洛ニヲイ
テハ赦免子細アルマシトノ綸命ヲ下サル石見承リ大ニ悦
テ赤松一族ニ間島ト被官中村太郎四郎加ハレト申合メケ
レハ同志ノ者イテキナ十餘申シ語ヲヒ南朝奉公ヲ望ミケ
ルヤカテ御同心アツテ召仕ハレケリ
應仁略記云山名入道禁裏仙洞を將軍家へ移し奉る衛門の
佐を扶持し立ける造宮の程細川奉公の身たらん輩を宿意
いかてか止なまし細川方多年多るの芳契一時に替り果け
りと天下の物沙汰聞に胸を焦す云々

蟠川親元記云寛正六年四月廿九日丙午奉公山内六彌山内首領兵庫助重
息也

大内義隆記云永正十五年ノ八月ニハ御暇玉ハリ下向スル
加様ニ武家ノ御所サマニ代々奉公シ玉ヘト義隆ノ御心中
ニハ先祖ハ王子ノ事ナレハ公家ニナラセ玉ハン事勿論シ
カル事ナリト云々

快元僧都記云天文四年七月廿八日社頭有參詣氏綱合
ノ笑喜悅畢京都奉公伊勢殿同道アリ天下希有之由褒美畢
鎌倉年中行事云奉公中奉對管領禮義之事於殿中以
下祠宅之禮ハ事新不及記

御座候故當分池田近所故民部大輔勝政へ付候而居申由
申候

又云信長御他界太閤之世に罷成候て攝津守も志摩守も
被召出攝津守は法名道齋志摩守は安志と申候て太閤へ
御奉公申候

太閤記云九州御出勢ニ一奉公人先主に暇をもこはず主取を
仕有レ之處先主見付られ理不盡に成敗仕候は、却て可
レ爲越度見付次第當主人に相理り其上を以急度可申
付又届有て奉公人をかしか候は、其主人越度たるへき
事

又云石動山由信長公觀音經念給之段或山伏等か祈或後生善
處など云事を専にせし候僧を信し給ふ事は扱置ぬかれ
か如く諸人をまよはし施物等欲する奴原に威あれば諸奉
公人貧く成行物也とて會て用ひ不給寺社領夥しく有し
をは欠所の地となし高士に恩賜有し也

三好別記云十川名は存不申候長慶弟是は後に太閤へ奉公太閤薩摩へ
御働之時薩摩にて討死

類聚古文書云今川義元平制條目定一奉公人先主へ暇を不乞主取仕
候は見付次第當主人へ相届其上を以急度可申付又届有
レ之て奉公人逃候は當主人可レ爲越度事云々

又云正月十六日建長寺圓覺寺壽福寺淨智寺淨妙寺並二十
刹諸山之長老以下御禮ニ被參公方様御直垂御荷用之人
人モ直垂ニテ御茶アリメシノ御茶ハ御一家中ニ持參其外
ハ只奉公人衆ト建長寺御茶ヲハ御荷用同様ニ持テ參其以
下ハ先メシヲ持テ參

又云供奉之時奉公之供ハ太刀持中間一人手振之中間四人
小者一人力者二人既者二人

宗五大雙紙云なに、ても一色物の上手たらん人を上下を
いはす賞翫すへき事也公方奉公の人も晴の役をつとめた
る人を賞翫也

今川大雙紙云奉公人或は役人などは相構て事有顔に情氣
はしき體あるましく候也尾籠無禮の事也

新撰信長記云森三左衛門ヲ呼テ朽木信濃守所へ立越頼テ
見ヨト宣へハ承候トテ彼館へ行朽木ニ逢テ此由角ト申セ
ハ如何様ニモ此度ノ義ニテ候間御奉公可レ仕トテ三左衛
門トツレ御迎ニ出我館へ入奉リ無他事御馳走仕リ翌日
御供申京都ニ着セ玉ヒケリ

荒木略記云高槻之城に和田伊賀守是は江州甲賀の人にて候其外少々城
構仕居申候者も御座候由申候右之通面々持に在城仕候公
方へ御奉公申候由申候荒木一家ハ丹波之軍人にて小身に

又云太閤秀吉各在高麗奉公人上下共走日本へ於相越は聞
付次第成敗可レ仕候自然抱置何かと違亂之輩有之は可
レ致言上云々

小島景憲家譜云三ヶ條之返答景憲(中略)三月四月之間は
大坂働延たると可レ被思召候又扶持放不申は謀反と可
レ被思召候に付敵働定候は其地より奉公人早々御越候
へと三右衛門内證に可レ申候

義殘後覺云爰ニ濱路彦六ト云人アリケリ傍輩ニ霞沼若狹
ト云者有ケルカ元ハ豫州ニ奉公セシヲ聊ノ事ヲ云上リ二
人トモ暇出サレタリ

賀越圖詳記云越前國朝倉御家督ナクシテハ叶ヒ難シトテ方
方容色アル婦人ヲ尋ケル程ニ是ハ誰殿ノ妹ト是ハ某殿ノ
女ナリト云テ奉公ノ爲宮使ノ爲トテ來リ聚ル事只三千ノ
宮女ノコトシ

清正記云虎之助十五歳のとき母公へ申上られけるは我御
影を以て成人仕る年十五といへともせもたかく御座候
間前髪おとし奉公をつとめ申へきよし申されければおと
なしく申たるものかなと藤吉殿へこまくと御かたりあ
れば藤吉との一しほきけんよろしく内々かの者か眼さし
を見るに能祖父清信に似つる者かなと存候ひし前髪おと

し申さんとて則男になし加藤虎之助と名つけ初て百七十石の領地を給り奉公の身となる

伊達日記云天正十四年霜月清顯公御遠行以來三春ノ城ニ御北様被成御座候萬事ノ差引田村月齋同梅雪同右衛門大夫橋本刑部少此四人ニ候其頃ハ政宗公御夫婦間無然候内々御北様御ウラミニ思召サレ候月齋刑部少ハ縦御夫婦間無然候共政宗公ヲ不頼入候テハ田村之抱成マシキ由分別ニ候梅雪右衛門大夫ハ御北様相馬ヲ頼ミイリ政宗公へ違候トモクルシカラサル由分別申サレ候上ハ伊達ヲタノミ入候様ニテ底意ハ相馬へ被申寄候上ハヲシナヘテ伊達御奉公ノ様ニテ月齋方梅雪方ト申様ニテ候云々

又云須田伯耆ト申者ハ大浪大膳家中ニ候御洞御弓矢ノ砌大膳逆心仕候所親伯耆後ハ道苦ト申者背大膳直ニ御奉公ニ罷成候大膳家中故百番切ノ奉公並ニテ御年頭ニ一度御前へ罷出御弓矢ノ時分モ指南備ニ罷在體ノモノニ候増補家忠日記云木曾中ノ諸士ニ大神君ヨリ御書ヲ賜ル本多佐渡守大久保十兵衛尉是ヲ奉ル信州木曾中諸侍如先規ニ被召置候條各其旨ヲ存可致忠節候猶山村甚兵衛馬場平左衛門千村平右衛門千村助左衛門可申也慶長五

又云嘉祿三年四月廿二日癸卯今日將軍家入御左京權大夫亭(中略)御出之儀又殊被刷供奉人清撰各行粧殊折花供奉人右馬權頭北方大夫將監前民部少輔遠江式部大輔宮内少輔下四十四人略之

又云建長四年八月一日癸丑親王家令任征夷大將軍御之間可有御拜賀于鶴岡八幡宮之由雖有被定之儀所被停也但於供奉人散狀者被召置御所云々
又云弘長三年八月十五日壬戌鶴岡放生會將軍家御出如例相州武州左典廐等被候廻廊又彈正少弼業時相模三郎時輔越後四郎頼時等參御棧敷云々先中御所御出供奉人姓名略之御後十人姓名略之先陣隨兵姓名略之次諸大夫次殿上人次公卿次御車越中次郎左衛門尉長員土肥四郎左衛門尉實綱以下十人姓名略之次後陣隨兵姓名略之官人佐々木大夫判官家氏信濃判官時清云々

年八月一日木曾諸奉公人中へ
○供奉人

吾妻鏡云養和元年七月廿日甲午鶴岳若宮寶殿上棟社頭東方構假屋武衛着御御家人等候其南北(中略)申刺事終武衛令退出給爰未見之男一人相交供奉人頻進行于御後其長七尺餘頗非直也者武衛覽之聊御思慮令立留給未被出御詞之前下河邊莊司行平房伴男訖還御之後召出庭中曳扨直垂之下着腹卷髻付札安房國故長佐六郎郎等左中太常澄之由注之事體可謂奇特被推問事由之處不能是非陳謝只稱可被斬罪矣行平云可被鼻首之條勿論也但不知食其意趣者爲汝無據早可申之者于時常澄云去年冬於安房國主人蒙誅爵之間從類悉以牢籠寤寐難休其鬱陶之間爲果宿意此程佇立御亭邊又曝死骸之時爲令知姓字人髻付簡云々
又云文治五年七月一日己未鶴岡放生會也已刻二品御出供奉被用去月九日人數云々
又云建保三年十一月八日癸亥將軍家自相州御亭還御々所依暫惟御旅宿已經七十五日訖藤右衛門尉景盛豫參儲御所經營有御引出物並供奉人贈物

武家名目抄稿第五十八册

塙檢校保己一編

稱呼部 十三下

○渡奉公
會津陣物語云景勝中々許容無之其後上方ニテ方々渡リ奉公仕リ小西攝津守所へ罷出

○給人
吾妻鏡云寛元四年三月八日丁酉渡邊海賊同類柴江刑部丞源綱法師本職攝津國板上庄南方下司名田事自領家方收公之由源綱入道依申之今日有其沙汰爲賊跡上者自關東可被補地頭之處領家自由所行無謂之趣可被答仰之旨治定追可有給人沙汰云々

太平記云新田足利確足利宰相尊氏卿ハ相模次郎時行ヲ退治シテ東國懸テ靜謐シヌレハ勅約ノ上ハ何ノ子細カ可有トテ未タ宣旨ヲモ不被下押テ足利征夷將軍ト申ケル東八箇國ノ官領ノ事ハ勅許有シコトナレハトテ今度箱根相模河ニテ合戦ノ時有忠證ニ被行恩賞先立新田ノ一族共拜領シタル東國ノ所領共ヲ悉闕所ニ成シテ給人ヲソ

被付ケル

又云 新田左兵衛佐 島山大夫入道大ニ悦テ懸テ江戸遠江守ト其甥下野守ヲ被下ケルカ討手ヲ下ス由兵衛佐傳聞カハ在所ヲ替テ隔ルコトモ有トテ江戸伯父甥カ所領稻毛ノ庄十二郷ヲ欠所ニナシテ則給人ヲソ被付ケル 江戸伯父甥大ニ僞リ怨テ懸テ稻毛ノ庄へ馳下リ給人ヲ追出城墻ヲ構へ一族以下ノ兵五百餘騎招集テ只島山殿ニ向ヒ一矢射テ討死セントソ伺リケル

花營三代記云應安元年六月十七日寺社本所領事(中略)次以本領誤被成御下文地事被宛行替々程先本所與給人各半分可爲知行不可有守護人之弊矣

新式目追加云本所訴訟事蒙裁許未宛給替於當給人之間不及知行之由多有其間預裁許之輩任先下知之旨可令糺返之但當給人所領一箇所之外不可知行者有御許替於當給人之後本主知行之爲ニケ所者速可令糺返也

季瓊日録云寛正五年五月晦日就群家村自公方再三被立御使其禮謝謹白之御使者可除却群家之新給人之謂也

應仁私記云痛敷者公家上藤家燒三四年落涙百千度所領者

セ玉ヒ終日鷹狩ナトシ玉ヒケルカ民屋ニ立立ナカラ其所ノ安否ヲ被記附給人代官ノ邪正シナク其事問玉ヒケリ

室町殿物語云去程に秀吉公今ははや六十餘州にと、こほる國なしされとも諸國の百姓等一戰の刻はや、ともすれは一揆をおこし事を妨申之爲難く是を停止すへしと仰出されてすなはち在々所々に法度書を出させ給ふ條に一諸國之百姓等刀脇差并弓鐵炮其外武器之類所持仕候事難御停止其委細はいらざる道具を相蓄へ年貢諸道を令難澁候て良ともすれは一揆を企給人に對し非義之働を仕候族勿論御成敗あるへし然は其所々田島令不作知行費になり申候之爲其國主給人代官として右之武器取聚候て悉可致進上候事

大友與廢記云 土民穴圍 松の岩嶽王左衛門此三ヶ所にこもりたる者ともはみな薩まかたの者にさかし出されあるひは斬れあるひは生とられになるいくさしつまりてのち地頭のさに穴圍にこもりたるもの一城堅固に持たる同前なれば給人是をほうひす

關八州古戦録云 忍城二度 大里ノ郡久下ノ城主市田太郎ハ七黨ノ一員私黨ニテ重代ノ國侍ナルカ(中略)此度氏長兄弟

被武家取無濁名分御大事及淨沈者給人被官人遁世者得時出此世間被誥貪之神高野笠様大疲勞計會俸侍加世者今俄求蟬子以好具足其身不思議時代也仍降參人甲下手人解死者臆病未練之事歟

永正十七年記 應助記云六月三日宗珍入來密教院同道細川右馬頭へ書狀之被申僧正房炭山池尾以下今度自京兆付給人_二之故也

蛭川親俊記云天文七年十二月六日丙午私給人與三郎次郎兵衛小二郎御料所へ下之

又云天文七年十二月廿六日丙寅自御料所給人衆上洛同私給人年夫上之

又云天文十一年十二月九日乙酉給人衆御料所へ下之二郎兵衛鶴若

備前文明亂記云天下大亂ノ時節タルニ依テ松田一族共備前國西郡ノ内數ヶ所押領ス是ニ依テ國中ノ本給人トモ大ニ野心ヲ含ミ便宜ヲ窺ヒ此事ヲ訴訟シ時節アラハト相待處ニ云々

又云幾程モナク政則備前ニ打越彼在々所々ヲ悉押置給人ヲ付タリ

信長記云 信長公父子 信長公ミノオノ瀧御見物トシテ出サ

小田原ニ籠ルニ付テ久下ハ小給人トシテ拘ヘノ地亦陰僻タル故捨置テ忍ノ城へ入ヘキ旨示シ合セ本丸へ來リ籠リ居ケル處ニ云々

又云 上州館林城主赤 連々ニ近境ヲ切廢ケテ板倉ノ眞下越前守小泉ノ富岡太郎四郎北大島ノ片見因幡守藤岡ノ富田又十郎カ如キ小身ノ給人等ヲ被官トシテ更ニ他家ノ辱シメヲ受ヌ年月ヲ送ケルカ云々

義殘後覺云信玄公ノ給人ノ子ニ吉坊ト申シテ五歳ニナル童子アリケリ中々小賢ク見ユルコト唯者ニアラスト人ニ以呂波ヲ讀セケルニ唯一遍ニテ覺ヘケリ

佐野宗綱記云佐野殿相生殿は代々御一家にて中にも其頃には御兄弟此兩家は謙信公御無事にて上州武州口の義任せ置との御事也 虎松殿を御養子に被成猶以御入魂也由良長尾澁川一家なれば佐野相生と度々の合戦有故給人は境をあらそひ百姓等は馬草場をあらそひ城主の下知もまたす夏は麥作早苗をふり秋は作毛をふり境目々々には要害を構へ物見の番所をすへ十貫十五貫斗宛の知所をあたへ郷一揆と名付又二貫三貫の割符をとらせ置歩弓の者とも境目々々の番所近所五郷七郷の分は其番所の案々付隨右番所にて鐘貝をつきたつれば在々の者共は其番所へ馳集

り所々の物見は村々にて鐘貝つきたつれば城付々定置外の奥力歩弓は本城え馳集る此處色々の相圖の手立有云々」松原自休手録云弘治二年家康十五歳ニシテ元服義元ノ字ヲ借り號ニ次郎三郎元康初テ歸岡崎ニ雖然岡崎ニハ從ニ今川在番家人ノ本領ニハ入ニ給人ニ無安塔一サレトモ從ニ所々舊臣等出向悦之

十河物語云天正十五年秀吉公九州御進發アリ和睦ニナリ島津殿本國安塔之御朱印頂戴シ玉ヒ九州靜謐ニ相濟候薩州之内ニ御藏入少有ツレトモ高麗表泊州ニテ島津殿一戰アリ三萬八千七百餘討捕玉ヲ秀吉公ハ御他界被成秀頼公ハ未御幼少ナレハ御名代ニ毛利中納言輝元會津中納言景勝備前守喜多中納言秀家江戶内大臣家康卿此五人連判ノ威狀出今度朝鮮國泊州表大明朝鮮人催ニ猛勢相働之處父子被及ニ一戰一即切朝敵三萬八千七百餘討捕之ニ段忠節無比類依之爲御褒美薩州之内御藏入給人分有ニ次第一圓被宛行諸目錄別紙有之並息又八郎被任ニ少將ニ其上腰物長光父義弘江御腰物正宗被拜領候於當家御名譽之至也仍如件慶長四年正月九日羽柴薩摩守殿參安藝中納言輝元會津中納言景勝備前中納言秀家加賀大納言利家江戶内大臣家康

成田家分限帳云藏米侍千石鳴神右京五百石安桐助左衛門三百石水島孫兵衛(以下略)

○無給人

世鏡抄云侍外様之事付兼參之事所領ヲ過分ニ給テハ朔日五日十日十五日廿五日晦日ニハ必ス參レ其中ニモ依ニ御用ニ召仕レヨ无所領ニ名字斗ノ契約ナラハ朔日計出仕セヨ千貫ノ地頭十貫ノ扶持ハ扶持ノ下廿貫ハ中卅貫ハ上也但主器用アツテ文武ノ兩道達セシ人ナラハ其給限ラル、ニ不レ及也武文之兩道達者也其義理不足ナラハ能ハカリノ扶持ヲスヘシ能アツテ義理正シクハ三身相應ノ侍國ヲ與テモ不足歟所領ヲ給ル外様ハ參入ノ時ハ萬事ニ召仕レヨ名字斗ノ外様ハ管親類兄弟ノ次也但合戰狩場文武ノ交ハ給人無給人ノ人ニ不可依ル是侍ノ役ナレハ也無給ノ輩給人ノ前ヲコシ給人ハ無給人ノ者ニコサレテハ一生ノ耻也ト心得テ主ノ用ニ立ント稽ハ有無押合テ互ニ高名ヲスル也无給人ハ給人ヲ持テ無給ノ將ヲミンスレハ其間ニ敵ニコサレテ一陣破ヌレハ殘黨全カラス也懸參仁外様之侍自然時粉骨ヲ至シテ主ノ威ヲ見ヨ三年ノ内ニ不感ハ別人ヲ憑メ但親類ニ至ラハ依ニ時儀可計之主君ハ又懸參ノ外様ノ傍輩ニハ兄弟親子ノ如クニ目ヲカケ所領與サ

與羽永慶軍記云伏見御城御扱モ當關白秀次公ノ御領内ハ御政道正シク憐愍モ深クオハシマシケルトカヤ御持分ノ國御御檢地ナシ玉ヒシニ其役人被召出ニ仰出ケルハ今度ノ檢地ハ予カ藏入ハ若干ノ損アルトモ少モ不苦給人百姓ノ能様ニセヨト仰セケレハ役人トモ承テ竿ヲ入ニ政所八萬石減シケルト也役人トモイカニアラント思ヒケルニ秀次公聞シ召レ少モ悔サセ玉ハスイシクモ仕タリト御機嫌甚宜シカリセハ役人共案ニ相違セシト

○給主

太平記云公家一統雜訴ノ沙汰ノ爲ニトテ郁芳門ノ左右ノ脇ニ決斷所ヲ被造其議定ノ人數ニハ才學優長ノ卿相雲客紀傳明法外記官人ヲ三番ニ分テ一月ニ六箇度ノ沙汰ノ日ヲソ被定ケル凡事ノ體嚴重ニ見ヘテ堂々タリ去トモ是尙理世安國ノ政ニ非リケリ或ハ自内奏訴人ニ蒙勅許ヲ一決斷所ニテ論人ニ理ヲ被付又決斷所ニテ本給主安塔内奏ヨリ其地ヲ別人ノ恩賞ニ被行如此互ニ錯亂セシ間所領一所ニ四五人ノ給主付テ國々ノ動亂更ニ無休時

○藏給

ル程ハ或ハ馬或ハ太刀又ハ衣裳染物ノ珍アラハ時々刻々ニ與之只情ヲ深ク懸ヨ左様ニ目ヲカケ情ヲカケンニ所領ニ配當セヌトテ腹立シテ自然ノ事ニ不レ合ハ二度ハコラヘ二度ニナラハ一束ニ勘道セヨ情コソ所領ニマサレト思テ高名ヲ施シ致シ粉骨ニサハ涯分加ニ扶持ニ神妙也感狀ヲ出セ無給ノ仁一命ヲ拾ハ子アラハ一歳ナル共是ニ給所ヲ出セ無子ハ後家ヲ扶持シテ年忌ノ菩提ヲ吊ハセヨ妻子ナクハ寺菴ニ田地ヲ寄テ末代是ヲ吊ヘ給人ノ討死ハ定ル法也然ハ又打死共不忠ヲナサハ召放セ无給仁ノ討死ハ誠ニ神妙之至也是ヲ不感ハ更ニ弓箭ニ家破テ子孫可絶也

○無足人

大友與廢記云安藝縣人夫天正八年に豊後國東の郡田原親貫大友宗麟公に逆心企の初安岐郷あるひは無足人あるひは土民百姓等を親貫の下知にしたかはしめんかために過分の祿をあたへおこなひすかして一味せしめしかとも俄に多勢をもつてをしかけ親貫を御退治なさる、によつて安岐の郷人右に同心の志をむなしくして過ぬ

甲陽軍鑑云強き大將はふまへ所有に付下劣の口に侵されす生付たることくにありて俄に器用もたすしてまします是も強なる故ぞかし(中略)義理を専まもり給ふなれば

我等忠節の者には大綱をば多細心操をば少つ、も宛行無足なる人一人も候はて縦常には器用たてなしとも意地きたなしとは申かたし

○無足衆

福島正則家中分限帳云無足衆四十人扶持飯沼平左衛門三十八人扶持澤井九市同吉川太左衛門下九十一人略之

○扶持人

菊池武朝申狀云弘和二年之頃者武朝守二叔旨奉仕將軍宮之間一族以下扶持人等受二彼朋黨語二楯籠分領守山之要害

澤巽阿彌覺書云貞孝之御調進節分御舟繪所は一兩年前上京小川扇屋にて被書之訖又其後狩野法眼弟子ニ時右近と申仁御被官人御扶持人候其時にか、せられ候云々

奥羽永慶軍記云最上源五郎改易條最上一門郎等トモ我儘ノ申ヤウ上ヲ輕スルノミナラス源三郎ヲナイカシロニ仕事不及是非皆流罪ニソ所セラル(中略)郎等共諸國預トナル事松根備前守父子ハ立花飛彈守預本庄豊前守父子酒井雅樂頭預下十九人略之右之人數最上ノ大臣等ナリ其外小知扶持人ノ侍都合一萬餘人此時ニ窄滅ス

福島正則家中分限帳云無足衆四十人扶持飯沼平左衛門三

ニ寓居在ルニ依テ仰出サル、御條目定一たい所よりおくへ十よりうへのおとこ一切出入すへからさる事一扶持人之外醫師むさと入へからさる事

○扶持給

甲陽軍鑑云其ことくなる家中にては老衆出頭衆又かせ物小者迄意地きたなくなり人をぬかんと存するに付主は被官に物も給はらすしてつかはんと思ひ被官は主に忠節忠功番普請供使の奉公もせずして偽をもつて扶持給をとらんと思故加世者小者給をとるため引こみ候間奉公人多鹽肴なとる商人に成ものなり

和井日記云四國備前播州ニテ羽柴ノ作法ヲ聞候ニ土民ナトノ説々ニハ佛ノ如シト申候土民等ヘノ痛ハリノ體ハ下下申語リテ涙ヲ流シテ候其上ニモ土民ノ内ニ武役ニ立ヘキ男ヲハ撰ミ出シニシテ扶持セラレ金銀米錢ヲヤラレ候

江城年録云寛永九年六月朔日加藤肥後守并子息松平豊後守御改易被仰付肥後國ヲ被召上一所懸命之地出羽國庄内にて一萬石被下候豊後守は飛騨國へ被預百人扶持被下

○少給

甲陽軍鑑云原甚四郎も諸角助七郎も知行同心召上られ諸

十人扶持澤井九市下九十二人略之

成田分限帳云扶持方侍三百人扶持上杉岩松齋殿百人扶持

上杉竹知麻呂殿同上杉大藏丞殿同小山圖書頭殿六十人扶持里見道玄殿三十人扶持足利道永殿同伊五野七右衛門同大沼鞠負同嵯峨野外記同長野一羽齋同田沼三樂齋同淺野見道樂同庄野彦四郎同山田四郎左衛門同村上彌次郎同熱田伊勢同打綿道正庵同横澤周防同森川玄道齋

板坂卜齋慶長記云桑島左近と申者治部少輔つよくかまわれ候もの城織部内府様へ奉公に出し候治部少輔より織部所へ使桑島左近御扶持はなさせられ候様にと被申越候織部返事に次てを以可申上と返事其後治部少輔より兩度御檢桑島ふかくかまひ申候御取成頼申之由織部返事に桑島事我等肝煎奉公に出候又御扶持御はなし候へと難申上候其方より直に被仰越候へと返事申候

元寛日記云元和二年正月朔日御縁ニ後藤本阿彌狩野御服所其外御扶持人ノ諸職人共進物面々ノ前ニ置之御禮阿部備中守被露之御養者役ナリ東武實録云元和七年是年都筑又右衛門政武御扶持方ノ役及ヒ御賄方ヲ兼役ス

又云寛永三年六月二十六日越前宰相忠直松平三室公ノ別墅河守

角同心の五十騎は一條右衛門大夫殿へ被預候原甚四郎同心は今福丹波に被預也右の兩人外様のことくに罷成候少給少扶持にて堪忍仕物哀なる體なり

○地下人

太平記云頼良回夜未明ニ齋藤急キ六波羅へ參テ事ノ子細ヲ委ク告申ケルハ則時ヲカヘス鎌倉へ早馬ヲ立テ京中洛外ノ武士トモヲ六波羅へ召集テ先ツ着到ヲ付ラレケル其頃攝津國葛葉ト云處ニ地下人代官ヲ背テ合戦ニ及事アリ彼本所ノ雜掌ヲ六波羅ノ沙汰トシテ莊家ニシスヘン爲ニ四十八箇所ノ簀并ニ在京人ヲ催サル、由ヲ被披露是ハ謀叛ノ輩ヲ落サンカ爲ノ謀也

又云豊原未此山伏申ケルハサル事モ有ラン棧敷ノ顛倒ハ總シテ天狗ノ態計ニモ非ス(中略)而ルニ此棧敷ト申ハ橋ノ勸進桑門ノ世捨人カ與行スル處也見物ノ者ト云ハ洛中ノ地下人商賈ノ輩共也

太閤記云織田三七殿與秀吉及餘將之條かち立之士二百人之内道に得たるを五十人撰出しつ、急長濱に至て廿人は松明を持せ出我行さき道通山の巖々に百姓共を進出しともし立させよ卅人は長濱近邊の地下人共に酒食馬の飼をこしらへ持出道の兩邊に待せよ云々

謙信家記云氏康ノ諸士景虎ヒカル、ヲ喰トメントヒシメク或ハ地下人トモ起リ合小荷駄ヲ奪ヒ歩兵ヲ討ケレハ景虎心ハ準リ給ヘ共何事モ思ニ不レ叶シテ上州平井ヘ引返シ五月上旬早々越後ヘ御歸陣有

伊達日記云七月十六日本丸計自燒ニ仕會津ヘ引除候地下人ハ思々ニ相除候我等ニ城請取可申由被ニ仰付一其日ニ罷越本丸ニ假屋ヲ仕候云々

又云關白様ヘ二本松ニテ御目見ヘ候所ニ兩使ヲ以テ大崎葛西ノ一揆ノ様子御タツネ候政宗仰ラレ候ハ城々多相抱地下人迄モ譜代ノ者ニ候間御退治御六ヶ敷候條命ハカリハ被ニ相助候様ニ御訴認可申由申候間澤谷ト申所ヘ引寄而差置候間御意次第討果可申由仰上ラレ候

奥羽永慶軍記云永慶八年槍 奥州會津領主蘆名盛氏抱槍原ト云所ハ米澤ノ境ニテ敵ノ靜地ナル故常ニ與力數多指置城番ヲ居置ル敵取カ、ル事度々ナレハ上ナル山ニ要害ヲ構ヘ數十軒家ヲ作テ與力ハ云ニ及ハス地下人ノ妻子マテ入ヲキ男ハ槍原ニ籠城シテ敵ヲ防キ戰フ事其所ノ地ノ利ニヨツテ也

又云佐竹勢動 爰ニ山類ノ城トテ有ケルカ白川與力近藤兎毛同對馬守同豊後守同六郎兵衛尉籠城シケルカ敵ヨスル

云

赤松再興記云慈照院殿御時享德三年甲戌山名右金吾入道宗全上意ニ違事アリ此時節ヲ幸トシ彦五郎則尙類ニ細川讚州ノ一揆富樫介ヲ退治シテ又能登國ヲ責伏セケル間島山修理大夫ハ江州餘吳座ヘ宰人有テ暫クオハシマシケル

東寺供僧評定引付云寛正元長祿 一天下兵亂或依ニ國中浪人等出現ニ自然物恣時年貢取散事有之は雖ニ請切申一左様之時は御年貢可有ニ御免一由申入畢十月八日連署除之

應仁記云應仁元年五月十日赤松次郎播磨衆宰人共播州西國ヘ亂入ス本國之事ナレハ百姓土民ニ心ヲ合無事故ニ手ニ入ケル

伊勢兩宮兵亂記云文明十九年十二月十九日御勢ヲ遣サレ同廿日ニ山田三方悉ク放火セラル榎倉掃部助 兵則一類ハ宮中ニ走入リ御殿ノ下ニ楯籠ル(中略)掃部介ハ御殿ニ火ヲ掛ケ奉リ腹ヲキル即首ハ宇治ヘ取ル同廿六日ニ諸勢悉ク開陣ス然間翌年ヨリ無爲ニ治リ山田三方ノ面々還住也但坂倉家

季瓊日錄云長享三年四月廿五日又赤松一行以ニ冷泉殿ニ供ニ台覽ニ愚竊自ニ赤松上洛之用意也所然因州伯州有ニ忿

トキ近邊ノ地下人マテ走集云々 粗井日記云丹波家與國中ノ旗頭衆思ヒ々々ニツマリツマリノ路筋ニ待ウケテ北來ヲ討ツ野伏地下人ニ申付ラレ山山谷々マテサカシテ討テ捨ツ

松原自休手録云豊後日杵ノ城大田飛驒守拘ノ持ニ續佐賀ノ關ニ堅ニ海陸ニ然處ニ中川修理大夫ハ依レ爲ニ公ノ味方ニ從ニ同國岡ノ城ニ發ニ向白杵(中略)中川カ輕卒驅來ルヲ地下人打ニ懸鐵炮ニ鍋倉山ノ谷ヘ引入云々

○宰人浪人源人分 吾妻鏡云元暦元年二月廿五日甲申朝務事武衛注ニ御所存ニ條々被ニ遣ニ泰經朝臣之許ニ云々其詞云言上條々一朝務等事右守ニ先規ニ殊可被ニ施ニ德政ニ候但諸國受領等尤可有ニ計御沙汰ニ候歟東國北國兩道國々追ニ討謀叛ニ之間如レ無ニ

士民自今春ニ浪人等歸ニ住留里ニ可令ニ安堵ニ候然者來秋之頃被ニ任ニ國司ニ被ニ行ニ吏務ニ可宜候 康富記云享德三年八月十九日戊戌島山彌三郎去四月三日夜落行不レ知行方之處細川京兆方被ニ留置之其外被官人宰人等多被方並山名方被ニ隱置ニ云々

又云享德三年八月廿一日庚子夜半過中御門朱雀近衛朱雀邊燒亡傳聞分島山勢先度連々没落宰人等悉押寄放火云

劇事ニ依此宰人衆侵ニ作州之堺ニ赤松有ニ上洛ニ者作州備州不可有ニ正體ニ云々

二水記云享祿四年五月廿三日後聞今日於ニ丹波國一有ニ合戰ニ宰人二千餘人慮出張内藤彦七數度合戰終打死(中略)此間ホツト云在所ニ城籠了小勢無益之事也宰人衆定乘レ勝之間從ニ丹波口ニ又可ニ出洛ニ歟恐怖也

嚴助僧正往年記云天文十四年五月六日上野源五郎宰人衆三千許山城江出張井出城取レ之赤澤弟若衆十七打死其外十三人打死云々自ニ去月頃ニ丹波江内藤宰人出張所々如此相働云々雖ニ然丹波出張衆敗北山城宇治江出張衆立蕃頭敗北則時仁靜謐也併尾州死去之故宰人失レ力歟云々

室町殿日記云備前入道福島之 要書ヘ夜討之條十二月三日雪降以外寒しけるに泉州備前入道同名佐賀の四郎萩原與三左衛門を侍大將として方々の宰人共駆集都合九百の人数を率して福島の城へ夜討によせ大手の番の者共十餘人討とり番所材木小屋など放火し大手門を揉破ておめささけんでせめ入りけり云々

大友興廢記云小笠原宗忠大神是助 白杵主親助渡唐の條小笠原晴宗の二男宗忠と云人浪人と成豊後國に在て年月を送る 荒木略記云荒木一家は丹波の宰人にて小身に御座候故當

分池田近所故民部大輔勝政へ付候て居申由申候云々
長會我部元親百ヶ條云諸宰人不_レ遂_二上聞_一は許容堅停止
之事

小島景憲家譜云十七日之午剋妙心寺長老其弟子は冬城に
籠り候佐藏主飛脚にて兩通此内禪爾と有は長老之狀也
(中略)狀文體日付相違如此然申上候をばた勤兵衛と申
宰人東よりの御目付にけいりやくにて其許へ參候間御心
御免候間敷候云々

伊達日記云今度義胤三春ヲ御取有へキ由被_二思召_一候ハ宰
人衆へ申合サレ候故普代衆モ多分被_二申合_一候此前會津ニ
テモ宰人拂ヲ被_レ成候而御洞シマリ申候

氏郷記云^{松島拜}松田金七ト言ケル者本ハ大和國ノ侍也生
得武勇ノ者ナリシカ一年南部ニ宰人シテ居ケル

賀越圖譜記云去程ニ賀州ヲ憑テ赦免之事ヲ歎訴ス言上相
叶テ先非御赦免アリ不日ニ出仕ス赤松譜第ノ宰人等相共
ニ播州へ下向ス

義殘後登云爰ニ中國ヨリ出タル士ニ里見強大夫善介ト云
宰人アリ京ニ所縁アリテ暫五條ノ邊ニアリケル云々

甲陽軍鑑云宰人衆とは他國より此家中へ憑みをかけ来る
侍をそれ_レに扶助せしめ其本國を手に入ては本領をく

矢島十二頭記云芥川輝津事五郎殿切腹之後は赤尾津孫二
郎殿從弟に候へは孫次郎殿へ浪人分にて居申候

增補家忠日記云天正十九年六月七日大神君來月中旬奥州
表ニ御進發有兼テ軍用ヲ調へ發向ノ命ヲ待ヘシノ旨諸將
ニ觸シメ給フ南部大膳太夫信直カ臣九戸修理亮政實^{南部}
秀吉ヲ叛テ信直ニ不_レ從奥州ノ浪人數千人ヲ招キ集テ近^{伯父}

郷ヲ掠メ略ス在國ノ諸將等是ヲ制スルコトヲ得ス是ニ依
テ大神君奥州ニ御進發可_レ有ノ旨也

慶長見聞記云爰ニ内府公ヨリ宰人シケル侍山田十大夫寛
圖書永井善左衛門杯申者其頃景勝所ニ宰人分ニテアリシ
カ岡左内小田切所右衛門青木新兵衛何モ弓矢ノ修行シケ
ル者トモ瀬ノ上ト云所ニテ政宗ト鍵ヲ合セテ晴ナル合戰
アル

松原自休手録云翌年正月廿三日攻_二懸川_一天王山ノ北ニ立
_レ旗魁首ハ大須加五郎左衛門大久保七郎右衛門松平周防
本多豊後ハ付_二大手ノ門_一從_二城中_一駿河武功ノ士打出挑
_レ戰美濃浪人伊藤武兵衛一騎當千之兵ニテ進_二出タルヲ
掠原次右衛門討取

又云長篠ノ押へ武田兵庫與_レ之浪人分名和無理介井伊彌
四右衛門五味總兵衛各遂_二討死_一云々

れさなく共其身の武功分別心指の届たるを見合人数を預
取たてらる、大身衆是は譜代衆と大略同事也右を委く申
せは第一に信玄公御家にて信濃を真田上野に小幡越後よ
り来る大熊は三人は宰人の大身として信玄公御取立也

又云宰人衆百十人此頭^{越前}宰人五味與宗左衛門^{關名和無理介}
前^{伊井彌}伊井彌四右衛門高流兵部^{是は御馬}石原治部左衛門
是は御馬

甲陽軍鑑末書云永祿十二年初五月二十六日ニ氏真ト家康
公扱ニナリ懸川ヲ家康公ニ渡シ其上遠州一國ハ御支配ア
リテ一度氏真ヲ駿河ノ主ニシテ給候へトテ氏真ハ駿州懸
塚ヨリ舟ニ乘小田原ヲ頼テ御宰人也

又云諸宰人二百拾三騎大頭武田兵庫信實也組頭ハ繩無理
之助重行七十騎五味與三兵衛貞氏七十騎飯屋彌四右衛門
助友七十騎

義輪軍記云城の大將長野右京進業盛郭の外を責破られ本
丸に引籠其身は持佛堂に入父の位牌を三拜し冑の上帯切
落して自誓とて一首只斯計陽風に氷肌も櫻もちりはて、
名にそ残れる三むの郷かな念佛三返唱自害いたしける

(中略)花方民部左衛門道寺久助町田兵庫上閑伊勢守久保
島重藏矢島久左衛門是等は皆宰人となる

武蔭證話云小田原御歸陣に秀吉公増田右衛門尉長政を召
し高札十枚仰付られ辻々に立らる其言曰此度漸生飛騨守
木村伊勢守大身に被_レ仰付候付士に事欠申候日本國中主
人に不足有族又立身に望有人々勿論構有宰人は不_レ殘兩
所へ掛入手柄次第知行可_レ取候古主構候は秀吉相手に御
成可_レ被_レ成候間心安可_レ存候如_レ件

又云塙團右衛門尉直之は元來は遠州横須賀衆にて須田次
郎左衛門といふ宰人して上方へ登り時雨左之助と名乗加
藤左馬之助嘉明へ歩小性に出る

又云上條又八は織田常真譜代の侍也大坂へ籠り冬陣に塙
團右衛門夜討の時蜂須賀阿波守家中一條與惣右衛門を討
取翌年落城の日も永岡盛物一所にて退口に突掛兩人共に
高名する其後大坂宰人御免にて森右近大夫に有付其已後

淺野但馬守へ奉公し和田庄兵衛と喧嘩して兩方改易也江
戸にて西福寺千部の法花經轉讀の砌意趣打して和田庄兵
衛を討すまた其身も手負會我丹後守宅へ引込居る彼場所
堀丹後守直寄屋敷へ近き故人を遣はし和田庄兵衛か死骸
を見するに鏢帷子を着たり又雜説ともなく上條又八は素
肌也といふを聞て丹後守宰人を使にて又八方へ遣はして
云々

武家名目抄稿第五十九册

塙檢校保己一編

稱呼部 十四上

○大將

多聞院日記云永祿八年十月八日今般方々雜説有之丹波ハハタノシウチ柳本赤井方へ裏通り一圓敵ニナリ則長坂口へ出ルト云々依之今日多聞山ヨリ竹内下總大將トシテ京へ人數被ニ打出ニ畢

武蔭叢話云諸大名列座ノ砌折フシ末座ニ直江山城守罷在山城守申候ハ我等事ハ謙信側ニテ遣ヒ立一手ノ大將申付唯今景勝家ニテ先手仕采拜ヲ取り候云々

又云高麗にて虎を切たる事は全義館といふ所に黒田長政六千餘にて廿日斗陣取居らる或時大成虎一疋馬屋へ入馬共を嚙殺し狂ひ廻る誰も出會ものなかりしに菅和泉守刀を抜て走り向云々和泉も危く見へけれ共助るものはなく候に後藤刀を抜て來り虎の肩先を乳の下迄切さくる長政井樓よりみてことの外不興し一手の大將する身にて大事の役をかへ犬死せんと畜類に立合事不合點なりと叱る

○大將分

二年正月朔將士濱松に登り元正を賀し二日より諺初あり
叔井日記云原原口合戦原彦次郎カ名代ノ原彦左衛門ヲハ足立右近カ郎等葦屋小太郎討取申候(中略)コノ外ニ大將分旗持ノ首マタ大分ニテ候

甲陽軍鑑末書云駿河勢ハ薩摩山ニ庵原千五百ノ人數ヲ以テ指固メ八幡タイラニ岡部忠兵衛小倉内藏介大將分ニテ今川家ノ十八人衆カタメタリ氏眞公旗本ハ清見寺ニ御馬ヲスヘラレ候既ニ其日十二日ニ一戰アルヘキトアル所ニ清見寺ヨリ薩摩山ノ際迄取續キタル今川ノ家老一門衆都合二十一頭義元公ノ敵信長ニ駿河ヲトラレタルヨリ信玄公ニトラレタルハハルハルマシナリトテ氏眞公ヲ跡ニ置駿府へ引入故薩摩八幡タイラノ人々モ引入云々

又云北條家ノ衆跡ヨリ來ルヘキ押ニハ遣遙軒ヲ大將分ニシテ山縣ヲ置給フ内藤眞田ハ小田原筋ノ手アテニ被ニ仰付

武蔭叢話云長久手合戦の時中書本僅五百餘にて少も痿ます士卒に下知し五百の小軍にて秀吉旗本數萬の陣へひたと挑かけ鐵炮足輕を掛たり諸大將是を討んと望みしかとも秀吉赦さす兩軍相並て二里斗行進しに鹿角の甲着たる

其時和泉は貳千石又兵衛は四千石にてともに物頭なり又云庵原助右衛門は駿河國庵原殿なり兄を庵原彌平次といふ武者修行して小田原へ行度々手柄有助右衛門後は戸田民部所に居て一手の大將勤る其後井伊掃部頭直孝に仕へて一手の大將となる

又云長政田は後藤又兵衛と主從にて有なから武功を論し常に戰場にて先を争ひ申され虎口へ眞先に進み給ふ故士卒等歸陣して初て生たる心地する粟山備中守利安井上周防黒田美作守などは是を諫む長政聞て如水御座なく候得は忠之黒田左衛門佐則長政子息を先手へ出し我は是を立本陣を守る

へき事なり去なから如水の居らる、故本陣氣遣なし我は先へ出合戦して討死する共如水居給ふ上は氣遣ふへからすといはる、也

又云家康公は眞田隠岐守信尹を御使として信賀田へ仰遣はされけるは信州にて一萬石下さるへきとの上意なり左衛門佐承り九度山に塾居仕候て山賊の體にて罷在候處に秀頼公より召出され相備八千餘の大將に仰付らる何より辱存候間心易く左やうの義は相成ましき旨申切たり東邊基業云神君信康君に命し給ひ大將として擊せ給ふに一揆とも敗北しければ足助の城を取返して兵庫に賜けり

武者一騎川涯へ乗下り馬の口を洗はする是を秀吉見て大將分の者とみへたり何者そ誰も見知らずかと問ひしに稻葉豫州見知て本多平八郎にて候と申上る云々

○良將

太平記云正成下向兵衛正成重テ申ケルハ衆愚ノ愕々タルハ不ノ如一賢之唯々ト申候へハ道ヲ不ノ知人ノ譏ヲハ必シモ御心ニ懸ラルマシキニテ候只可戰所ヲ見テ進ミ叶フマシキ時ヲ知テ退クヲコソ良將トハ申候ナレサテコソ暴虎憑河而死無悔之者不ノ與ト孔子モ子路ヲ被誠事ノ候云云

天正記云紀州御發向紀州と和泉は御舍弟美濃守長秀に與へて守こそしむ彼兩國は海近にして海賊つきやすく山けはしうして山賊伏しやすく良將にあらざるものしつめかたし

○名將

武蔭叢話云小田原陣の砌蒲生氏郷は三階金の菅笠の馬印を仕度と望まれける秀頼公聞し召是は大剛の名將佐々陸奥守か馬印なり氏郷には如何有らん但今度手柄次第なりとあり

○軍將

源平盛衰記云源氏ノ追手大將軍宇野彌平四郎行真搦手ノ

軍將ハ足利矢田判官代能清也

關八州古戦録云 古河御所晴氏 相州監居條 氏康不意ニ松田左衛門佐頼秀

後尾張守ト改ムヲ軍將トシテ七千餘騎ヲ古河へ差向三方ヲ取卷テ

火急ニ攻ラル

○勇將

豆相記云於此武州天神山城守藤田右衛門佐同忍城守成

田長康上州鷹巢城守小幡三河守關東八州之勇將率歸氏

康

○猛將

太平記云 久我頼範家佐用左衛門三郎 近々トネラヒ寄テ引ツメテ丁

ト射ル其矢思フ矢坪ヲ不_レ違尾張守_名カ胃ノ異甲ノハツ

レ眉間ノ真中ニ當テ腦ヲ碎キ骨ヲ破テ頸ノ骨ノハツレヘ

矢サキ白ク射出シケル間サシモノ猛將ナレトモ此矢一筋

ニ弱テ馬ヨリ眞倒ニトウト落

○剛將

武蔭叢話云上杉彌五郎ハ能登ノ島山義則ノ弟ナルヲ五歳

ヨリ謙信貫ヒテ姪婢ニシ上杉定真ノ養子トス定真ハ謙信

姉婢也此彌五郎大剛ノ大將ニテ度々ノ場數アル故ニ愛宕

山ヲモチテ景虎方へ取ラレス天正六年三月ヨリ翌年二月

迄取合越後國中ニツニ成テ騒動止事ナシ

又云越後上田城主長尾政景は謙信妹婿にて大剛の大將な

り既に地蔵時にては政景一手にて信玄と一戦し五備を切

崩し小山田備中を討取候程の別將なれば謙信手剛く存し

信州野尻の城に置き信玄を押へさせ申候

又云天正十五年三月秀吉公筑紫へ御動座島津を御攻なさ

れ候島津は元より強將なり手つから長刀を提げ真先に進

んで攻掛樺山平田伊集院石田等の兵共面もふらす柵へ着

て天地を響し攻戦ふ云々

○部將

續武家閑談云越後勢田部神梅には惡澤松崎兩家數百年在

住す(中略)谷澤合の内に住居し世々武器を不_レ失折々新

田由良殿へ一禮とけるか相生敗散の後は直に小田原へ出

仕す由良は是を惡み谷澤廣澤地境野菱公方蘆戸本宿仁田

山高津戸三四土地下人に金谷因幡を部將として松島惡澤

を攻させける

○一揆之大將

武蔭叢話云關ヶ原御陣之時越後は堀久太郎秀治村上周防

守義明溝口伯耆守宣勝わけ領す越後は二百年以來上杉舊

知なれば景勝より内意申渡し會津より長尾喜左衛門齋藤

三郎左衛門庄瀬萬貫寺杉原加地竹股なといふ侍ともを越

○施取

延喜式部式云大射者預點ニ召使四人一擬_ニ執旗_一

初井日記云 信長公先手陣へ丹波 信長本備ノ歴々ニハ山岡休庵

後藤善太郎(中略)野村三十郎ナト、名乗男共随分ケナケ

ニ働ラキ大音アケテ名乗テ候名字ヲ耻ル男トモト感心ニ

候是等ハ皆彼等カ手ノ名アル剛ノ者物司施取トモトミエ

テハ候ナリ

○騎馬之者

○騎馬衆

吾妻鏡云元暦元年十月廿四日己卯因幡守廣元 九月十日任 申云

九月十八日源廷尉叙留今月十一日聽_ニ院內昇殿_ニ云々其儀

駕_ニ八葉車_一扈從衛府三人共侍廿人 各騎馬 於_ニ庭上_一舞踏撥_ニ劔

笏_ニ參_ニ殿上_ニ云々

花營二代記云應永卅年三月廿四日有_ニ御參宮_一御供騎馬衆

山名刑部少輔以下也云々

康富記云文安六年四月十六日是夜室町殿 左馬頭義成十五歳 御元服

自_ニ今日_一三ヶ日可有_ニ境飯_一今夜管領武藏守也 騎馬三騎 白直

垂也云々騎馬同_レ之云々

二水記云大永七年二月十二日今日有_ニ御動座_一午刻室町殿

御出騎馬三人云々

後へ差越國中一揆を起させ下倉の城には堀久太郎より小

倉主膳を籠られしを上杉方一揆共取かこみ八月朔日より

急に攻候城中わつかに六百餘にて難儀致し候此時堀丹後

守直寄は年二十四歳若輩といへとも是を聞後詰せんとて

早貝を吹かせ旗を出しひしめき候云々一揆共備へ亂候處

を丹後守掛村切崩し首三百餘討取候一揆大將柿崎齋藤丸

田長尾萬貫寺庄瀬加地竹股等妻有庄小千屋田川へ引取五

千餘にてひかへ候

○先手大將

中國治亂記云爰ニ厄子下野守申ケルハ晴久ノ御發向ノ時

分達テイサメ申セハ臆病者ト皆笑ヒタマヒカヤウノ強敵

ニ逢テ一合戦アラレ候ヘト數度申シケレトモ各不_レ進然

レハ臆病者ノ下野一手柄可_レ仕御見物アレトテ切テ出テ

敵ヲ切崩シシカモ先手ノ大將深野宮川兩人ヲ討テ首ヲト

リ猶北ル敵ヲ追掛テ晴ナル打死也

○小將

松原自休手録云秀頼卿ハ東行ノ青木 女侍 大藏卿二位ノ局モ

不_レ還來舊冬落方便後悔ス召_ニ古新ノ小將_一吾雖_レ生_ニ武門_一

未_レ曾知_ニ弓箭之術_一敵於_ニ襲來ル_一ニ士卒ト共死_ニ一戰ノ中_一

可_レ決_ニ勝負_一云々

初井日記云丹波家信長先ツハ秀治宗貞公兩御屋形ノ御名代トシテ惣大將分ニテハ御一族ト云名將ト申シ廣澤中務忠綱殿澁谷雅樂介秀辰殿ニテ候此外奉行衆騎馬衆遊軍衆國與力ノ衆マテ大分衆出申サレテ候

武蔭遺話云伏見にて太閤秀吉公御他界の後世上静ならず云々家康公大坂御立御乗物には村越與惣右衛門を御乗せ家康公は御馬にて騎馬の内に御召なされ候

隨兵次第云騎馬の者は鎧ひた、れは、きよらひ弓征矢可有弓征矢は大將に替るへし其者の家々の流にさたすへしかふと敷皮は替るへからす

○乘馬

甲陽軍鑑云申酉兩年の御備書付御分國中へ廻なされ候跡部大炊助原隼人助奉之乘馬歩兵ともに一統の指物申付於戰場ニ剛愎歴然様可被申付一事付指物小旗の儀は可爲隨身之事

○馬上

長門本平家物語云頼朝十月廿三日兵衛佐八ヶ國の勢をふるひて足柄を越へて木瀬川にちんを取てつもの、かすをしるしける侍郎等のりかへあいくして馬上二十八萬五千餘騎としるしける

家中竹馬記云馬上の時ゆかけを小物にもたせる時は懐へ入ても持ち又首に打掛てそと懐へをし入れても持也又云大名の大太刀をもたせらる、時は馬上の左の方御小太刀より先なり御輿の時も同前大太刀は何時もちかたけてもつなり

大内問答云諸役の事公家には杏を賞翫たるよしより武家は太刀をもつ事賞翫なり公方には御供衆馬上にはかれ候大名は中間もち下馬候てかちの時侍右にもち候也

勢州軍記云國司北畠其領知者先於南伊勢一志飯高飯野多氣渡會五郡其外大和宇陀郡也凡侍九千人内馬上千五百騎小人六千人合一萬五千之大將也皇家衰微之後ハ公家之大名此國司一人也

伊達日記云天正十四年澁川ニ我等居候處へ元日ニ二本松ヨリ晝時分乘懸候様ニ働候カ先へ馬上ニ騎歩者十人斗參陣場ノ末ニテ水汲候者トモヲ追同候處へ内ヨリ出合戰候二本松へノ海道ニ小山候テ柴立ニテ道一筋ヲ追候テ參候處ニ柴立ノ後ニ馬上百騎計足輕千餘ニテ備候衆ニ被押返道ハ勿論脇へモ被追散候

太閤記云中村與左衛門尉は匠作田同郷に生長し弓馬の二道をたしなみしものなれば馬上の弓五十騎付け備りしな

○寄合衆

久米田軍記云松永正 島山モ松永モ無勢ナレハ不叶已ニ難儀ニ及ヒケルヲ塚ノ會合衆トモ色々入テ島山方モ松永モ塚エ引入ケル會合ト申ハ塚ニハ能登屋トテ二人ノ福者アリ其外ニ會合衆トテ卅六人ノ庄官アリイツレモ富貴ナル徳人也

清須分限帳云御寄合衆四千石名倉金左衛門二千五百石荒川平右衛門千石富田主殿五百石大津久右衛門百石山本又六餘八十一人

賀越問諍記云加賀越中能登一景織之兵トモ安田岡田南條ノ殿原其外寄合衆鐵ヲソロヘテ引入タリ

東武實錄云寛永三年丙寅五月今度御上洛ニ依テ江戸ヨリ京都ニ至テ供奉ノ面々寄合衆三千石神尾刑部少輔千五百石大岡兵藏千五百石加藤伊織同心二千五百石岡部主水千五百石朝比奈彌太郎千石池田圖書千石肥田主水四百五十石大河内平十郎三千五百石渡邊吉衛門二千石瀧川左門五百石小阪勘兵衛森川庄九郎部屋住和田五助五百石本多百助

○歴々衆

○一旗衆

甲陽軍鑑末書云同年水十一月五日ニ甲府ヲ御立アリ右ノ境目へ御馬ヲ出サル、也北條家ノ歴々城ヲアケ悉敗軍スル此時境目ノ城九ツ信玄公攻落給ヒ深澤城ハ御カ、へ被成シトテ駒井右京ヲ指置ル、也新城湯澤足柄山中モ捨給フ也

○備持衆

初井日記云池上夜味方ニモ平林秀宗ノ陣三田肥後守中略ヲ始トシテ備持衆ハ餘多ニ候へハ分レ離レニ敵ノ引足ニ相應シテ追詰テ候程ニ陣足モ後ハ互ニ隔リ延テ引離レタルカ多ク候

初井日記云^{八水上}御先祖傳作州モ次第ニ背候故伊田安木ノ御一旗衆モ丹波ヘマイラレ候

○成アガリ

初井日記云源平以來代々ノ侍トモガシカモ近代ハ弓矢ヲネリコメテ手ノ内ニ握リ旗下ノ力ヲ入ストモ天下ヲ指南セントオモフホトノモノ他國ノナリアガリノ仕合モノ、家カサテハ衆徒坊主ノ弓矢カ國カスモチテモ公ケ學ヒスル家ノヤフニ思フ程ニ不覺ヲトリ申サレ候

○仕上者

初井日記云^{丹波守七頭七組}丹波士ト昔ヨリ云フモ一カタナラス物筋ノ家々ユヘニテ候信長モ假和キノ時人々ノ先祖ヲ一々聞カレ舌ヲマキ感心致サレ候此人モ先ソフ好マレ候トミヘ西國ノ別規惟任惟住ヲ我家ノ仕上者トモニ名調ル程ナルニ當家ニハ直傳ノ衆歷々アルユヘ我ヲ折申サレ候

武家名目抄稿第六十册

搞檢校保己一編

稱呼部 十四下

○案内者

將門純友東西軍記云武藏權守與世王ト云者將門ニ云ケルハ一國ヲカスムルモ阪東ヲ皆奪ヒトルモ其罪同シカルヘシト云ケレハ將門ケニモト同心シ即チ兵ヲヒキイテ下野國ニ攻入ル國司軍ヲ率シテコハミ防ク寄手ハ不知案内ナリ國司ノ勢ハ案内者ナレハ要害ニ懸テ挑戰フ

平家物語云^{宮土}大將軍權亮少將維盛阪東の案内者として長井齋藤別當實盛をめてや、實盛汝程の射手八ヶ國にはいか程有うと問ひ給云々

吾妻鏡云治承四年八月十七日丁酉北條殿招^{御對ニ定綱}云象隆後見提權守信遠在^{山木}北方勝勇士也與^{象隆}同時不誅戮者可^有事煩^歎各兄弟者可^以襲^{信遠}可^以令^付案内者云々

又云寶治元年六月一日壬午左親衛以^{近江}四郎左衛門尉氏信^爲御使^有被^仰遣^于若狹前司泰村^{之事}人不知

レ知^ニ其旨趣^ニ氏信向^ニ彼家^一先著^レ侍上^令案内^ニ内事^之由^ニ而第主相逢之程見^レ傍弓數十張征矢並鎧唐櫃棹數十本置^レ之氏信就^レ怪^ニ思^之令^ニ郎從友野太郎^{此所案}窺^レ館内^{之處}所^ニ積^ニ置^于厩^侍之鎧唐櫃假令百^三三十合歎^之由達^ニ于氏信^云

梅松論云三月朔日頼尙先陣を承て葦屋の津を御立有て宗像大宮司か宿所へ西の刻に御着ある(中略)其夜頼尙五十丁御先より葦尾濱といふ處に陣を取たりければ頼尙一人宗像の御陣へ召連て合戦の事仰談られけるに頼尙申けるは先度宰府の戦の事は頼尙以下は迎に參りたりし間無勢に依てうち負といへとも父の入道は國の案内者にて候間一身は定て無爲に候歎明日の合戦には國人等かならず御方へ來るへく候云々

又云さる程に京方の一法師道場坊阿闍梨有覺一徒千餘人を相語らひて國人案内者たるにこそ江州伊岐代官を俄に構て引籠る

太平記云^{主上御没}山城ノ國ノ住人深須入道松井藏人二人ハ此邊ノ案内者ナリケレハ山々峯々無^ニ殘所^ニ搜シケル間皇居隱^{ナク}被^ニ尋出^ニサセ給フ

又云^{吉野城}此山ノ案内者トテ一方へ被^レ向タリケル吉野

ノ執行岩菊丸己カ手ノ者ヲ呼寄申ケルハ東條ノ大將金澤右馬介殿ハ既ニ赤坂ノ城ヲ責落シテ金剛山へ被^レ向タリト聞ユ當山ノコト我等案内者タルニ依テ一方ヲ承テ向ヒタル甲斐モナク責落サテ數日ヲ送ルコトコソ遺恨ナレ又云^{船坂合}爰ニ備前國一宮ノ在應ニ美濃權介佐重ト云ケル者可^レ引方ナクシテ已ニ腹ヲ切ラントシケル屹ト思ヒ返ス事アツテ脱タル鎧ヲ取テ著捨タル馬ニ打乗テ向フ敵ノ中ヲ推分ケテ播磨ノ方ヘソ通りケル舟坂ヨリ打入ル大勢トモ是ハ何者ソト尋ネケレハ是ハ搦手ノ案内者仕ツル者ニテ候カ合戦ノ様ヲ委ク新田殿へ申入候也ト答ケレハ打合フ數萬ノ勢共目出候ト感シテ道ヲ開テソ通シケル又云^{宮吹峠}先一番ニ荒手案内者ナレハトテ甲斐源氏三千餘騎ニテ押寄タリ

又云^{兒島三郎熊}一手ニハ伊東大和守ヲ案内者トシテ頓宮六郎畑六郎左衛門當國ノ目代少納言範猷由良新左衛門小寺六郎三津澤山城權守以下態小勢ヲ勝テ三百餘騎向ラル其勢皆善ノ七寸ヲ紙ヲ以テ卷テ馬ノ舌根ヲ結ヒタリケル杉坂越ノ北三石ノ南ニ當テ鹿ノ渡ル道一アリ敵是ヲ知サリケルニヤ堀切タル處モナク逆木ノ一本ヲモ引カサリケリ

又云左近大夫角シテ四郎左近大夫入道ハ二心ナキ侍共ヲ呼寄テ我ハ思様有テ奥州ノ方ヘ落テ再ヒ天下ヲ覆ス計ヲ可同南部太郎伊達六郎二人ハ案内者ナレハ可召具ニ其外ノ人々ハ自害シテ屋形ニ火ヲカケ我ハ腹ヲ切テ燒死ケル體ヲ敵人可見ト宣ヒケレハ廿餘人ノ侍トモ一儀ニモ不レ及皆御定ニ可随ト申ケル

富樫記云寄手軍兵數萬人銘々ニ戴帖楯ニ入替々々責上ル城方ニハ槻橋一黨ヲ先トシテ三百餘人我先々々ト防キ戰フ寄手大勢被討ヲモ不云手負ヲモ不願防キ手ハ案内者此彼コノ迫々ニ寄合追立々々責戰フ云々

應仁別記云文明四壬辰八月二日夜島山右衛門佐勝龍寺ヨリ兵ヲ勝テ山崎天王山ヘ夜打ヲシケリ以案内者忍入ケルヲ遅ク聞付テ十二人討死シ生取ニナルモノモ多カリケリ云々

大内義隆記云麻生彌五郎宰人シテ豊後ニ居タリシヲ八郎殿ヘ案内者ノ使ニ遣スコトナレハヨロコヒス、ミ出テテソ調シケル

關八州古戰錄云南方勢金山斯テ小田原ヨリ新田館林足利ノ城々々責落スヘシトテ北條陸奥守氏照同姓安房守氏邦伊勢大和守多米主膳正大道寺友之助五千餘騎ニテ成田氏長

探天正十一年卯月廿日佐久間玄蕃助爲大將通餘吳之海馬手篠嶽置手當爲押寄中川瀨兵衛清秀陣取所之尾崎云々

別所長治記云或時山城守三宅治忠兩人軍評定ノ爲行秀吉ノ館ケルニ秀吉ノ曰ク長治西國ノ可案内者ト宣フニ付信長公ノ爲代官ト下向ス各ノ軍立ノ次第不日ニ擒敵スル謀計モヤアルト被問ケレハ三宅申テ曰ク西國發向ノ先手別所家ニ被仰付云々

又云信長ヘ以使申サルハ去七日秀吉西國爲征討ノ當國ヘ下向ス中國ノ先手ハ長治爲案内者毛利輝光ハ從元就二代領大國候上隆景元春名將ニテ候ヘハ一旦ノ合戰勝負難決云々

長曾我部元親百ヶ條云一御上使并御下代御下國之時馳走之儀可竭精魂御振舞送馬其外念ヲ入令奔走於抽餘人者可加褒美付其時案内者相添者申次第萬可氣道事

勢州四家記云永祿十年八月信長はしめて桑名表へ發向あり北方諸侍宇野邊産生以下隨之其後信長桶の城を攻楠降參し則鬼の案内者となる

十河物語云仙石ハ山傳ヒニ豊前ノ小倉ニ黒田官兵衛尉居

兄弟ヲ案内者トシテ金山ニ向ラル

太閤記云秀吉一命於敵稲田大炊助蜂須賀小六加治田隼人正尤なりと同し兼て賂をつかはし置ける敵方の在所へ案内者を請はやとて角といひやりければ賂を事とし利に耽ける者ともなれば即使者と打連來りぬ云々

又云能登國石動山井玄蕃允問佐久は利家前へ注進の返書待つとせし間に晩日に及ひしかは宿陣し其邊の者を近付け石動山の爲體委しく尋ねければ云々其夜も漸夜半過にもなりぬればはやおき出用意せよと云ひつ、昨夕の案内者呼集め先にも立又跡にも召連れまたほのくらきに荒山五六町こなたなる坂に參陣し物見のものをつかはし先手のやうすを侍居たり

又云松山城利家則令同心本丸二の丸以下請取三の丸には四人の者望のこしく妻子ともを入置先駈の勢に加へ案内者とし十九日氏政舍弟北條安房守氏邦が居城鉢形の城に押よせ仕寄をつけ弓鐵炮を打入時の聲天地もひく斗なり

柴田退治記云然柴田勝家者信孝御謀叛得力可取天下事勿論也(中略)幸惟今秀吉赴濃州之條其透先此表可打破彼謀叛人山路將監爲案内者敵行陣取之様子悉尋

ラレタル所へ落着扱元親方ヨリ薩摩衆へ專日寺ト谷忠兵衛ト使トシ其晩ニ云道シ信親死骸申請度トアリケレハ島津ヨリ御尤ニ候早々承候ハ、從是御死骸ヲクリ可申處ニ手前取紛レ左様ノ沙汰ニ不レ及失本意候トアリ案内者ヲ被相添心靜ニ尋出シ罪送ス

天正記云佐久間玄蕃かのむほんにん山路しやうけむを案内者として敵のかう陣これをとりのやうくたつねさくつて天正十八年四月廿日佐久間玄蕃介を大將として四方にわけしつかたけに手當をおき中川瀨兵衛尉清秀陣取所の尾さきにおしよする

播州征代記云天正七年九月十日西國住人生石中務少輔平島一介并紀州住人土橋平丞渡邊藤左衛門尉爲魁數萬騎乞案内者廻裡手越大村阪未明切崩塚柵凌嶮難處三木之士卒懸合先不レ入先兵糧攻上云々

東遷基業云神君下知したまひて此後も織田勢に打交て退く程ならば身方自由なるへからす縫路を取て歸陣すへしと處の案内しりたる者を召し先に立て木野を通り松原といふところに歸陣せられ身方の士卒今日の難儀を語りなぐさみ翌日早天に打立て久々子氣山といふ所をすきて若狭の西津に出小濱に至りたまふ御家人に和田嘉兵衛とい

ふもの元來當國の者なりしかは案内者にて萬事才覺なるものなるものなれば神君これに命せられ當所とも此騒動の節なれば油断すへきにあらす宿陣の場を見立よと有ける故向島の連興寺とて道場有此地四方に河水を帯て究竟の陣城なりければ嘉兵衛是をみたて、御止宿となしけり

○問之者今元

○水俣ノ者

安土日記云信玄堀江之城へ爲打廻相働候(中略)互二人數立合既ニ一戦ニ取向武田信玄水俣ノ者ト名付二三百人真先ニ彼等ニハツフテヲウタセ候

○白齒者

東遷基業云岡部か與方杉山惣藏千野十助松平康國か與方進藤三郎四郎等高名しぬ大久保甚怒て始より鳥居平岩を不頼柴田勢と一所に成て横合より戦は、真田父子の内登人は討取へきものを詮なき長談合に圖をほかしたる事の口惜さよと後悔し岡部松平か勢と一所になつて白齒の者にても打とれよと士卒を進るといへとも松平岡部か軍兵今朝よりの長迫合に疲れて進む事不叶云々

○悴者 加世者 悴侍

さかつて殿かり仕業を小幡又兵衛乗とつて二町斗の間に二騎引落して腕に薄手負たる争か人を討へきと申候へは熊江孫四郎と申悴者三人同の白羽織をつき落して主の又兵衛にうたせ候

又云諸侍大小悴者中間小者までもあまねく過分に思ひ存する様に仕事は大將の專一のことはさなるらん

又云板垣床机に腰かけて居たる處を此いつたうたい若黨中間十人斗つれちと味方の脇をまはりのりこみ己か被官の板垣武者出立を見知りたる者ありて即時に板垣とみてやりつけたるは安井いつたうたいか被官十人計の内に甚介千助左近丞と申三人の悴者なりさて板垣ころひたるところを頸取たるは尾州牢人上條織部と申者にて候

又云白畑といふものぬしかかせのものを折檻仕り此度の金の助かこしく追てゆく彼かせもの白畑か刀のうしろへさわるほとにて刀をぬきながら返してひさまついでかた手うちに拂白畑が兩腕をそへ頭共に一刀にて白畑助の丞被官にきりころさる、原美濃若かさかりおり合て長身の鎗をもつてつきころはす白畑か悴者ねなかもやりをたくり原美濃かうてを少々二ヶ所切美濃が事なれば少も去すつきつけて動さぬやふにいたすを多田淡路か立廻り先兩

應仁私記云痛敷者公家上臈家焼三四年落涙百千度所領者被武家取无濁名一分御大事及浮沈者給人被官人通世者得時出世此間被詰貧乏神高野笠様大疲勞計會悴侍加世者今俄求蟬子以好具足其身不思議時代也仍降參人參下手人參者臈病未練之事歟

馬具寸法記附録云就御參内一松永彈正少弼久秀より伊勢守貞孝へ被尋申一條々事(中略)かせ者兩人斗召れ候はん歟事無用候

宗吾大雙紙云公方様御馬にて近所へ御成の時は御劔の人馬上にて右の手御劔を御持候遠所なれば御劔を右に御はき候又御輿の時は御劔御こしに入候又大名衆も輿の時は太刀をこしに被入候其外は馬のきわに中間太刀をかたけて左の方を歩み候悴者など主の太刀をはき候て馬のそはに走候事はなく候下馬候へは人によりて中間かせ者に太刀を渡被持候

加越國譯記云織田信長殿江州北郡虎御前山掃城條池田隼人助信長方へ内通仕ケルハ今夜此方ノ城中ニ火ノ手ヲ揚ヘシ其火ヲ相圖ニ大ツクノ城ヘ相向ヒ候ヘトテ譜代ノ加世者ヲ遣シケレハ彼者敵方ヘハ行カスシテ義景ニコノムネコトコトク訴云々

腕をきり其後と、めをさす後た、してさいてあれは右の白畑か若黨ふか島の松本備前守か外戚腹の孫なりときく此白畑大剛の者なれば賤しみ過ぎし内の若黨に切りころさる、

與羽永慶軍記云松浦五郎被討 叔父九郎條元來九郎時節ヲ不違相待シコトナレハ五郎ハカ、ルコトノ有ルヘキトハ夢ニモ不

知小具足ノ上ニ麻ノ羽織ヲ着菅ノ笠ヲ冠リ味爽ニ出立タル若黨二十餘人中間悴者以上五十人ニテ通ル所ニ云々

又云武藏國河守 松野カ手ノ者侍足輕中間悴者迄四五十人ツツキケリ寄手ノ先テニ延澤能登守カ郎等行澤式部有地但馬原原石見中村六郎飯坂山十郎ヲ先トシテ二百人川中迄我先ニトカケ向ヒ鍵先ヲ揃ヘテタ、カヒシカ松野ヲ始テ一人モ不殘討レニケリ

初井日記云丹波勢 業光光村是コソ願フ所ナリ今夜ノ最期ニ彼等カ首ヲ一々ネテ物ニシテ冥途ノミヤケニシテ行ヘキヲカセ者ト見ハ一太刀切ニシテ拔出ヨ大將物司ヲヨリ物ニシテ組テ討取レ云々

本願ハ此時ノ大將分ト見ハ只組テ刺違ヘヨ葉侍カセ者ニ目ヲ付ナ足マトハレハ蹴殺シテ通ルヘシ

難波戰記云 有樂修理が使 參案白山條 織田有樂大野修理彼使者ヲ開所ニ

招テ兩御所御和睦ノ事慮實計難シ汝等見及フ所如何ソヤト尋ケル有樂カ家人村田吉藏ハ其慮實難シ知ント申ス大

野カ家人米村權右衛門ハ愚慮ノ見ル所ハ眞實カト申ス有樂修理其故ヲ問フ米村聞テ御使トシテ兩人本多カ宅ニ參

ル所ニ則御前ニ召出サレ御座近ク參リ御口上ノ趣ヲ直ニ承ル眞實ナクンハ何トシテ吾々如キノ小忤ヲ御前ニ召出

サレ直ノ御返事承リ候シヤ之ヲ以テ御眞實カト存ル由申ケル云々

○葉者

初井日記云 氷上宗貞 合戰條 御本備ヨリ諸手ノ侍司物司ノ歷々六十

七人宗徒ノ侍百卅餘人大剛ノ名字ノ侍三百五十餘人大勇

ヲフルマフテ戸ヲ軍門ニ曝シ名ヲ末代ノ後記ニ止メテハ候コノ外葉者トモノ討死千餘人ニオヨヒテ候

○輕者今元

○下部

保元物語云舍人男申ケルハ年來ノ御情ハサルコトニテ實ニ兵ノ合戰ノ場ニ出テ、歸ルヘシトヤ思フヘキ下薦ナレ

ケルハ暫ク楚忽ノコトナ仕給ヒソ今ハ是程ニ力盡キ喉乾テ渡レヌレハ思フ敵ニ相逢シ事難シ有シ名モナキ人ノ中間下部共ニ被レ虜テ耻ヲ曝サント可ニ心憂

又云 將平部 將條 同日ノ夜半計ニ楠判官下部共ニ燒松ヲ二三千燃シ連サセテ小原鞍馬ノ方ヘソ下シケル

伯耆卷云基長義行矢合の鏑矢を以て武者二騎射落す(中略)楯も物具もたまらねは射殺さる、者數不ノ知か、る處にある下部内裏へ參て申けるは搦手の軍は御方計勝候

大手の軍は敵強候と申主上此事被レ聞食て御騒有ければ長高申けるは何事か候へき基長義行等か候程は無レ左右一破られ候事不可有と事もなけにを申ける

又云基長宣ひけるは向敵をこそきれ逃る敵をは切る事有まし聽て御方に可レ參者共をさのみ罪な作を留れ人々と制し給へは各下知にを隨ひける討取首級已上百五十餘人手負不レ知ニ其數ニ八幡の御守りありける故とを思はれける御方には下部二三人討れたるにて手負たにもなかりけれ

豐鑑云或時毛利家の軍より野伏を伏て馬草とる下部を討ぬれば秀吉の兵とも物の具もしめあへすをり合て野伏ともをまた討けり

ハ證人ニ立ナント仰ラレ候カ口惜候者哉何クマテモ御供スヘシ又生タリ共從者ヲ證人ニ立給ハ、叶フヘキコトカ先其命ヲ捨テ見セ奉ラント云ヒテ長刀ヲ打振り邸殿ノ下部ノ中へ走入其後ハ又モ見エヌ

吾妻鏡云文治元年十二月七日丙辰雜色濱四郎爲ニ御使一

帶下院奏折紙狀并被レ獻ニ右府ニ御書等上洛左典厩下部黒法師丸爲ニ京都案内者被レ相副之

又云康元元年正月十二日甲辰卯時尅於ニ相州贊殿下部男一人寢死可レ爲ニ卅箇日穢ニ云々

梅松論云五月十七日に下御所の御陣備中の河原と備前の兒島の間三里下御所より御使有當手には備中備後安藝周防長門大將守護人國人等并三浦介美作國より昨日馳參す

(中路)去程に翌日十八日觀音懺法行はれ滿散過て當所の景物楊梅取に上の山に登ける下部馳下て云既に御方の大勢福山を賣落して飛入て火を放間敵皆落行よし申上たり

太平記云 陶山小見 山夜討條 各屏ヲ上リ越夜廻リノ通リケル跡ニ付テ先城ノ中ノ案内ヲソ見タリケル北ノ口一方ハ嶮キヲ被レ憑ケルニヤ警固ノ兵ヲハ一人モ不レ被レ置只云甲斐ナケ

ナル下部共ニ三人櫓ノ下ニ薦ヲ張箒ヲ燒テ眠居タリ

又云 赤坂合 版條 平野將監入道高橋ヨリ走下リ袖ヲヒカヘテ云

聚樂物語云當時關白秀次公は伯父太閤の御威光にて下部の身として又なき官位をけかしなから天命をも恐れず人の嘲をもはち給はず明暮酒宴亂舞をなしあまつさへ北山

西山邊にて鷹狩鹿狩を初民の煩ひ諸人の苦をも厭はず我意に任て振舞給ふなり

○走下部

ますか、み秋の見山の巻に云正中元年といふ彌生の廿日あまりいはし水の社に行幸したまふ上達部殿上人いみしき、よらをつくせる別當左兵衛督すけあきはしりしも

へとかやいふもの八人たはみな白かねをのへたるにやとみゆるに鶴の丸をきにかきたるたのもしうきよけ也

太平記云 天龍寺 供養條 此上ハ武家ノ沙汰トシテ當日ノ供養ヲハ執行ヒ翌日ニ御幸可レ有トテ同八月廿九日將軍並ニ左兵衛督路次ノ行粧ヲ調テ天龍寺へ參詣セラレケリ(中路)已

ニ寺門ニ至リシカハ佐々木佐渡判官秀綱檢非違使ニテ黒袴着セル走下部水干直垂金銀ヲ展タル如木ノ雜色聚ニ胃

タレ若黨三百餘人胡床布衣ノ上ニ列居シテ山門ヲ警固ス

○下男

伊勢貞助雜記云御小者を人體により御小人とも申哉御小

人共可申平人も其心得あるへし同御下部を御下男と申も同前公家方にては下男を仕丁と可申同笠持をは白丁と可申候

安土日記云三位中將殿御父子其外歴々御腹メサセ候御沙汰有之(中略)御下男衆京ヨリ逃下

○下手

吾妻鏡云養和元年七月廿日甲午鶴岡若宮寶殿上棟社頭東方構假屋武衛着御御家人等候其南北工匠賜御馬而可引大工馬之旨被仰源九郎主之處折節可引下手者之由被申之

沙石集云わかき下手男今年十一月十五日俄に兩目共に盲れてけり心うく覺ければ神宮寺にさんろうしてやく師如來にきねんす

○相傳下人

平治物語云小舟一艘たつねいたし左馬のかみ殿ひらかの四郎かまた兵衛こんわう九四人の人々をのせ奉り上にはしは木をつみけんくはう一人さほさしてくいせ川をそ下しける(中略)海上を経ておはりの國ちたのこほりうつみへそつき給ふおさたのしやうした、むねと申はさうてんの下人なり鎌田かためにはしうとなり一方ならぬよしみ

にておさたか宿所に入給ふ

又云爰ニ鎌田カ下人八町次郎トテ大カノ剛者早足ノ手キ、アリ馬ニテコソ具スヘケレトモ中々徒立ヨカルヘシ高名セヨト云ケレハ一年モ腹巻ニ小具足差固メテ真先ニ進タリケルカ敵ノ馬武者ノ遙ニ先立テ落ケルヲ八町カ内ニテ追ツメテ首ヲ取リタリケレハソレヨリシテ八町次郎トソ云ケル

吾妻鏡云文治四年三月十九日乙卯遠江守義定使者參着於當國所領令下人等引用水之處近隣熊野山領住民等相支之間起鬪亂相互及及傷仍彼是擄進之云々而熊野山定申子細歎其程稱可被召置被返遣之云々

承久軍物語云たけたの七郎はむまはきられぬのりかへはなしいか、せんと四方をきつとみまはしければ敵味方のり捨たるはなれ馬いくらもある中にあしけの馬のたくましきか出きたりけるを下人引てのせたりける

後愚昧記云應安四年四月四日犬神人寄來數十人知惠光院被騷云々尋事子細處佐川下人死人等川原者取弄之取衣裳之間犬神人等稱可管領之取返川原者所取之衣裳可賜之由謹責知惠光院可及放火之由稱之云々

應永記云山名民部少輔兄弟二人ハ一足モ不_レ退敵ノ中ヘ

エイヤ聲ヲ上テ切テ入(中略)義弘入道其日ハ白綾綴ノ腹

巻ニ年來秘藏ト聞ヘタル鶴毛ノ馬ニ金覆輪ノ鞍オキテソ

乗タリケル胃ヲハ態ト不着シテ下人ニコレヲ持セタリ

東寺文書云一預置犯科人於百姓等由事右地頭下人勸當

之時預置百姓之間有_二其煩之由教念申之者子細同前

明德記云二度目ノ合戦ニ五人ハ所々ニテ思々ニ討死ス九

郎一人死ニ殘リ誓約五人見エサリケレハ走り廻テ尋ヨト

ツレタル下人ニ云ヒケレハ家喜カ中間申ケルハ只今山口

殿ノ御下部ノ申候ツルハ昨日八幡ニテノ御契約ノ人々コ

ノ五人一所ニテ討レ給ヒツレト泣々嗟峨ノ方ヘ走り候ツ

ルト申ケレハ云々

鎌倉大雙紙云爰に古持氏の御供に討死しける里見刑部少

輔家基か子左馬介義實は房州より打出上總半國を押領し

鎌倉へ参り結城氏朝か息男中務大夫重朝は父討死の時三

歳にて家臣多賀谷彦次郎懷中に懷之常陸の佐竹に落行隠

れるたりけるか時をえて打て出て結城へ歸り普代の下人

を催し近郷をこしくくうちしたかへ鎌倉へ参りければ

成氏大によろこひ則成朝と改名して近習に被召仕けり

中原高忠軍陣聞書云はたさしは幡さ、ぬときは弓を持ぬ

なり矢はかりぬきて持なり弓を下人にもたするなり

高忠聞書云下人にうつほつけさせて弓持すへき様の事弓

をたて、つるをさきへなしてにぎりより下を右の手に持

すへしかたにかつきて持すへし馬よりさき右の方に持す

へし又馬のあとにもたするなり

家中竹馬記云馬上にてゆかけさ、ぬはちかき處へ御供な

との時の義なりさなき時はさすへし其謂は馬上にて弓を

持ぬ事は有間敷事なり縦われ持ぬ時も下人に弓うつほを

付さすへき間何時も取て可射様にゆかけさすなり

又云下人うつほを付弓を可持様にきりより下を右の手

に持て弦を前へ向て弓を引たて、かつく也

又云主人或は異なる賞翫の人す足にて馬に召處へ我も馬

に乗て出んと沓を着たらは馬上にて沓を脱て下人等に可

渡輩の人なれば何とて御沓を召れぬぞと、禮を云ひ

て脱には及はぬ事なり

土岐家聞書云鞭はくま柳本式也黒く塗てらふ色をとりと

つかをすへし緒は紫皮若は黒皮も子細なし竹根の鞭是も

とつかをして持へしとつかのなきは何も略儀なり馬上に

うつほ付ては必鞭を指也うつほ付ぬときも下人にさ、す

へし馬には必鞭を用へき事の有へき故なり

○夫丸

奥羽永慶軍記云 三好徳川兩將陸奥暫留留條 氏郷川ヲ渡ラントセシニ蛙ノ魚多ク川上ニノホル是ヲ一見セラレケルニ糠部ヨリ催シ來ニケル千人ノ夫丸ノ中ニサアリケナル男アリケル進ミ出テ狂歌ヲナン讀ニケリ昨日立今日キテ見レハ衣川彌ノ綻ヒサケノホルラン氏郷是ヲ聞タマヒテヤサシクモ仕タル者カナト返々モ感セラレテ千人夫ヲ許シ褒美ヲソ給リケル

雜兵物語云幕や幕の様なものまで中間夫丸迄能あつて短くいひよい物をさすへいもんだ

武家名目抄稿第六十一册

塙檢校保己一編

稱呼部 十五上

○頭

奥州後三年記云昔頼義貞任をせめし時武則一家をふるひて當國へ越來て桑原郡營の岡にして諸陣の押領使をさためて軍をと、のへし時この秀武は三陣の頭にさためたりし人なり

太平記西源院本云 本問孫四郎 尊氏御方ニ誰カ此矢射返スヘキ者ヤアル東頭四十餘頭九國三十餘頭其外中國四國北國ノ輩大略殘少クソソ相隨ラメ此内ニ此矢射ル程ノ者ナトカ無ルヘキ射返シ候ヘト仰ラレケレハ云々

官地論云政親祖父泰高奉仰當國之守護職一問引率家子郎等其外諸勢都合二千餘騎野市大乘寺取陣鳥越吉藤磯部木越彼四頭衆寄合々々會議

大友與廢記云 肥後國一豊後國 守大友左兵衛督義統清正の加勢として肥州小國といふところに一城をとり當手にかかしらつ、こめをかる、

又云 薩州勢府内 さるほとに刑部思慮ふかき者にて一旦かくあるといふともつぬに落城せん事案の内と末をはかり中書方へ使者出し武士こ、ろさし一旦の勇氣に御人數を些損し申候事おそれ入候今より以後野心あるましく候聞しめし分られ一かしら我等居城に籠をかれ候は、萬事御下知次第たるへく候

矢島十二頭記云出羽國由理中大將十二頭とは矢島殿仁賀保殿赤津殿瀧保殿打越殿下村殿哥米殿石澤殿瀧澤殿香澤殿子吉殿鮎川殿是を十二頭と申候此内仁賀保殿は本身也是も小笠原家なり矢島殿御一家なり矢島殿と鮎川殿とも御縁類なり仁賀保殿先祖信濃國より初て御下り被成候を大和守殿と申候御嫡男をも後大和守殿と申候是を則小和州殿と申候

和井日記云 桂川合戦條 氷上殿聞召サレサラハ信長カ宗徒ノ者トモニ手コリサセ重テノツラ出シノナラヌヤウニ致スヘシ又ハ隣國ナレハ信長不意ニ押懸ンモシラストテ七頭ノ内ニハ荒木山城守氏綱江田兵庫頭行範小林修理進重範七組ノ内ニハ須知主水景氏足立右近光長酒井佐渡守重貞云

○頭分

大岡記云 前田又左衛門尉利家未森之城後攻之條 利家翌日滯留有て佐々家中の與頭之首十二秀吉卿へ持せ進られければ開喜悦之眉旨其書簡曰今度佐々内藏助企謀叛(中略)其方早速爲後攻一致出勢佐々内頭分首十二到來當家無二の忠義大慶甚深之至候云々

又云從小田原頭分之士山中へ三人遣事山中の城主として松田兵衛大夫數年有しかとも今度上方勢を可相防最初なるに因て北條左衛門大夫爲宮豊前守朝倉能登守を加勢として可差越の旨從舊冬の事にて有しかは云々

○大頭

甲陽軍鑑末書云諸軍人衆百五十騎五十騎ハ五味與三兵衛ニ付五味ハ越後者大剛武士也五十騎ハ飯尾彌四右衛門ニ付飯尾ハ遠州者大剛武士也五十騎ハ繩無理助ニ付繩ハ關東軍人大剛武士也右頭與共ニ百五十三騎武田兵庫殿ヲ大頭ニ被成陣取ハ三所ニカクル也

又云凡五十騎ノ備ハ二十五騎宛ニツニ分テ右ヲ先トシテ小頭ニ下知ヲナサセ左ヲ二トシテ大頭下知スヘシ懸ニモ退ニモヨシ但是ハ小迫合ノ時ノ事ナリ備ニ步者多キ時ハ道具間遠フシテ勝負危シ心得ヘシ

○小頭

○大頭甲陽軍鑑末書次ノ條ニ併出ス

○組衆
甲陽軍鑑云西面遠州三州江之御先山縣三郎兵衛手前三百騎甲州信濃同心候に此組衆朝比奈駿河守松尾大熊相木奥平美作守菅沼新三郎長篠三浦右馬助三浦兵部孕石主水きところ道齋合九百八十騎但組衆は遠陣の時は半役也

武蔭叢話云大坂冬御陣に蜂須賀阿波守玉鎮陣へ塙團右衛門夜討を致(中略)翌年四月廿九日泉州樫井合戦に淺野内田子助左衛門龜田大隅守米新左衛門樫井半左衛門など、戦ひそこにて討死首は米に取らる、其組衆死骸を埋たる塚樫井町の北の端に在云々

又云眞田左衛門佐信賀は父安房守昌幸と高野山九度山へ配せられ父昌幸は慶長の末に彼地にて病死なり左衛門佐は獨り住居せしか大坂御陣の初秀頼公より大野修理大夫治長承にて御頼申(中略)秀頼公より速水甲斐守守之御使として遠方早速馳參る條御満足にをほしめす由旅宿不自由に有へきとして黄金貳百枚銀三拾貫目下されたり組勢與力の事は重て仰付らるへしと有しかは修理玄關の侍とも與をきやしけり

松隣夜話云天正三年北城伊豆守直江山城守七組衆謙信公

へ申上テ曰信玄死去ノ後甲州サタチ長坂長閑跡部大炊ト云兩人ノ者致三口入ニ依テ勝頼ト家老ノ間不和ニナリ度々備相違ヒ鈍向微弱ニ成ト相見え候云々

又云信玄十一備ノ内飯富組穴山組ヲ以テハ越後勢最初ニ掛ルニ組柿崎和泉川田豊前ヲ切崩ス殘ル九組ハ信玄旗下トモニ惣敗軍ナリ謙信跡備ノ内中條五郎右衛門長尾小四郎本城清七加治内匠直江山城五備ヲ以テ廣瀬マテ追討ニシテ典厩并山本道鬼諸角豊後守等數輩ヲ討取ル

○小組衆
樫井日記云粟田口合戦條蜂屋明智瀧川信孝カ陣ハ必死ト見えテ居ルニ教業右山ヨリ谷々ニ伏隠ノマタ殘リ申ヲ見候テ小組衆ヲカケテ落シカケ所々ノ伏トモヲ討出ケル

○旗頭
太平記云尾張小河其様ヲ見ニ五百騎ニ足ヌ佐々木カ勢可レ叶トハ見サリケレサレト佐々木判官入道其氣勇健ナル者ナリケレハ此軍天下ノ勝負ヲ計ルノミニ非ス今日打負ナハ弓矢ノ名ヲ可レ失トテ僅ノ勢ヲ數々ニ成テハ叶マシトテ目賀田檜崎儀平井赤一揆ヲ旗頭ニテ河端ニ傍テ控ヘタリ云々

應仁略記云五月廿六日細川より山名方へ押寄たり上は山

名方前下は一條村雲の橋前後兩三ヶ所の合戦也與力々々の大名二つに分れ家々の分國より上り集まる軍勢たかひの旗頭花を折たる見物には早時刻到來と見えたり

蒲生氏郷記云氏郷馬ヲ早メ城際得乗付馬廻小性モ本丸へ掛リ即刻責ヤフレト下知シテ自身本丸得カケ入ル、程ニナシカハタマルヘク責ヲトス扱跡備三組ニハ跡へ旗頭ヲ成三段ニ人數ヲ立候へ唯今正宗押來事可有之間油斷スナト下知セラル、

蘆名家記云天正十三年ヨリ同十五年迄伊達政宗卿仙道ヲ攻タマフ大森ノ城ヲ始トシテ城數八ヶ所責落シ押領シタマフ然レトモ二本松右京亮吉次仙道旗頭トシテ城ヲ堅ク守リ候故此城ハ落城セス云々

奥羽永慶軍記云樽原夜討事付猪苗代條盛國喜ヒテ此上ハ會津ヲ滅シ正宗ノ手ニ入レテ過分ノ祿ニ預ランコトヲ思ヒ己カ嫡子盛胤ヲ招キ此由ヲ内談ス盛胤聞テ仰ハサルコトニ候ヘトモ譜代ノ臣トシテ逆心ヲ起シ他ノ恩賞ヲ請サセ給フトモ子孫繁昌タルヘク候ハス私ニヲイテ御同意叶ヒ候マシト云盛國重テ云ケルハ汝若輩ノ身トシテ前後ノ辨ナキ故ナリ先我々先祖ヨリ蘆名ノ臣ニアラス不肖ノ身ナレハ蘆名殿ヲ旗頭ト頼ミシニ盛氏ノ代ヨリ郎等ノ如クニハナレリ

又云大島與兵衛尉心聲條義光聞タマヒテ御邊ノ云所左コソ有ランスラメ我國中ノ旗頭タルニ滿安事父カ遺跡ヲ取テモ遂ニ不來ハ我未タ對面セスヨシヨシ忻テ招寄セ討ントソ云レケル

樫井日記云元來丹後但馬ナトハ邪欲ノ不義者トモノ風儀モ多ク候ヘハ密々ニ同意ノ色ノ者モ見エ織田カ家風ヲ羨ミ申ス者ノ風説モ候仍テ兩國ノ内ニ松田ニモ小田垣ニモ少々下知ヲカルシメ申ス色ノ者モアルト松田小田垣等注進ニテ候ユエ伏谷美濃殿紹田左馬助殿澁谷因幡殿ニ西方衆小野木縫殿之助谷大膳雲林院式部足立荻野等ノ歷々衆參ラレ御成敗ノセンサクヲ遂ケラレ候ニ兩國ノ旗頭トモ色々ノ申ワケノ所謂ノ候テ神文ヲ奉リ人質等ヲ丈夫ニ出シテ候

又云小田垣但馬守ハ仁木殿トハ縁者ノ兄弟ニテ候其外ニモ當家御一族旗頭衆へ縁族モ多候ユヘ松田小田垣ハ威モ強ク兩國ノ旗頭ニ下知ニモル、者ナク候(中略)又數ヶ所ノ岩城トモノ候ユエ常々ハ八上氷上兩御館ノ衆ニ旗頭衆ヲ加番トシテ替々ニ在番ノ候

東遷基業云神君參川を平均したまひし後三州の將士を二つに分けたまへり酒井忠次石川家成を旗頭とし西參河の

諸將松平貞乘松平三藏島田平藏松平信一松平宮内酒井正親内藤金一郎平岩親吉鈴木喜三郎小原越中守等を家成に屬せらる

又云家成に懸川城を賜はりし後は其甥石川數正に旗頭職を命せられ家成大久保忠世大須賀康高松平忠次等は兩旗には屬せず常に遊軍となる

増補家忠日記云天正十八年五月十九日寄手ノ軍勢岩付ノ城ヲ圍ム此城ハ太田十郎氏房カ城ナリ氏房ハ小田原ノ城ニ在テ其臣伊達與兵衛尉ヲシテ本城ヲ守ラシム(中略)鳥井元忠平岩親吉本多忠政各一所ニ集リ進テ士卒ヲ指揮シテ勇ヲ勵ス本多忠勝カ兵三宅理兵衛尉鈴木九左衛門尉各旗 忠勝カ旗ヲ本城ニ抛入ル

○旗子
粗井日記云 毛利家與丹波家別所就手 毛利家ヨリハワガハタシタノ仕形ニ指南アルトテ國衆カ色々申テ候當家ヲサヘ何ソノツイテニハ旗下ノ様ニモ一旗子方ノヤウニモイタシナス方ナルヲ當家ノ旗頭衆ガスコシモトリアヒ申サス候ユエトカク天下ヲハ丹波家カ指南スル分別云々

○采配頭
關八州古戦録云 北城丹後 長園初彌五郎ト號ス大剛ノ者ニテ

表へうち出たるよしきこゆにくさふるまひ天爵をまねくところなりいそぎいてむかへて一々に首をはね見こりのためくひを獄門に切かけよと親氏か與付の外に一千餘の兵をさしそへらる

又云 關州白井 仁王庄口に切通しといふところ有岩をうかつて一すちのみち有此口へもさつしうの一勢出むかふ此口はよしをか甚吉出むかふ其手勢百八十餘人組付かれ是三百餘人出むかひまつ足輕鐵炮を打かけたかひにはうせんす

見聞雜錄云此間信玄公云中城御逗留有清水にも關東北條家の海賊衆の上りて不攻落様にとて是も馬場美濃守繩張にて城出來する江尻城代には山縣三郎兵衛被仰付二手勢組付三百騎都合二千百人

武蔭叢話云小田原陣の初蒲生氏郷の攻口は井細田口にて岩槻の城主太田十郎氏房持口なり(中略)氏房は廣澤兵庫頭秀信を呼夜討致へき旨に知らせらる(中略)氏郷自身かけ付て廣澤と鐘を初廣澤か組付の侍内田大八安納彦内押續き鐘を合候云々

又云佐竹右京大夫義宣家老車野丹波守はかくれなき武邊の侍火の車の差物なり白き四幅掛四半に火の車を背てさ

輝虎死去ノ後モ三郎景虎ノ采配頭ト成テ越後府内ノ城ニ楯籠テ云々

○陣頭
關八州古戦録云 北條美濃守氏 北條左衛門佐氏忠同姓左衛門大夫氏勝太田十郎氏房ヲ陣頭トシ二萬餘騎ニテ館林ニ押詰凡一旬餘リ攻ラレケル

○組頭
會津四家合考云 氏郷與政宗 氏郷自政宗ノ陣吉岡へ行カレケルカ始テノ參會ト云ヒ殊ニ此コロ彼人野心ノ企アルノ由沙汰シタル上ナレハ就中無心元一思ヒ組頭武頭近習ノ者ニ至ル迄皆次ノ座ニ伺候ス

甲陽軍鑑云組頭にても組子にてもなき人數持跡部大炊助騎馬三百騎原軍人佐百二十騎

○組付
大友與廢記云 原田親種と云フ新助はその夜野陣をとりか、りをたかせ味方の高名または手負死人の着到をつけさせるにうちのさふらひ五人又くみ付のさむらひ二三人みえす云々

又云 井田次郎種實此體を聞て井田左馬助親之か嫡男井田次郎親氏を呼ていひけるは道雪紹雲か手の者難人原大白寺

す關ヶ原御陣過て佐竹義宣を出羽國秋田へ流人同前にてつかはさる時佐竹か城請取として本多佐渡守正信伊奈備前長谷川七左衛門つかはさる云々佐竹家老車野丹波守父子三人組付六騎悉甲にて城中へかけ入候所を大手門外にて本多佐渡守伊奈長谷川多勢にて生捕磔に掛けける火の車の差物は磔柱にく、り付さらしける去ながら家康公も内々は御感涙を流され御譽候ひつるとかや

○組子
義光物語云 庄内退 戸井半左衛門と云者前に敵ありとも思はぬけしきにてこはいかにおくれたるもの共哉とて大音聲を揚げ士卒の機をはけまし眞先に駆向は戸井うたすな半左衛門うたすなとて下か組子五百餘人をめき叫て駆入たり

蒲生氏郷記云忠右衛門カ内谷崎三十郎モ眞先掛テ鐘班ヲ被ル其内岡部内記與ノ者氏郷下知ニテ遣ス松尾小才治山田十大夫ナト掛入高名ス

○組足
敦盛草紙云そもく此たひ平家一のたにのかつせんに御一もんさふらひ大將をうして以上十六人のくみあしのそのなかにも、あはれをと、めしはしやうこくの御をと

とつねもりの御子息にむくわんの大夫あつもりにてもの
のあはれをと、めたり

○先組

義直卿難波行記云小笠原和泉先組雨宮孫左衛門松井五兵衛
衛徳田勘兵衛淺岡彌五右衛門富永清大夫

○先衆

甲陽軍鑑云河中島にて合戦巳刻の末に終同午の刻に輝虎
後備廿數近江守と申者千はかりの人数を謙信龍の丸備に
作り少も噪す如何にも静にのくをいくつされたる越後勢
又直江かこにた奉行の人数信立方のさき衆にうちあま
れたる者も大略此廿數に付越後の方へのく

増袖家忠日記云慶長十年八月廿六日台徳院殿將軍宣下ノ
拜賀トシテ車ニ駕シテ朝ニ入給フ行列三番御先行右長刀
小者同侍青山常陸介忠成左長刀小者同侍板倉伊賀守勝重云々

○先方衆

甲陽軍鑑云遠州三州先方衆天野宮内右衛門百騎奥平美作
守百五十騎菅沼新三郎四十騎長篠井騎飛騨先方衆江間常
陸守百五十騎越中先方衆椎名百七十騎同甚左衛門是は五
馬場美濃守が武藏先方衆永井豊前守八十騎小幡三河守百騎
奥力に付也關八州古戦録云關川一益武關川左近將監後岡平右衛門トオ

一柳譜云江州長濱ヲ信長公ヨリ藤吉郎殿へ被遣候へハ
其時近年淺井取合之刻高名之衆ヲ御穿鑿ニテ市助様御高
名淺カラストノ御意ニテ則黃纒ヲ被預ソレヨリ黃纒ノ
衆ニ御成被成候

太閤記云山中之城城主松田兵衛大夫加勢の間宮豊前守もは
や成ましきと思ひけん切腹せしかは彌渡邊手勢の溢者
共得たりかしこしと噂と乘入候てこそ其丸も落去してけ
れか、る處に黃母衣之衆三騎見え來り渡邊に詞をかけ今
日出丸より本丸までのはたらき誰先をあらそふともみえ
す一人の手柄去とはと感しあへりき

關八州古戦録云太田十郎飛騨守モ胸板ノ下ニ三四ヶ所鎗疵
ヲオヒ十文字ノ鎗ノ柄に五ヶ所マテ切込レ鎗尾ノ首鏝ニ
モ矢二筋ヲ射立ラレシ良々烈シキ執合ナリ此事秀吉公ノ
本陣エモ相聞ヘシカハ軍使トシテ黃母衣衆再三馳來テ委
細見聞ノ趣ヲ達シケレハ殿下モ氏郷ノ働ヲ感セラレ日頃
所望有シ三階笠ノ馬標ヲモ翌日免許シタマヒケリ

武蔭叢話云小田原陣の初蒲生氏郷の攻るは太田十郎氏房
持口なり(中略)合戦の内に秀吉公より黃母衣の衆間もな
く御使に下され候氏郷も胸板鏝の下第四ヶ所鏝疵あり鎗
尾の甲に矢二筋折かけ十文字の柄にも五所切込有秀吉公

ナシク施探テ下知ヲナシ二時許相戦ヒ鉢形勢打負テ右往
左往ニ崩レ退ク上州ノ先方衆競ヒ懸テ坂東道四五里カ程
遂討ニシケルマ、秩父麻羅榛澤ノ兵保坂石山ヲ始トシテ
二百六十餘人見ルカ間ニ討死シ其外半死半生ノ者數ヲ知
ス

○前方衆

甲陽軍鑑云國三ヶ國をも持給ふ大將の中に奉公人其色々
多し一に譜代衆大身小身共に二に前方衆大身小身共に三
には前方衆の中に忠節人大身小身共に四に降參の侍是は
大身斗にあり小身共は皆前方衆と申候如し此の儀國持大
將よその國を一ツも二ツも或三切取て仕置の時我譜代の
衆斗にてもならねは其國の侍を様子品々によりか、へ給
ふ時の事也

又云第一に信立公御家にて信濃に眞田上野に小幡越後よ
り來る大熊是三人は宰人の大身として信立公御取立也此内
眞田小幡は前方の取立衆と申さん子細は信濃上野信立公
御手に入ほとに如此大熊は宰人とりたてなり

加藤家軍詞條云前方衆トハ他國ヲ切取其國ノ士ヲカ、フ
ルヲ云

○黃纒衆

御威にたへす氏郷を御前に召御威狀に金の三階笠の馬印
を御免成さる

武家名目抄稿第六十二册

塙檢校保己一編

稱呼部十五下

○寄親

小田原所領役帳云二拾貫文江平塚之内西原平塚藤右衛門大普請之時半役寄親庭頭と可致之人數着到如高辻雄田新三郎廿五貫八百三十文内六郷連沼二貫八百五十文河崎内萬秀院方以上廿八貫六百八十文時可致之人數着到如高辻出陣は御免

又云六貫五百文吉見黒岩郷野介小守七郎左衛門二十貫文四郷飯田内桑原分芝田彦八郎大普請之時寄親書出役庭次請取可致之出殘着到同理

元親百ヶ條云寄親其外物頭之申儀每事大層存毛頭不可及異儀事

甲陽軍鑑云無意越嫌寄親一事自由之至也於如然族者自今以後理不盡之儀定出來歟但寄親非分無際限者以解狀可訴訟

甲陽軍鑑末書云何モ寄親組頭備頭ノ下知ヲ背ハ逆心同意

分ノ儀ハ云ニ不及一座ヲ仕廻長州ヲヨキツカイニ同道シテ歸リ給ヒシ也

○寄子

新式目追加云所當公事對捍上置事右支配寄子等之處對捍之間惣領勤入之訴申之時有沙汰或以一倍令辨償之或依時儀雖被裁許所詮於前々分者以一倍可致辨自今以後者未濟之條無所遁者以彼所領可被分付惣領但惣領寄事於左右致煩者可被仰付穩便之輩也依仰執達如件弘安七年十月廿二日左馬權頭平朝臣陸奥守平朝臣

蟻庭田屋親保此三人上洛各御樽一荷鞆十進上之御對面

政所賦銘引付云南禪寺雲輿庵全殊侍者文明十五對安富新兵衛尉寄子澤村平左衛門借物自文明十五事質物家文書如約束可請返之由申候處難遊云々

小田原衆所領役帳云太田新十郎知行百六十七貫百文江廣澤村三ヶ村百二十三貫貳百文同志村廿一統衆百八十五貫文同岩瀬五ヶ村(中略)以上九百卅一貫二百八十四文新六郎書上被申員數辻但此外私領之内ヲ自分寄子衆ニ配

ノ罪科ニ仰付ラルヘキ條下知聊背問敷旨ヲ誓紙仕ル也

○親方

毛利家記云秀元心ヲ盡サセ給ヒ一命ノ惜キコトヲモ思給ハス秀就ヲ取立ント心ヲ研カセ給ヒシニ秀就卿其御志之厚深ナルコト露計モ思アタラセ給ハス結句親方カマシクシテ六借キヤウニ思ヒ給シコトヨク愚ニオワシケリ

初井日記云合戰條宗長公ノ御武邊御若年ニテ名譽トテ賞翫アサカラスト感心致サレ色々御音物進セラレ中國當家ノ御本領ノ國並ヒニテ大分ノ欠地ヲ武具領トテ御合力アルヲ國衆ハ元就公ニ似タハ親方顔セラレ許ヨ推參ノ勸キヨトサマ々々ニ申候

又云武略天ノ運ニ叶ヒテ首尾調ヒ候ハ波多野家ノ弓矢ハ古今第一ニテ天下ニ並フ者ハナク候然レハ天下ノ指南ハ自ラ屋形氷上殿ノ手ニ入ラルニテ候當家カ何程親方ノ筋目アルトモ天下カ何トテ手ニ入ヘキ云々

○親分

毛利家記云甲州ハ長門殿ノ親分ト云位階ト云長門ヨリ打上ツテ居給フヘキコトナルニ謙テ臣下ノ如ク仕給ヒテ自

當御書立

又云六十一貫六百五十文三木古庭山中寄子宮本彌四郎四拾一貫百七十五文一宮内山中寄子福岡十兵衛四十貫百廿六文三走水富塚寄子吉岡與次郎

太閤記云先生吉晴は尾州上郡供御所人也父は堀尾中務少輔吉久とて國人三十六人の内にして尾州上四郡の沙汰を知り侍りぬ(中略)初は秀吉卿の寄子として信長公へつかへ奉りしか秀吉卿江州横山の城を取巻居られし時戦場の事なるに因て堀尾も横山に在番せしより秀吉の臣と成て江州長濱にして百五十石領せしより飛龍天に在かごとく萬幸長し來て雲隱二州の守護となりて號帶刀先生吉晴云々

甲陽軍鑑云閣本奏者就別人企訴訟又望他之寄子之條奸濫至也自今以後可停止此旨具以載先條一畢又云自分之訴訟直不可致披露就寄子訴訟可致奏者一事勿論也雖然依時宜可有遠慮歟沙汰之日之事者如載先條寄子親類縁家等申趣一切可禁遏

又云甘利寄子の米倉丹後鎗を十三度あはせ頭數のおほき中に手柄の高名八ッあり云々
松隣夜話云氏康大ニ悦ヒタマヒ謙信ノ手書ヲ得ル者ナラ

ハ定テ器量ノ侍ナルヘキトテ即被ニ召拘ニ扶持ヲ可レ被下
トアリケレトモ聊所存候條御扶持ノ義ハ先辭退申上候何
者ノ寄子ニ成トモ被ニ仰付候ヘ云々

増補家忠日記云慶長七年十一月八日松平三郎四郎遠州掛
川ヨリ江戸ニ來テ本多佐渡守正信ヲ以テ上聞ニ達ス召テ
西九ニ登テ大神君ニ謁ス寒天ノ參府御威ノ仰ヲ蒙ル本城
ヨリ來レル者誰カ在ノ由御尋ノ處ニ青山七右衛門尉候ス
即青山ヲ召テ釣命ニ曰隱岐守定勝カ三男遠州ヨリ來テ台
徳院殿ニ仕ント欲ス是則我寄子ナルノ由ヲ命有テ同朋善
阿彌相副ラレ青山七右衛門尉ト共ニ本城ニ登テ大久保相
模守忠隣奏者トシテ三郎四郎始テ台徳院殿ニ謁ス
○烏帽子親

平治物語云牛若生年十六ト申承安四年三月三日曉鞍馬
ヲ出テ東路遙ニ思立心程コソ悲ケレ其夜鏡宿ニ着夜更テ
後手ツカラ髪取上テ懷ヨリ烏帽子取出シヒタト著テ打出
給ヘハ陵助早御元服候ケルヤ御名ハ何ト問奉レハ烏帽子
親モナケレハ手ツカラ源九郎義經トコソ名乗侍レト答テ
打連絡テ黃瀬河ニ著テ北條ヘ寄ラント宜シヲ云々
るほし折云うしわかとのは聞召けんしのもの元の門いて
に先祖のらうとうにあふたる事のめてたさよとれるほし

をきるには二人の親をとるならひのあると申かうしわか
はたれをえほしおやにとらうそしよせんおもひいたした
りわれらか先祖八幡太郎義家は七歳にてやはたへ御参り
有てあれにてけんふくめされ八幡太郎義家と名乗せ給ふ
二男にあたり給ふは賀茂にてけんふくめされかも次郎と
名乗給ふ三男にあたり給ふは天津のしんらへ御まいり有
てしらん三郎殿と名乗らせ給ふと承る其こく牛若もか
たおやをば氏神八まんを取申さうすかたおやをば此年月
すみなれし鞍馬の大悲多もんをとり申さうすたちは多も
んのつるきかたなは八まんとこ、ろさしなはのはしらに
たてをかせ給ひ九つのもとゆひみつからめされ御くし御
はやし有てえほしためつけめされへいしの酒をみつから
うつしたちの前にも三々九度かたなまへにも三々九度
たむけその、ちわか身も御めし有てさもあれ今夜の客人
か名をは何と申けみまうは源九郎しつみやうはよしつね
と申なりと一人ことをしたまひてしきのいはいをうけさ
せ給ふ
又云天あけ、れはうしわかとのえほしためつけめされ吉
次かまへにかしこまつておはします吉次きつと見てくわ
しや殿にはるほしをめして候かそれるほしをきるには二

人のおやをとるならひのあるとかくわしやとのはたれを
烏帽子おやにめされて候そ牛若殿は聞召さん候餘り人々
のえほしめしつれたるかうらやましさにこ、ろならすに
きて候へともおほせのことくいまた名をはつかす候とて
もはや天とも地共父母とも萬事はたのみ申うへいかやう
にも名をつけてめしつかはれ候へ吉次聞てあふこのうへ
はちからをよはす今日よりして御身か名をはきやうとう
たとつけうそやかしこまつて候云々

源平盛衰記云鷲尾三郎一汝ハ鷲尾ノ三郎ト云ヘシ名乗ヲ
ハ我カ片名ニ父カ片名ヲトリテ經春ト付クヘシ片岡ト同
名ナレトモ多キ人ナレハ事カケシ只今烏帽子親ノ引出物
トテ花憐木ノ管ニ白金筒ノ金入タル刀ニ鹿毛ノ馬ニ鞍置
テ赤皮威ノ甲冑小具足付ケテ給フタリケリ
太平記云清氏叛相模守ハ氣分飽マテ修テ行跡尋常ナラサ
リケレ共備ニ佛神ヲ敬フ心深カリケレハ神ニ歸服シテ子
孫冥加ヲ祈ラントヤ思ハレケン又我子ノ烏帽子親ニ可
レ取人ナシトヤ思ケン九ト七トニ成ケル二人ノ子ヲ八幡
ニテ元服セサセ大菩薩ノ烏帽子子ニ成テ兄ヲハ八幡六郎
弟ヲハ八幡八郎トシ名付ケル

結城戰場物語云尊氏御孫かまくらのもちうちの給ひける

は嫡子けんおう丸ことしすてに十三なり元服させんと思
ふてえほしおやにとるへきものなしいか、せんと御し
やうなり上杉あはのかみうけ給て申けるは天下あんおん
國土ふにう成は當家しせいによつてなりしかれとも京都
と御不和の御事しかるひやうも候はすいにしへのいしゆ
をひるかへし京都と御和睦まし〜て若君の御元服都に
て候は、こ、ちいよ〜無事にして當家御はんしやうう
たかひなしと申上たりければ云々

今川了俊書札禮云同ほとの人々聲に成外戚に成るほしお
やにて候には此方よりは片敬の書札可レ然候外戚の方よ
り同輩の返事たるへく候云々
今川記云頼ては元服あり今川新五郎氏親と申奉る其頃豆
州様御改名あり初めは政智と申けるを氏滿と御改ありし
(中略)豆州様を御烏帽子親に頼ませ給ふ故に氏滿の氏と
申字を付させ給ひて氏親と名乗給ふと聞えし

關八州古戦録云千葉結城多常州下妻ノ多賀谷修理大夫重經
モ小田原エ來テ秀吉公エ對顔ヲ遂ク(中略)此後實子虎千
代丸ヲ元服サセ石田治部少輔三成ハ當代ノ機利者ナルマ
マ烏帽子親ト頼ミ左近大夫三經ト更メ領分ノ内總州岡田
豊田下坂島ノ地ヲ割キ與ヘテ渠ヲ結城家ノ合流トナシ云

云

○烏帽子子

平治物語云其時上野の國松井田といふ所に一しゆくせられけるに家主の男をみたまふに大剛の者と覺えければかたらひくし給へりいせの國の目代につれて上野にくたりけるか女に付てとまれる者なればいせの三郎と召れ我るほしこのはしめなれば義の字をさかりにせんとてよしもりと付給へり

吾妻鏡云延應二年四月廿五日己未被評定之退座分限所
謂祖父母養父母子孫相與伯叔父甥從父兄弟小舅夫妻烏帽子子等

かけきよ雙紙云景清こゝろにおもふよふわれらちちの
上總守をけんふくの親にたのませ給ひ忠は我等かちの
忠しければち、ふの重なりゑほし子ゑほし親七生までのき
ゑんとうけたまはつて候になさけなふしけた、の一度見
ゆるしたまはん事は無念なり其儀にて有ならはともし
なふすわか命しけた、とさしちかへともにかにもなら
はやとおもふ心をさきにしてうへなるみのをさつとすて
いつくにかいさいたりけん
異本伯卷者云足利讃岐守ハ相模守貞時カ烏帽子子ニテ貞

氏ト號シ其子高氏ハ赤橋武藏守久時カ掣ト成テ被任治部大輔ケル高氏モ高時カ稱號ノ一字ヲ受ケテ高氏トシ付ケル

太平記云稻村時成愛ニ島津四郎ト申シハ大力ノ聞ヘ有テ賊ニ器量事カラ人ニ勝レタリケレハ御大事ニ逢ヌヘキ者也トモ執事長崎入道烏帽子子ニシテ一人當千ト被憑タリケレハ詮度ノ合戦ニ向ントテ未口々ノ防場ヘハ不被向態ト相模入道ノ屋形ノ邊ニ被置ケル

又云師冬自御烏帽子ニ候シ諷方五郎初ハ祝部ニ屬シテ城ヲ責候シカ城ノ弱リタルヲミテ抑我執事ノ烏帽子子ニテ父子ノ契約ヲ致シテカラ世舉テ背ケハトテ不義ノ振舞ヲハ如何カ可致云々

建内記云嘉吉元年六月十八日癸未富樫介加賀守逐電云々日來違時宜被仰出事違背申之故云々三寶院可繼家歎云々後日弟兒喝食令遺俗繼家管領京兆烏帽子子云々

見聞雜錄云池田帶刀太郎正元とて義詮の代に到て攝州守護代箕浦次郎左衛門申立て池田庄給り夫より今勝政筑後守迄十一代の勇士也細川右京大夫勝元已來管領細川家の烏帽子子にて勝の字を付たり

會津四家合考云盛氏盛氏ハ累代終ニ不被領ニ仙道長沼ヲ押領セラレテヨリ白河ノ義親モ幕下ニ屬ス縁昵ト成レリ其後那須ノ邊マテ大方此人ニ心ヲ寄相馬モ烏帽子子ト成テ昵近ノ中ト成

蟠川親俊記云天文十一年十二月十八日甲午並木將監子烏帽子名與三郎一荷兩種到來之太刀遣之

○乳母子

松原自休手録云永祿四年信長家康合體ニシテ替元ノ字被改家康ニ氏真聞之以使節各之家康乳ノ母子酒井雅樂思慮アル人ニテ不破之云々

○支配

江濃記云尊氏卿義詮卿二代の將軍につかへ武家の政道を補佐し子孫四職の其一に撰はれ京極殿と稱し近江國十三郡の中八郡を六角知行し五郡を京極方に支配す明德年中より京極殿又大名に成て出雲隱岐飛騨半國を知行し其勢惣領家にまさりけり

東亂記云箱根早川抑此度京鎌倉不和ト成ケル濫觴は持氏關東中ノ禁中ノ御料京方ノ所帶等御支配ノコト不可然ト諫メ中ケレハ云々

大友與廢記云龍道寺隆たかのふか首はかこ島において義久

寶檢のとき迄も首のいきほひ有り義久心得てしやうきをさりて寶檢の時首のせいきえてけりその、ちたかのふかはなべしまか、の守支配なり

關八州古戦録云柿崎和泉守金山ノ横瀬雅樂助成繁ノ足輕大將金井左衛門佐遠候ノ爲トテ兼テ廣澤ノ茶磨山ニ岩ヲ架ヘ居タリケルカ中略柿崎和泉守手ノ者ヲ走シメテ誰ニテモアレ馬上ノ推參心得難シ若亦近隣ノ地頭ナントノ使者ニテモ侍ルニヤト尋ケレハ金井答テ某ハ新田ノ家人金井左衛門佐トテ此山ノ番所ヲ預リ警固ノ者ニテ侍ル是ヨリ足利マテハ横瀬長尾兩家ノ支配入組ノ地續ナリ軍勢甲乙人亂妨狼藉セサル様ニ下知アラルヘシト返答シタリケル

○張本人

吾妻鏡云元暦元年八月二日戊午大内冠者飛脚重參着申云去十九日酉剋與平家餘黨等合戰逆徒敗北討亡者九十餘其内張本四人富田進士家助前兵衛尉家能家清入道平田太郎家繼入道等

又云文治二年九月十五日戊午梶原刑部丞朝景去夜自京都歸參是去年被撰遣勇士於廿六箇國之時所向土佐國也件國如嚴命沙汰鎮之參上今日召御前尋洛中

事等一給先豫州逐電之後沙汰次第並同意置事具言上又申云春三月之比召一郡盜張本平莊司丹波國住人被禁置左獄一餘人競來切破彼獄一庄司已下犯人悉遁出訖仍別當家仰廷尉等雖一搜一尋諸方不出來而八月十一日朝景擣獲也同廿一日將一參大理門下令請一取廷尉云々

又云建仁三年十二月廿五日己未夜討人亂一入伊勢國守護一其張本為一進士行綱一之由義盛申之

又云建仁四年五月六日戊辰朝政飛脚重到來去月廿九日到一伊勢國一平氏雅樂助三浦盛時並子姪等構一城郭於當國六箇山一數日雖一相支一朝政厲一武勇之間彼等防戰失利敗北凡張本若菜五郎城郭構處謂一伊勢國日永若松南村高角關小野等一也遂於一關小野一亡一其命云々

又云承元元年六月廿二日丙寅坊門亞相信濃使者參著所被一進一仁和寺御室令旨一也是紀伊國土民等亂一入高野山一企一狩獵一押一坊寺領一和泉紀伊國守護代為一其張本一為一關東御沙汰一可一被一止一狼藉一之趣有寺門愁訴之間御室以一伴金剛峯寺所司等狀一被一仰一合坊門一仍又被一傳一申其旨云々

又云建保元年二月十六日丁亥依一安念法師白狀一謀叛輩於一所々一被一生一虜之云々凡張本百二十餘人伴類及一二百人云々可一召一進其身一之旨被一仰一國々守護人等一

又云承久三年六月廿八日辛巳伊豫國住人河野入道相一從當國勇士一合戰之間為一一方張本一仍可一討罰一之由武州下知國中不與一河野一之輩等云々

又云弘長元年六月廿二日壬子未剋取方兵衛入道蓮佛平左衛門尉盛時等於一龜谷石切谷邊一生一虜駿河前司義村之子息大夫律師良賢一是依一有謀叛之企一也駿河八郎入道式部大夫並野本尼若狹前司已下其張本數輩云々依一之鎌倉中騷動入一夜近國御家人等馳參云々

太平記云交野後基關五月二十七日東使兩人資朝俊基ヲ具足シ奉テ鎌倉ヘ下着ス此人々ハ殊更謀叛ノ張本ナレハ驍テ誅セラレヌト覺シカトモ俱ニ朝廷ノ近臣トシテ才覺優長ノ人タリシカハ世ノ譏リ君ノ御憤ヲ憚テ嗷問ノ沙汰ニモ不レ及只尋常ノ放召人ノ如ニテ侍所ニソ預置ケル

又云新田左兵衛佐元來張本ノ輩ハ申ニ不レ及古ヘ新田義貞ニ忠功有シ族今畠山入道々誓ニ恨ヲ含ム兵竊ニ音信ヲ通シ類ニ媚ヲ入テ催促ニ可レ隨由ヲ申者多カリケレバ云々

柴田退治記云勝家嫡男柴田權六佐久間支蕃助者最前驅一越前府中山林一生捕來為一後證一引一廻隣國方々城一權六於一江州佐和山一誅一之支蕃助今度矛楯張本人而罪多故車一渡洛中一於一六條河原一誅一之云々

○頭取
天正記云柴田權六佐久支蕃介今度てたてのてう本人としてとかおほしかるか故にくるまにて洛中をわたす

○頭取
初井日記云丹後ニテハ内藤筑後守同名筑前守與射右京渡邊彈正成合備中熊谷傳左衛門白松左近田邊平左衛門等カ反逆ノ頭人ニテ候但馬ニテハ出石源太左衛門白井備後熊谷越中綿貫兵部飯島左衛門白井石見寺井左京香川主馬等カ頭取ニテ謀反ニ候ナリ

○肝煎
康富記云永享十年八月十五日丁卯石清水八幡宮放生會也(中略)御臺様御棧敷於一東廻廊一被一構一之有御見物一路次又有御棧敷一云々凡御共上下公武盡一善盡一美不レ逸一委記一者也扈從殿上人兼日飛鳥井中納言雅世卿同少將雅親為一御肝煎一用意之處輕服事出來俱輕服人不レ被一憚一之例有之明徳度重服人尙以被一參一之例在之問何様哉兼日有御沙汰一所詮可一為一神慮一之由被一仰出中山相公被一參一石清水社頭一被一取一御圍一之處輕服可一被一憚一之由見一御圍一云々仍雅世卿代都護卿可一被一參一之雅親代實勝朝臣被一構一者也

初井日記云信長細井波家名代使者對面一村井長門萬事ノ肝煎ニテ候馳走

衆取持衆モ大勢將軍ヨリノ仰セトテ出ラレテ候

又云同次今度和義ノ御禮申上ル義殊ニハ羽柴殿肝煎分ト申シカタ一以テ明智殿瀧川殿等ハ前々ヨリ弓矢ノ御遺恨ヲモ受テ候ヘハ本意ナクモ又ハ憤リニ存セラル、旨モ有ヘキカ云々

甲陽軍鑑云弱過たる大將の事付兩上杉本間井又は北條家へうつる此本間井又を北條衆も一入しりしたため大藤近石二人の肝煎をもつて大道寺殿奏者にて氏康公へ禮を申上る

松隣夜話云信長工夫ヲ以テ加賀松任ノ城主長ト云剛強ノ武士ニ種々追從ヲシ味方ニ付ケ此者カ肝煎ヲ以テ越中ノ神保治部テズサ掣ニ取兩人ニソクロヲ飼謙信ニ楯ヲツカセ越後ノ手當ニ仕置

又云江間カ欠所三ケ一ヲ分ケテ白屋監物ニ被一付是ハ初メ江間退治ノ膽入悉皆監物相計ユヘナリ

水野勝成記云伊井兵部殿前廣より御取次の事候間御同前に肝煎候て兵部殿へも此よし被一仰越一可一被一下候と申候

192
55

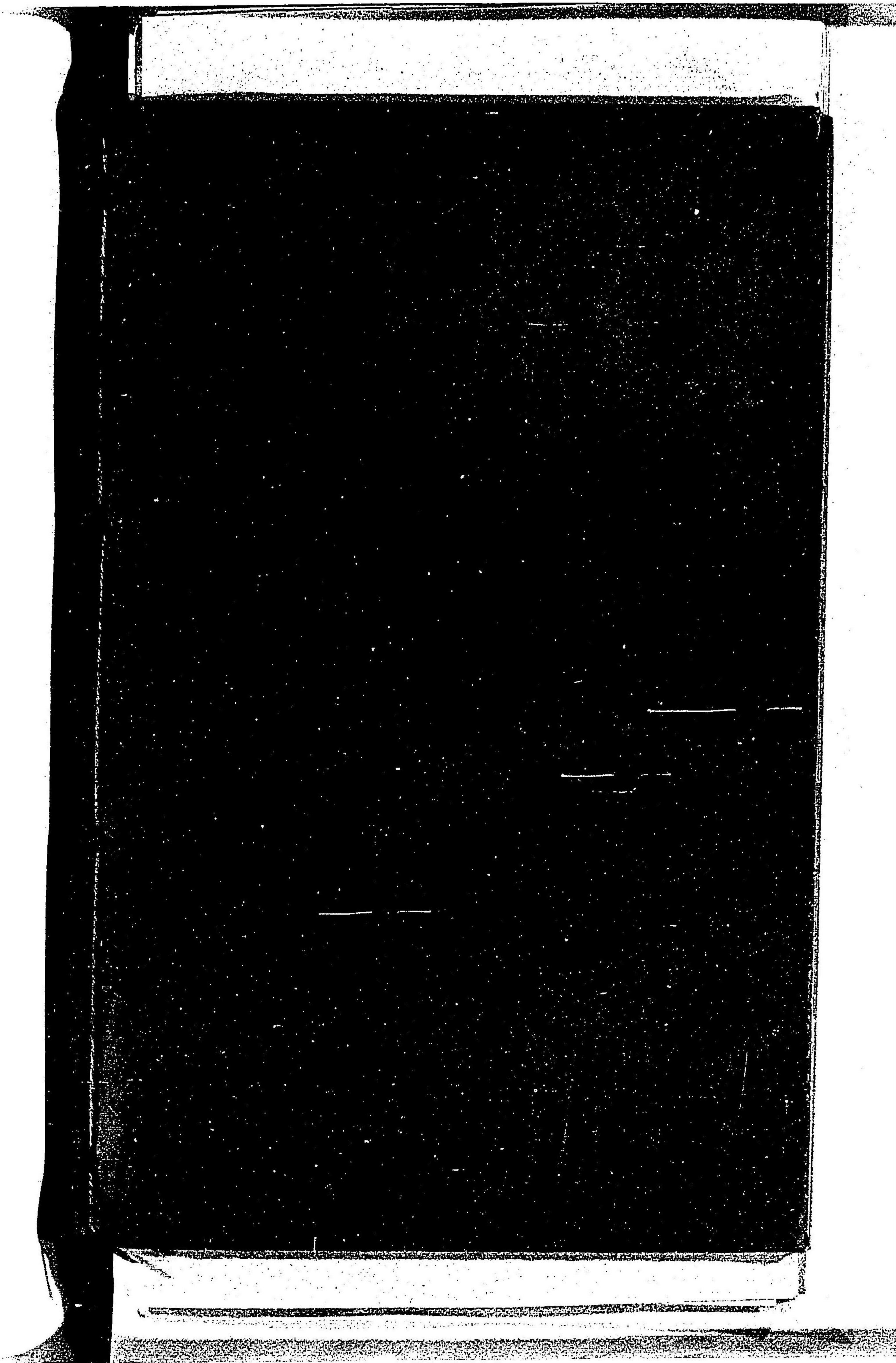
稱呼部十五下

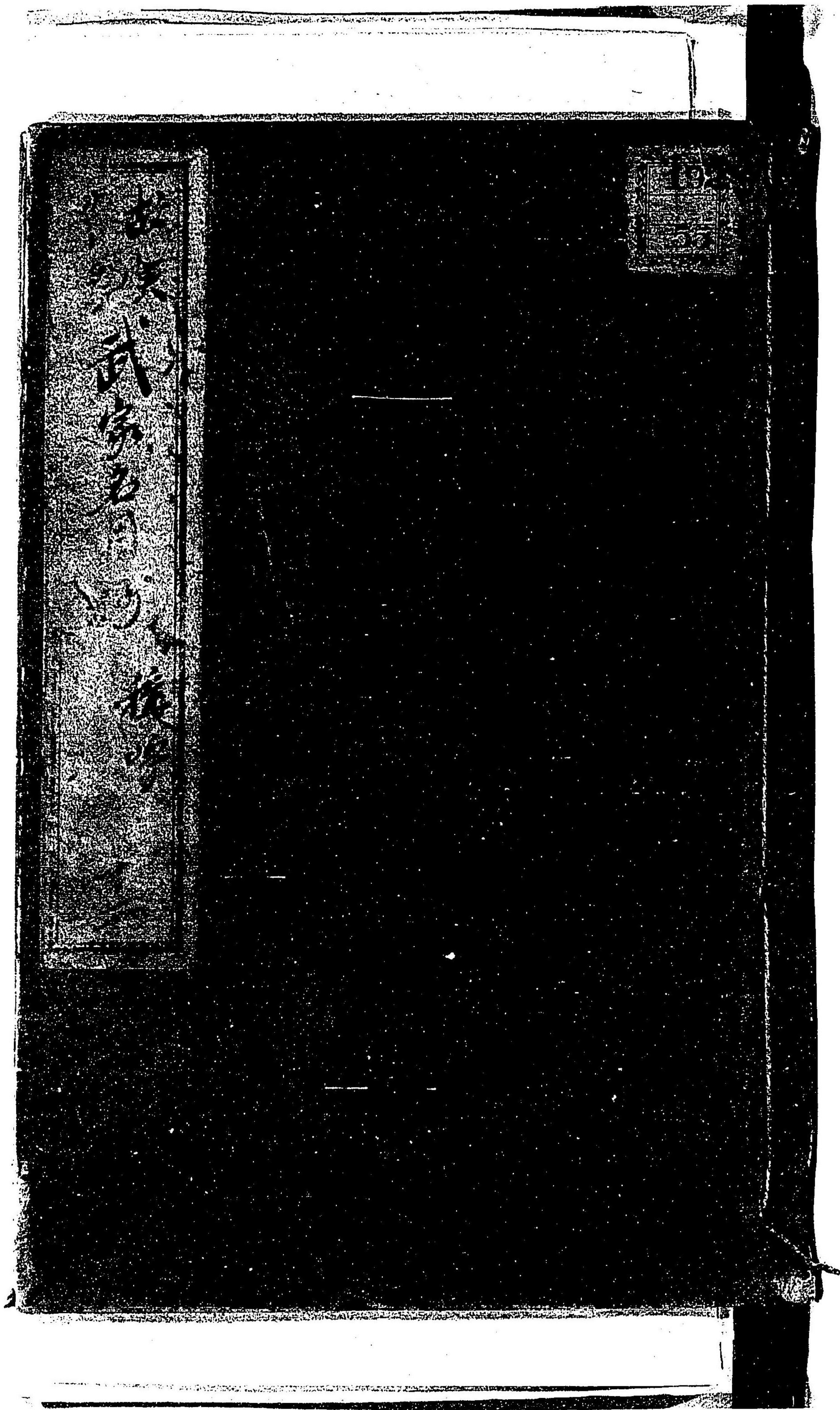
千三百六十四

192
55

Handwritten notes and sketches on the right page, including a series of small bird-like symbols and cursive text.

Handwritten notes and sketches on the right page, including a series of small bird-like symbols and cursive text.





武家

Small square label in the upper right corner of the cover, containing illegible text.